

江迎町文化財調査報告書 第1集

ひろ く ぼ
広 久 保 遺 跡

1998

長崎県江迎町教育委員会

江迎町文化財調査報告書 第1集

ひろくほ
広久保遺跡

発刊にあたって

このたび平成9年度実施いたしました江迎町広久保遺跡発掘調査の結果を報告書として発刊することになりました。江迎町は本陣跡や江迎宿駅跡など史跡が多い町です。日本一の千灯籠祭りをはじめ長坂浮立、キネカケ祭りなど多くの民俗文化財にも恵まれています。今回の広久保遺跡の調査によって、町内の文化財に貴重な埋蔵文化財を加えることができました。発掘調査によって県北で初めて検出された煙道付き炉穴は、縄文時代の古い時期に南九州との密接な関わりを想像させる重要な遺構でした。遺跡から出土した土器は今から約8000年前という古い土器が含まれていました。このように町内では太古から人間の営みが行われたことがわかったのです。江迎町では今後もさらに文化財の保存に努めるとともに、開発との調整を図っていきたいと思います。

最後に調査にご協力いただきました県教育委員会ならびに地元関係者のみなさんに感謝を申し上げ、発刊の挨拶といたします。

平成10年3月

江迎町教育長 森田正徳

例　　言

1. 本書は、長崎県北松浦郡江迎町栗越（くりこし）免の広久保（ひろくぼ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、江迎町の国営農地再編事業に伴う平成8年12月の範囲確認調査の結果、縄文早期の包含層を確認したことから、本調査を平成9年11月19日～12月22日に実施した。
3. 調査は江迎町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が実施した。
4. 土器の実測にあたっては小林利恵子の協力をえた。石器の実測は荒木美保、中村弘子、松尾美代子、近藤千鶴、黒川英子、渡邊康行が担当し、トレースは渡邊が行った。遺構・遺物の製図は斎藤いづみがおこなった。
5. 本書の写真は、石器については新野貴昌がおこない、その他は古門がおこなった。
6. 本書の執筆は川道 寛、小松 旭、古門雅高、渡邊康行がおこなった。それぞれの分担は目次に示したとおりである。
7. 放射性炭素年代測定は(株)古環境研究所に委託した。
8. 本書の刊行にあたっては九州歴史資料館の杉原敏之氏にお世話になった。また、石材の認定は長崎大学教育学部の長岡信治氏の御教示によっている。記して謝意を表します。
9. 本書の編集は古門・渡邊による。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1 (古門)
第Ⅱ章 発掘調査の組織と構成	1 (ノ)
第Ⅲ章 広久保遺跡周辺の地理的環境	2 (小松)
第Ⅳ章 広久保遺跡周辺の歴史的環境	4 (ノ)
第Ⅴ章 調査の概要	
第1節 広久保遺跡の立地	10 (古門)
第2節 範囲確認調査	11 (ノ)
第3節 本調査	13 (ノ)
第Ⅵ章 遺構	15 (ノ)
第Ⅶ章 遺物分布	16 (ノ)
第Ⅷ章 出土遺物	
第1節 旧石器時代から縄文時代草創期の遺物	17 (川道)
第2節 縄文時代の石器	18 (渡邊)
第3節 広久保遺跡出土土器	35 (古門)
第4節 茶園遺跡出土の縄文早期土器	41 (ノ)
第IX章 総括	
第1節 煙道付き炉穴について	42 (古門)
第2節 手向山式土器について	44 (ノ)
第3節 岐宿町茶園遺跡の縄文早期の土器について	46 (ノ)

挿図目次

第1図 北松浦郡江迎町周辺の表層地質図および地盤断面図 ($S=1/100,000$)	3
第2図 標高別の遺跡分布図	4
第3図 時代別の遺跡分布図	7
第4図 広久保遺跡周辺地形図 ($S=1/5,000$)	10
第5図 広久保遺跡試掘調査地および本調査地 ($S=1/2,000$)	12
第6図 広久保遺跡本調査区設定図 ($S=1/240$)	13

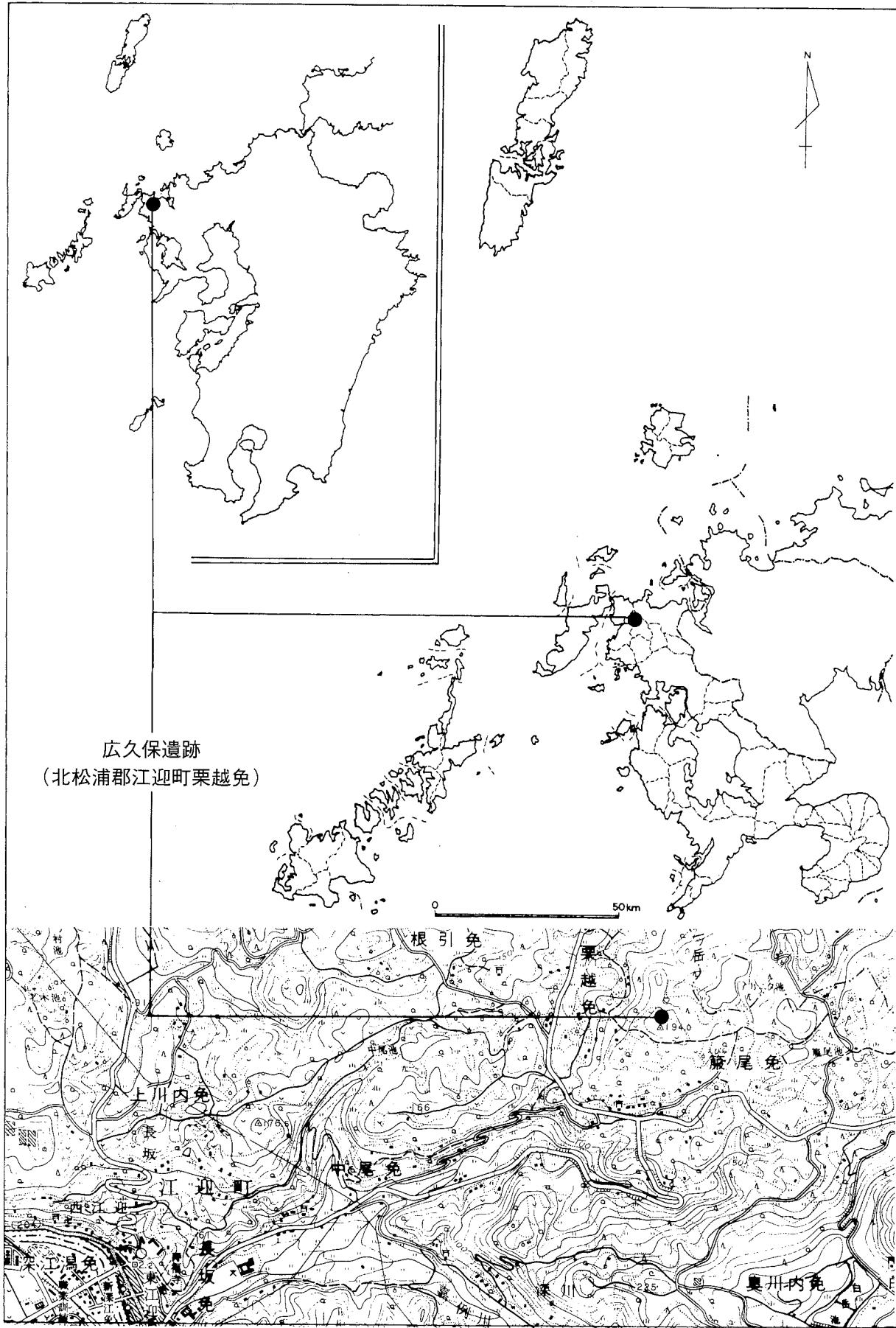
第7図	広久保遺跡土層図 (S=1/40)	14
第8図	集石遺構実測図 (S=1/15)	15
第9図	煙道付き炉穴実測図 (S=1/30), 出土石器実測図 (S=1/2)	15
第10図	煙道付き炉穴と集石遺構の位置関係 (S=1/60)	16
第11図	広久保遺跡出土土器分布状況 (S=1/200)	16
第12図	広久保遺跡出土の旧石器・縄文草創期の石器 (S=2/3)	17
第13図	広久保遺跡出土の縄文時代石器① (S=1/2)	21
第14図	広久保遺跡出土の縄文時代石器② (S=1/2)	23
第15図	広久保遺跡出土の縄文時代石器③ (S=1/2)	24
第16図	広久保遺跡出土の縄文時代石器④ (S=1/2)	25
第17図	広久保遺跡出土の縄文時代石器⑤ (S=1/2)	27
第18図	広久保遺跡出土の縄文時代石器⑥ (S=1/2)	29
第19図	広久保遺跡出土の縄文時代石器⑦ (S=1/2)	30
第20図	広久保遺跡出土の縄文時代石器⑧ (S=1/2)	31
第21図	広久保遺跡出土の縄文土器① (S=1/2)	36
第22図	広久保遺跡出土の縄文土器② (S=1/2)	37
第23図	広久保遺跡出土の縄文土器③ (S=1/2)	38
第24図	茶園遺跡出土の縄文土器① (S=1/2)	39
第25図	茶園遺跡出土の縄文土器② (S=1/2)	40
第26図	茶園遺跡出土の縄文土器③ (S=1/2)	41
第27図	鷹野遺跡の15号炉穴実測図 (S=1/30)	43

表 目 次

第1表	石器集計表	19
第2表	石器観察表①	33
第3表	石器観察表②	34

図 版 目 次

図版 1	51
図版 2	52
図版 3	53
図版 4	54
図版 5	55
図版 6	56
図版 7	57
図版 8	58
図版 9	59



遺跡位置図

第Ⅰ章 調査に至る経緯

長崎県北松浦郡江迎町栗越免に所在する広久保遺跡は1983（昭和58）年に長崎県教育厅文化課による分布調査により発見され、その存在が知られることとなった。平成6年7月、県文化課では、江迎町が国営農地再編事業として町内で事業化した8箇所のうち、栗越（くりこし）、猪調（いのつき）、小川内（こがわち）の3箇所において範囲確認調査が必要との回答を行った。また、平成8年度の「ふるさと古代遺産保存継承事業」の対象地として上記の3箇所を選定し範囲確認調査を行った。

範囲確認調査の結果、猪調・小川内地区では試掘坑から遺物包含層を確認することはできなかった。しかし、栗越地区では広久保正樹氏所有の畑を中心に約430m²の範囲で遺物包含層が確認された。また、栗越地区の他の部分は19世紀初頭の開発や昭和40年代の土砂採取により多くが削平を受けていることもわかった。本調査は遺物包含層が確認された部分について平成9年11月19日から12月22日にかけて行った。

第Ⅱ章 発掘調査の組織と構成

1. 範囲確認調査の調査組織

- | | |
|----------|--|
| (1) 事業主体 | 江迎町経済課 |
| (2) 調査主体 | 長崎県教育厅文化課 |
| (3) 調査担当 | 長崎県教育厅文化課
係長（副参事） 藤田 和裕
文化財保護主事 古門 雅高
文化財調査員 東 貴之 |
| (4) 調査協力 | 江迎町教育委員会
教育次長 森下 武彦
社会教育係長 綿川 勝英
江迎町経済課
課長 末永 衛
耕地係 松永 好人 |
| (5) 調査期間 | 平成8年12月9日～12月20日 |

2. 本調査の調査組織

- | | |
|----------|--|
| (1) 事業主体 | 江迎町経済課 |
| (2) 調査主体 | 江迎町教育委員会 |
| (3) 調査担当 | 長崎県教育厅文化課
文化財保護主事 古門 雅高
文化財保護主事 小松 旭 |
| (4) 調査協力 | 江迎町教育委員会
教育次長 森下 武彦
社会教育係長 綿川 勝英
江迎町経済課
課長 末永 衛
耕地係 松永 好人 |
| (5) 調査支援 | 渡邊 康行 |
| (6) 調査期間 | 平成9年11月19日から12月22日 |

第III章 広久保遺跡周辺の地理的環境

1. 北松浦半島の地質

北松浦半島の基盤層は新生代第三紀の約4,000～5,000万年前に堆積した水成岩である。その後、40～50万年前に火山活動が活発化し、多量の流動性溶岩（玄武岩）を噴出した。これが松浦玄武岩である。江迎駿尾・草ノ尾・根引・御厨・南田平などに広がる標高200m前後の赤土の台地は熔岩台地の表面である。

北松一帯の噴出した溶岩は、冷却する時に縦に結晶を生じた。これを玄武岩の「柱状節理」という。この節理の隙間には水が侵入しやすく水を蓄える。これが湧き水となり、自然の溜池として利用された。本遺跡のように熔岩台地上の各遺跡はこれら溜池を利用して付近に存在していると考えられる。また、溶岩台地の火山岩・水成岩でできた洞穴・岩陰がよい生活空間となって福井洞穴（吉井町）や岩下洞穴（佐世保市）などの県北に集中する洞穴遺跡ともなっている。ただ、この玄武岩の節理を通った水は浸透して地すべりを発生させることもある。「北松型地すべり」と呼ばれるものがこれである。過去には江迎町鷺尾岳周辺や松浦市木場地域などで大規模な地すべりが発生している。

北松浦半島最大の断層は佐々川断層で、佐世保炭田の中央部を半島の北東から西南に走っている。落差は南部で最大1,000mにもなり、西側には放射状の派生断層をともなう。この西部の断層は大陸の収縮運動の横圧力の作用でできた小刻みなももので潜竜・猪調・平野・小佐々・向土場などの各断層名で呼ばれるものである。西部が複雑な断層をもつに対して、東部は比較的水平で変化に乏しい地層をもつ。また、伊万里湾内の鷺島と福島間の海底では落差は400～500mと減少している。

2. 江迎町の地質

北松浦半島の基盤層が新生代第三紀の砂岩・頁岩であることは前述の通りであり、これらは佐世保層群と呼ばれる。これらの地層には、粗粒砂岩・砂岩層・石炭層を伴う泥炭層の周期層が45層あり、59枚の石炭層をもつ。これらは古い層から次のように分類される。最下層である相浦層は佐々・吉井・潜竜間に広がる。中里層は江迎大野・江里峠一帯、柚木層は猪調から江迎川沿いに広がる。砂質頁岩・砂岩を主とし凝灰岩薄層をはさむ世知原層は江迎平野・志戸氏一帯、福井層は江迎山の田付近の地層で福井洞穴を構成する砂岩がこれである。淡水性の貝化石を含む野島層は江迎町中心部に広がる。佐世保層群の最上部には加勢層と呼ばれる海成層がある。これら地層は海浸と陸地の隆起・沈降を繰り返しながら堆積した。この後、大陸方面からの横圧力により断層と褶曲が形成された。そして、河川等の浸食により準平原化した後に熔岩台地が形成された。熔岩台地の基底部と第三紀層との間には八ノ久保砂礫層と呼ばれる厚さ数mから20mの堆積層がある。この熔岩台地の冷却後、江迎川・佐々川・福井川などの浸食が始まりV字状の浸食谷を形成した。この江迎川の浸食は基盤の第三紀水成岩（砂岩）に達している。

3. 北松浦半島の地形

北松浦半島は肥前半島の西北部に位置し、海岸線の複雑さと大小無数の島々と港湾をもつ。これは新生代更新世中葉に行われた沈降運動によりできたリアス式海岸である。行政範囲としては佐世保市・平戸市・松浦市と北松浦郡（江迎町・世知原町・吉井町・佐々町・小佐々町・鹿町町・田平町・福島町・鷺島町、上五島を除く）である。

4. 江迎町の位置及び地形

江迎町は北松浦半島の西部に位置し、北は松浦市及び田平町、南は佐々町、西に鹿町町、東は吉井町に接する。一部は開けて江迎湾となり、平戸海峡をへだてて平戸島をのぞむ。平野部は少なく、江

迎川の三角州が町の中心部を形成している。総面積は32.07km²。総人口は6,612人（いずれも平成7年10月1日現在）。近世においては宿場として栄え、平戸藩主の参勤交代や長崎出張の際に宿泊した江迎本陣跡は県指定文化財となっている。広久保遺跡の所在する栗越地区は江迎町の北部に位置し、北は松浦市と接する。調査対象地の標高は約190～200mで、広い溶岩台地上の平坦地となっている。



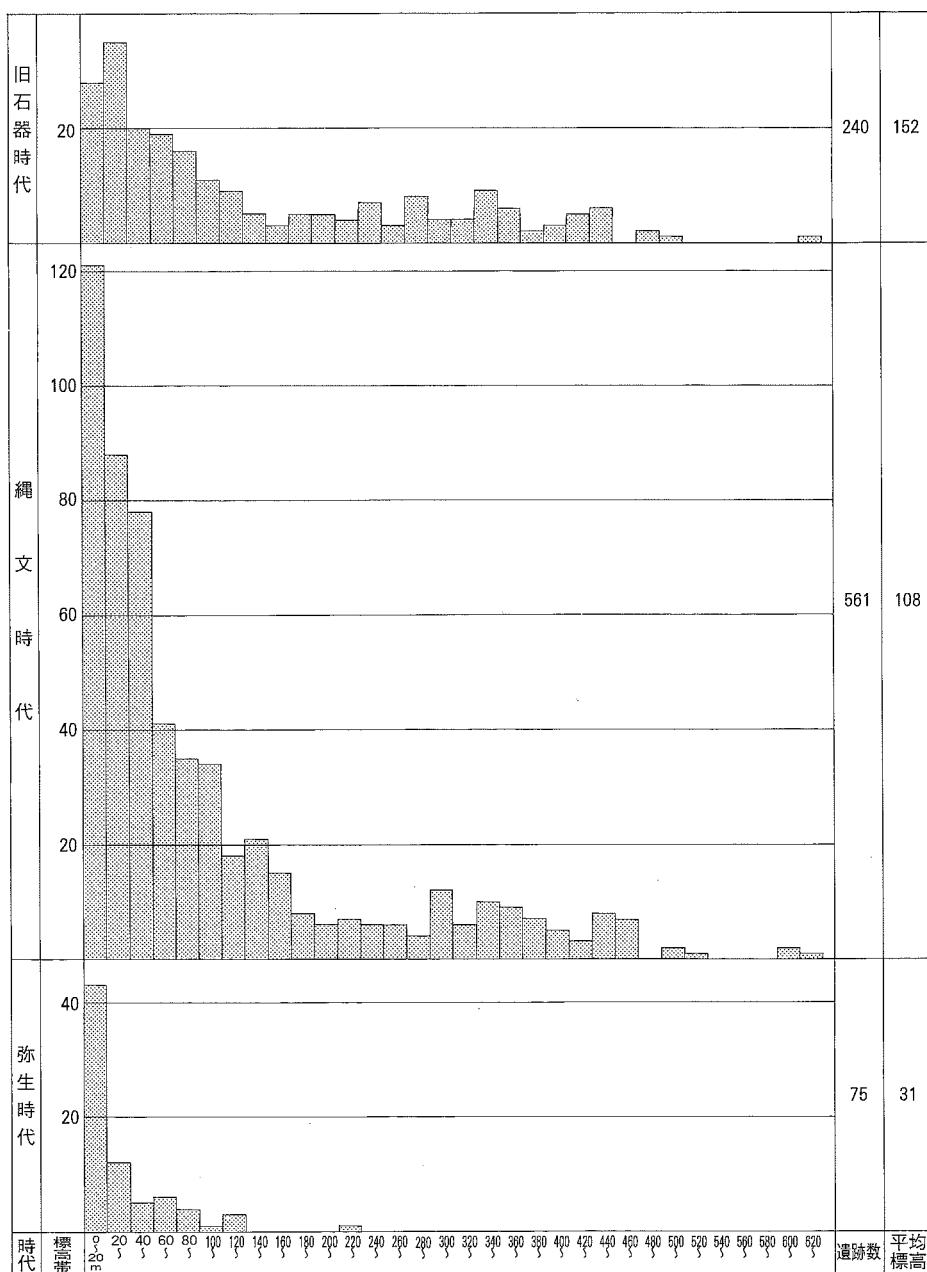
第1図 北松浦郡江迎町周辺の表層地質図及び地盤断面図 ($S=1/100,000$)

第Ⅳ章 広久保遺跡周辺の歴史的環境

1. 遺跡の分布

長崎県北部の遺跡数は現在約900となっている。このうち旧石器と縄文の遺跡が全体の約80%を占める。

この理由として、川道寛は「旧石器・縄文時代の基本的な生産様式が狩猟・採取という獲得経済であったために、一定の範囲をテリトリーとして季節的な移動を繰り返したため、小規模なキャンプサイト的な遺跡が数多く残された」としている（川道1997）。分布状況を標高別にみてみると旧石器・縄文各時代の遺跡は表中にみられるように低標高地だけでなく、標高200mから標高500mまでの範囲で各5～10遺跡と平均的に存在する。このことは川道のいう「キャンプサイト的遺跡」が高標高域まで広く分布していたことを物語っている。一方、弥生時代に入ると生産手段が限定されるためか、遺跡数は激減し分布に大きな変化がみられ、標高0～20mに集中する。理由としては、県北部は標高の高い山岳が少なく、広大な平野部をもたない。そのため食糧生産のための生活空間が限られ、小河川周辺の低標高地に地域的限定をみられると考えられる。古墳時代も同様の傾向がみられる。ただ、中世においては各地における肥前松浦党の割拠の拠点となった山城が多くみられるため、遺跡の分布に変化が見られる。



第2図 標高別の遺跡分布図

並ぶ洞穴遺跡の宝庫である。

泉福寺洞穴（佐世保市）は麻生優を中心に10年にわたって調査が行われた。世界最古級の豆粒文土器が出土したことであまりにも有名であり、一括遺物は平成8年に国の重要文化財に指定されている。調査では、福井洞穴で確認された隆起線文土器文化層に先行する豆粒文土器文化層の発見と、爪形文土器文化層に後出する押引文土器文化の発見で、細石器を伴う4つの文化層が検出された。また、この泉福寺洞穴の調査に参加した者たちが現在の埋蔵文化財行政の中心として各地で活躍している。

岩下洞穴（佐世保市）は10枚の文化層が確認され、土器は条痕文・押型文・無文・轟式・曾畠式・阿高式など、石器は1,000点を越える石鏃が出土している。この調査の成果としては、縄文早期・前期の生活面を把握し、生活の場と埋葬の場が同じ洞穴内に共存していたことを明確化したことがある（麻生1967）。下本山岩陰（佐世保市）では岩下洞穴とは異なり、石鏃の点数は70数点と少ない。また、ヤスや刺突具、釣針などの骨角器や、解体具が出土している。この釣針の起源を渡辺誠は朝鮮半島にもとめ、西北九州型結合釣針と呼んでいる（渡辺1984）。また、種類は報告されていないが骨角器の中では21個と貝輪の出土が最も多い（麻生1972）。

姫神社遺跡（松浦市）は縄文土器の形式変化を証明した貴重な遺跡である。すなわち、轟式期と曾畠式期の時期的先行性は長い間論じられたところであるが、轟式が曾畠式に先行することを証明した。

つぐめのはな遺跡（田平町）は81点もの石鏃の出土が特徴的である。これは海岸に面する遺跡の立地と鯨・海豚などの大型海獣骨の存在から、この遺跡が漁業拠点であったことを示していると考えられる（正林・村川1986）。前目遺跡（田平町）は轟式土器が出土している。石鏃・搔削器が多く見られることからつぐめのはな遺跡と同様の性格をもつ遺跡と考えられる。

佐世保市針尾島産の黒曜石は石器生産の原石として知られており、原産地を発掘した貴重な例である針尾島遺跡（佐世保市）では多くの原石が出土した（高野・副島1982）。

この他には岩谷口岩陰（世知原町）小嶋遺跡（松浦市）などで調査が行われている。

4. 弥生時代の遺跡

根獅子遺跡（平戸市）は大規模な埋葬施設をもつ遺跡である。西北九州型弥生人と称される「低・広顔」傾向の縄文的特徴をもつ20体以上の人骨が出土している。特にこの遺跡を有名たらしめたのは頭頂部に銅鏃のささった刺傷痕がある女性人骨の存在である。このことは青銅器の武器としての使用として注目されている。

津吉遺跡（平戸市）はドングリ貯蔵穴が3基検出し、この貯蔵穴から青鮫・猪などの動物遺体が出土している。これはこの遺跡が弥生時代に入てもなお縄文的生活を残し、狩猟・漁撈を食糧獲得の手段としてもっていたことを示している（萩原1986）。

宮の本遺跡（佐世保市）では前期末の板付II式と中期前半の城ノ越式の二つの時期を中心とする墓地群が存在することが明らかとなっている（久村1980）。前期末は伸展葬、中期前半は屈葬と埋葬形態が分かれている。また、計測可能な石棺14例のうち、東枕のもの10基・西枕のもの4基で、久村によると「東西に揃えるという自然法的な約束があつたらしい」という。

里田原遺跡（田平町）は鋤・鍬等の農耕具や手斧・よきなどの多数の木器の出土遺跡として知られる。これまでの調査で水門・数十基のドングリ貯蔵穴などの遺構も検出されているが、未だ住居址、水田耕作址は未発見である。

四反田遺跡（佐世保市）は縄文晩期から弥生前期にかけての集落遺跡であり、「縄文晩期夜臼式段階と弥生前期後半の板付II式段階の住居址がみられる。板付II式段階の住居址は朝鮮半島忠清南道の松菊里（ソングンニ）遺跡に起源をもつ松菊里型とよばれる二本柱をもつ小型のものと4本以上の柱をも

つ大型のものの新古の2形式に分かれる。また朝鮮系無文土器も出土している(久村1994)。この遺跡の調査結果は「初めて西北九州の弥生文化の実態を明らか」にした点で重要である(西谷1993)。また、2本柱の松菊里型の竪穴住居跡は馬込遺跡(平戸市)でも5棟みられる。

栢ノ木遺跡(松浦市)は弥生中期から後期の埋葬遺跡である。箱式石棺3基と甕棺3基が検出され、出土の内行花文鏡は舶載品と考えられている(正林1973)。

5. 県北の支石墓

県北における支石墓に関する遺跡は8箇所報告され、県内における最密集地域である。

里田原遺跡(田平町)では現在3基残っているが地域の信仰の対象となっていることもあって調査は行われていない。また、痕跡をとどめる所も数ヶ所で見られる。田助遺跡・津吉遺跡・馬込遺跡(とともに平戸市)において支石墓ないしはその痕跡が確認されている(萩原1995)。

発掘調査の例は4遺跡である。特に小川内・大野台・狸山は狭い平野部をのぞむ丘陵上に存在するという立地条件に共通性がみられる。小川内支石墓群(江迎町)では10基が確認されている。すべて箱式石棺を下部構造にもち、副葬品から縄文終末期に編年されている(坂田1978)。

大野台遺跡(鹿町町)では4群70基以上が確認されている。縄文晚期から弥生前期後半にかけて営まれた墓地群である。ほとんどが石棺を下部構造にもつが土壙墓をもつものもある。

狸山支石墓(佐々町)は箱式石棺を下部構造としてもつが、これは我が国における最初の発見である。2基が調査され、鰯節形大珠が出土している(森1969)。

四反田遺跡(佐世保市)は縄文晚期から弥生前期にかけての集落遺跡である。板付II式段階の壺棺を下部構造にもつ支石墓が1基検出されている(久村1992)。

近年、川道寛が宇久松原遺跡の報文において西北九州全体を概観した支石墓についての考察を行っている(川道編1997)。

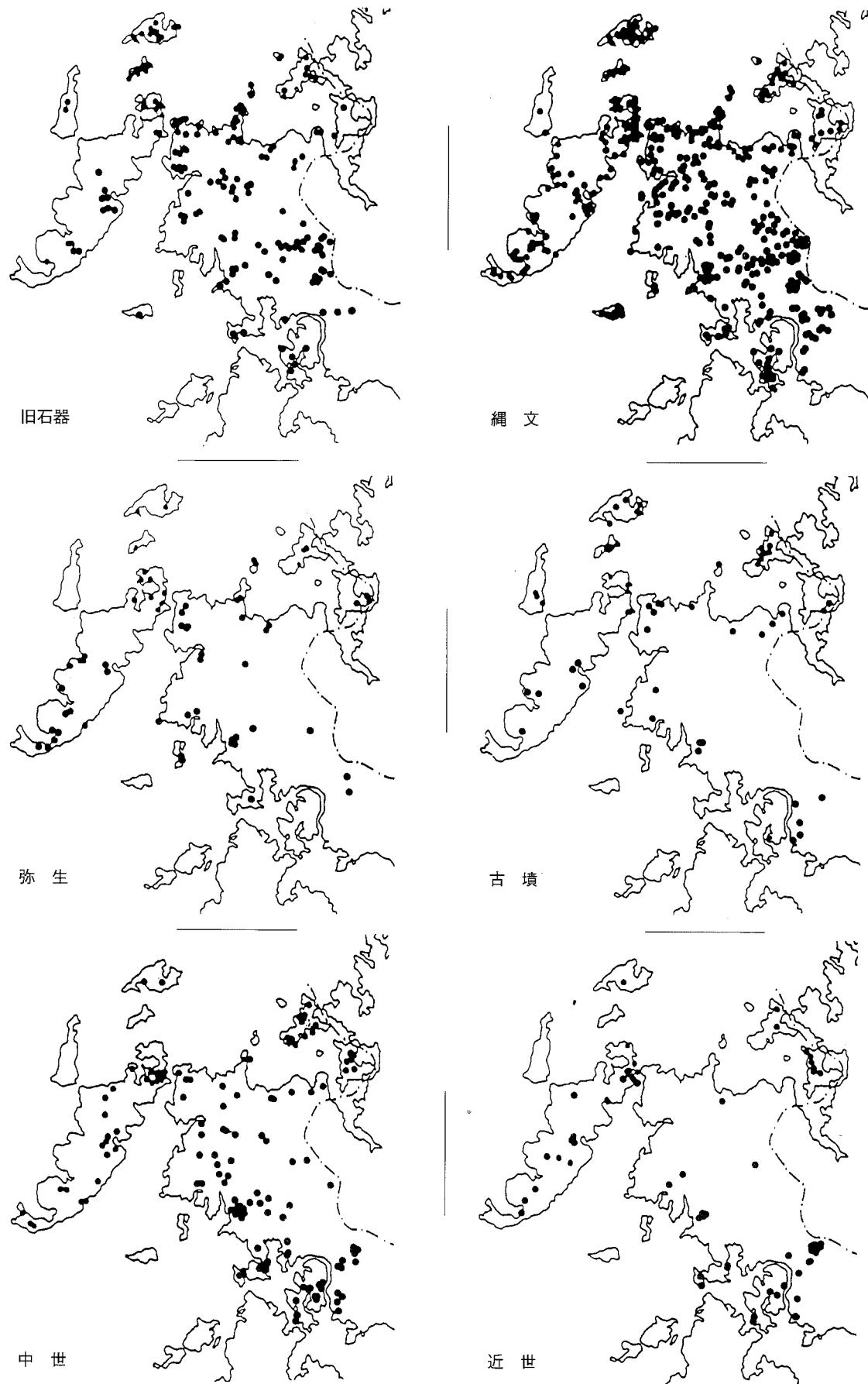
6. 古墳時代の遺跡

長崎県北部の古墳は大きく二つの類型がある。一つは笠松天神社古墳のようにその土地を支配した在地系の豪族の墳墓と考えられているもの。もう一つは北九州や朝鮮半島・中国大陸との交流に活躍したであろう海人集団の首領の墓と考えられるものである。特に海人集団の首領の墓は彼らの拠点であった島の浦々に位置し、小規模ではあるが副葬品は貴重なものをもっている。

笠松天神社古墳(田平町)は全長34m以上、後円部の直径22mの前方後円墳で里田原遺跡の南方の丘陵上に位置している。埋葬施設については竪穴式石室か石棺であったと思われ、周溝はもない。本古墳はこの地域を支配した在地系豪族の墓と考えられている(藤田1989)。

一方、岳崎古墳(田平町)は周辺に平坦部をもたず、壱岐水道に面した台地上に位置する。全長56m以上、後円部は25mの前方後円墳である。本古墳は海上交易に活躍した人物の墓と考えられる(藤田1992)。なお、平成9年度には県文化課により主要遺跡内容確認調査が行われており、その調査結果が注目される。笠松天神社と岳崎は県北部を代表する前方後円墳である。

勝負田古墳(大島村)は5世紀代築造で箱式石棺を内部主体にしていったようである。田助遺跡(平戸市)では田助古墳から半肉彫式獸帶鏡などの中国鏡と勾玉などが出土している。てぼ神古墳(佐世保市)は小型円墳で单室横穴石室をもつ。副葬の須恵器蓋から7世紀初頭から中葉の後期古墳である(久村1971)。松ヶ崎古墳(佐世保市)は小型円墳で箱式石棺が内部主体であり副葬品に直刀をもつ(久村1976)。小嶋古墳群(松浦市)も7世紀後半の小円墳である。平戸市度島にも6世紀後半から7世紀初期にかけての小型円墳が7基確認されている。他には鷹島町に4基(宝ヶ峯古墳群など)、福島町に2基。生月町に上骨棒古墳群(鬼塚古墳)など数基が所在する。



第3図 時代別の遺跡分布図

以上のように県北部には（上五島を含めて）海岸沿いの丘陵地に小型円墳が点在している。それらは北九州との交易や朝鮮半島の交流に活躍した海人集団の首長の墳墓と考えられる。岩下洞穴（佐世保市）でも高杯などが出土しており、祭祀遺跡の可能性も指摘される（麻生1968）。

「註」

註1 本稿で取り扱う県北とは行政的には佐世保市・平戸市・松浦市・北松浦郡（五島列島を除く）の鷹島町・福島町・田平町・江迎町・鹿町町・吉井町・小佐々町・佐々町・世知原町である。

註2 参考・引用文献の後の頁についてはその参考・引用文献の頁をさす。

「引用・参考文献」

- 麻生優 1967『岩下洞穴』佐世保市教育委員会

麻生優 1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会 38~39頁

麻生優編 1972『下本山岩陰』佐世保市教育委員会

安楽勉他 1974『里田原遺跡』略報II 長崎県文化財調査報告書第18集 長崎県教育委員会 50~56頁

安楽勉 1976『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第25集 長崎県教育委員会

安楽勉 1992『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第5集 田平町教育委員会

小田富士雄 1983「長崎県・大野台遺跡」「九州考古学研究」弥生時代編 学生社 177~201頁

蒲田泰彦 1971「長崎県の地質のおいたち」「長崎県の地学」-日曜巡検ガイドブック-長崎県地学会

川道寛 「地域概説」(県北)『原始・古代の長崎県』資料編II 1997 長崎県教育委員会 4頁

川道寛 1995「平戸の古墳文化・第2節箱式石棺」「平戸市史』自然・考古編 平戸市史編さん委員会 445~451頁

坂田邦洋 1978「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告」「古文化談叢」 155~173頁

正林護・田川肇 1972『里田原遺跡』(図録) 長崎県文化財調査報告書第14集 長崎県教育委員会

正林護 1973『栢ノ木遺跡』(中間報告) 松浦市教育委員会

正林護 1983『大野台遺跡』鹿町町文化財調査報告書第1集 鹿町町教育委員会

正林護・村川逸朗編 1986「つぐめのはな遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報IX』長崎県文化財調査報告書第82集

正林護・村川逸朗 1988『里田原』田平町文化財調査報告書第3集 田平町教育委員会 16~22頁・129~131頁

正林護 1997「栢ノ木遺跡」「原始・古代の長崎県』資料編II 長崎県教育委員会 155~160頁

正林護 1997「里田原遺跡」「原始・古代の長崎県』資料編II 長崎県教育委員会 109~117頁

正林護 1997「勝負田古墳」「原始・古代の長崎県』資料編II 長崎県教育委員会 35~37頁

副島邦弘 1993「九州における洞穴遺跡」「佐世保市相浦川流域遺跡分布調査報告書」佐世保市教育委員会

高野晋司編 1987「前目遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報X』長崎県文化財調査報告書第86集 1~48頁

高野晋司・副島和明 1982『針尾人崎遺跡』長崎県文化財調査報告書第60集 電源開発株式会社・長崎県教育委員会

中田敦之編 1988『小嶋古墳群』松浦市文化財調査報告書第4集 松浦市教育委員会

長崎県企画部統計課編 1997『平成9年(第44版)長崎県統計年鑑』

長崎県教育委員会編 1995『長崎県遺跡地図-佐世保市・平戸市・松浦市・北松浦郡・東彼杵郡地区』長崎県文化財調査報告書第119集

西谷正 1993「西北九州の弥生文化と四反田遺跡」「佐世保市相浦川流域遺跡分布調査報告書」佐世保市教育委員会 76~77頁

日本の地質 『九州地方』編集委員会編 1992 『日本の地質9』九州地方

萩原博文・渡辺誠他 1986『津吉遺跡群発掘調査報告書』平戸市教育委員会

萩原博文・松下孝幸 1995『平戸の弥生文化』『平戸市史』自然・考古編 平戸市史編さん委員会 383~394・405~439頁

萩原博文 1995『平戸の弥生文化』『平戸市史』自然・考古編 平戸市史編さん委員会 381頁

久村貞男 1971「てぼ神古墳調査報告」「佐世保市文化科学館文化財報告』2 佐世保市文化科学館

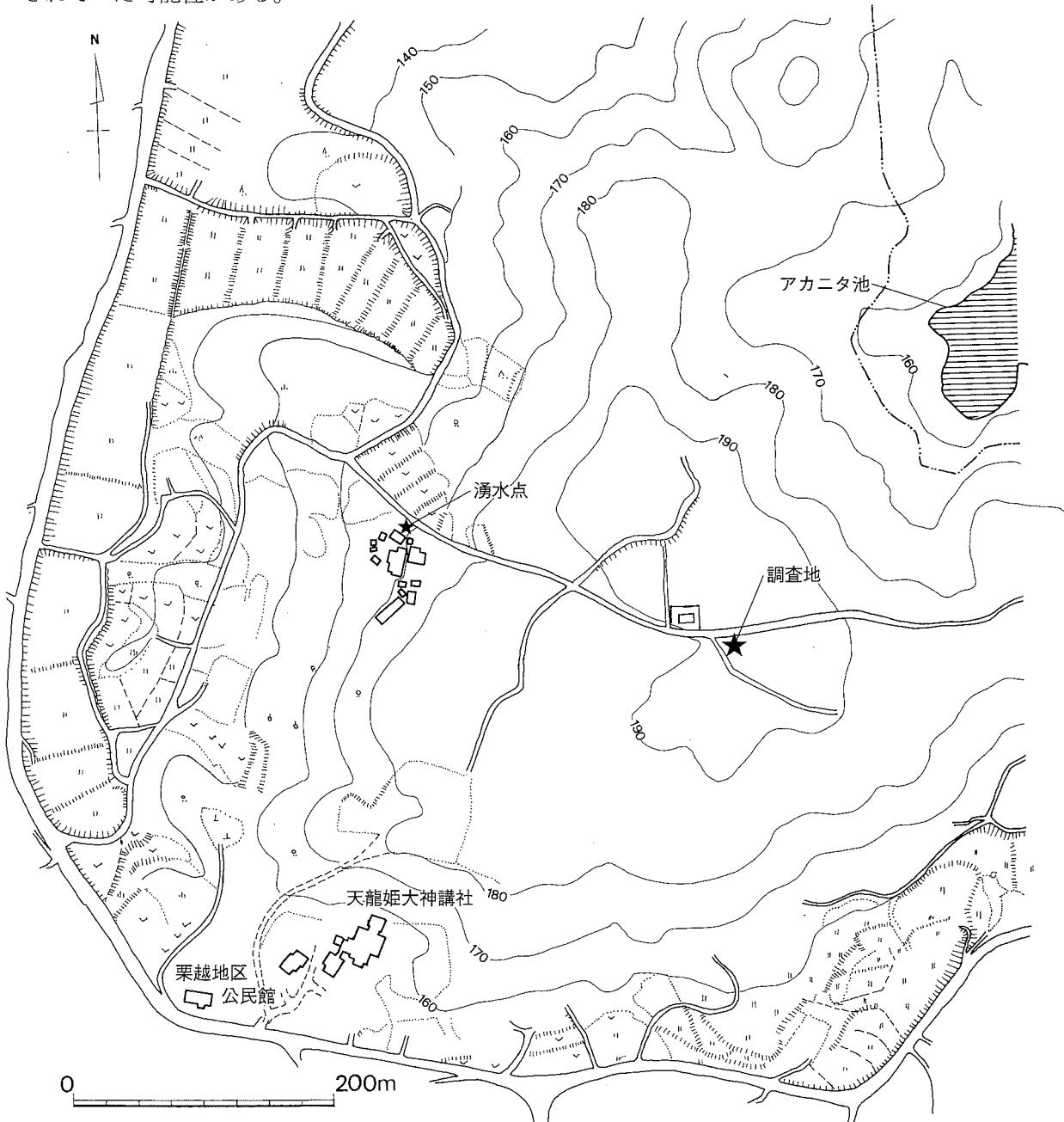
久村貞男 1976「松ヶ崎古墳緊急調査報告」「佐世保市文化科学館文化財報告』IV 佐世保市文化科学館 1~6頁

- 久村貞男 1980『宮の本遺跡』昭和55年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 佐世保市教育委員会
- 久村貞男 1992『四反田遺跡発掘調査概報』平成3年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 佐世保市教育委員会
- 久村貞男 1994『四反田遺跡発掘調査報告書』平成5年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 佐世保市教育委員会
- 久村貞男 1997「岩下洞穴」『原始・古代の長崎県』資料編II 長崎県教育委員会 197~202頁
- 久村貞男 1997「てぼ神古墳」『原始・古代の長崎県』資料編II 長崎県教育委員会 250~253頁
- 久村貞男 1997「松ヶ崎古墳」『原始・古代の長崎県』資料編II 長崎県教育委員会 246~249頁
- 藤田和裕 1976「笠松天神古墳」「里田原遺跡」長崎県文化財調査報告書第25集 長崎県教育委員会 81~82頁
- 藤田和裕 1989「笠松天神社古墳」田平町文化財調査報告書第4集 田平町教育委員会
- 藤田和裕 1992「岳崎古墳」『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県文化財調査報告書第106集 長崎県教育委員会 54~56頁
- 水ノ江和同訳 1990「西九州における文化の変遷」『古文化談叢』第22集 九州古文化研究会
- 宮崎貴夫・安楽勉 1977『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第32集 長崎県教育委員会
- 村川逸朗 1997「岩谷口岩陰」『原始・古代の長崎県』資料編II 長崎県教育委員会 191~196頁
- 森貞次郎 1969「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論集』
- 渡辺誠 1984『縄文時代の漁業』考古学選書7 雄山閣出版 120~123頁

第V章 調査の概要

第1節 広久保遺跡の立地

広久保遺跡は、江迎町の北東部に位置し、松浦市との境界までは約500mほどの距離にある。二ツ岳から派生する丘陵には標高180mの等高線に沿って東西200m、南北150mほどの平坦部が形成されており、その一帯が広久保遺跡として周知されている。遺跡の東西および南側はなだらかに落ちてゆき、標高160mほどが傾斜変換点となる。遺跡周辺の畠からは、玄武岩片や黒曜石片、石鏃などが容易に表採できる。付近に河川はないが、至近距離にはアカニタ池、籠尾（えびらお）池などの沼沢があり、特にアカニタ池の池底周辺には石器片、弥生土器片、黒曜石片の散布がみられ、アカニタ遺跡として知られている。現在は灌漑用水として利用されている池であるが、往時は人間の生活用水として利用されていた可能性がある。



第4図 広久保遺跡周辺地形図 ($S = 1 / 5,000$)

さらに今回の調査区より西へ30m下ったところの広久保正樹氏宅の庭先には湧水があり、渴水時にも枯渇することはない自慢の湧き水という(第4図)。縄文時代の遺跡立地と湧水点には密接な関係があるようで、本遺跡も例外ではない。

第2節 範囲確認調査

(1) 範囲確認調査の経緯

江迎町は国営農地再編事業として8ヶ所の地区で圃場整備を事業化した。これを受けた県文化課は平成6年7月に、江迎町内で分布調査を実施し、その結果、簾尾(えびらお)・猪調(いのつき)・小川内(こがわち)の各団地については着工前に範囲確認調査が必要との回答を町におこなった。一方、県文化課は平成8年度事業として「ふるさと古代遺産保存継承事業」を予定していたが、その事業対象地として江迎町の上記三地区を選定し、今回の範囲確認調査の実施となった。調査面積は80m²で、期間は平成8年12月9日～20日である。

(2) 範囲確認調査の概要

①調査方法

調査対象地域は丘陵頂部を中心とする12km²であったため、20ヶ所の試掘坑を設定し、実施した。試掘箇所の選定にあたっては、九州農政局が作成した現地現況図の任意グリッドにあわせ、基本的にグリッド交点に設定することとした(第5図)。

②基本層位(第7図)

遺跡の基本層位は耕作土(第1層)の直下に縄文早期末(手向山式段階)の遺物包含層(第2層・黄褐色土層)が残存している。第2層の下には黄褐色粘質土層(第3層)が存在する。遺跡周辺からは旧石器が表採されており、もし旧石器のブロックを含むとすればこの層と思われる。第3層の下には赤褐色粘質土(第4層)が存在する。基盤層である玄武岩の風化土層で、無遺物層である。

③各試掘坑の概要

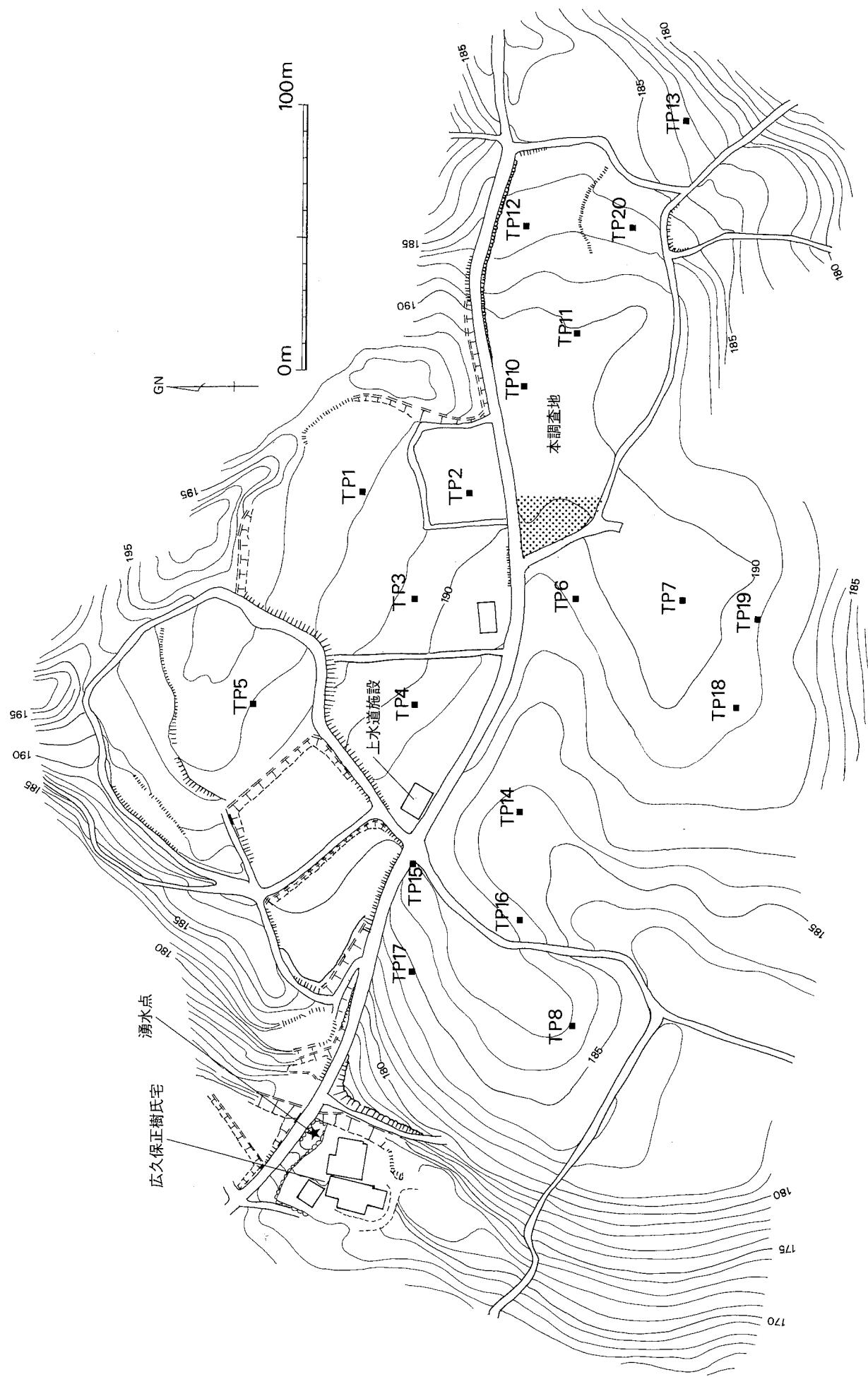
第1～第5試掘坑は道路の北側に設定した。第1～第4試掘坑までの耕作土下は客土であった。客土は1.5m以上に及び、その下は第4層の赤褐色粘質土である。地権者の話を総合すると、昭和40年代に重機を導入して土の採取がおこなわれたということであり、その際にできた掘削坑には丘陵高所をカットし、カットした土をもって充填したという。これが試掘坑の客土となっている。道路北側の丘陵高所にある畑の下は、垂直に落ちており断層状をなしているが、採土工事の際のカット面である。北側丘陵高所に設定した第5試掘坑の土層は基本層位のとおりの堆積を示していた。

第6・第7試掘坑も基本層位どおりの堆積である。第9試掘坑は、遺物包含層である第2層を確認した。包含層である黄褐色土はフカフカとしており、粘質土ではないため、非常に掘りやすい。土中からは玄武岩を主とする剥片や数片の土器が出土した。遺構は確認されなかった。土器は表面が黒色で、外面に山形押型文を施し、2本の隆帯を付している。これらの特徴から縄文時代早期末の手向山式土器の範疇に入るものと考えられた。

第10～第13及び第20試掘坑は場所によって耕作土下の状況は異なるが、概ね基本土層に従った堆積をなす。第10試掘坑は耕作土下に角礫層があり、畑のかさ上げ、ないしは通水のための人工的な遺構かと思われた。近世陶磁器片が出土しており、近世以降のものと考えられる。なお、遺跡周辺の墓碑の観察をおこなったところ、享和・文化・文政などの年号をもつものが古い時期の墓碑であった。したがって遺跡周辺の開発は19世紀初頭前後より始まったものと考えられた。第11・13試掘坑の耕作土下は大きく擾乱を受けていた。

第14～第17試掘坑は道路南側の原野に設定した。包含層である黄褐色土(第2層)が削平を免れ、

第5図 広久保遺跡試掘調査地及び本調査地 ($S = 1 / 2,000$)



薄く残っているところもあったが、遺物の出土はない。

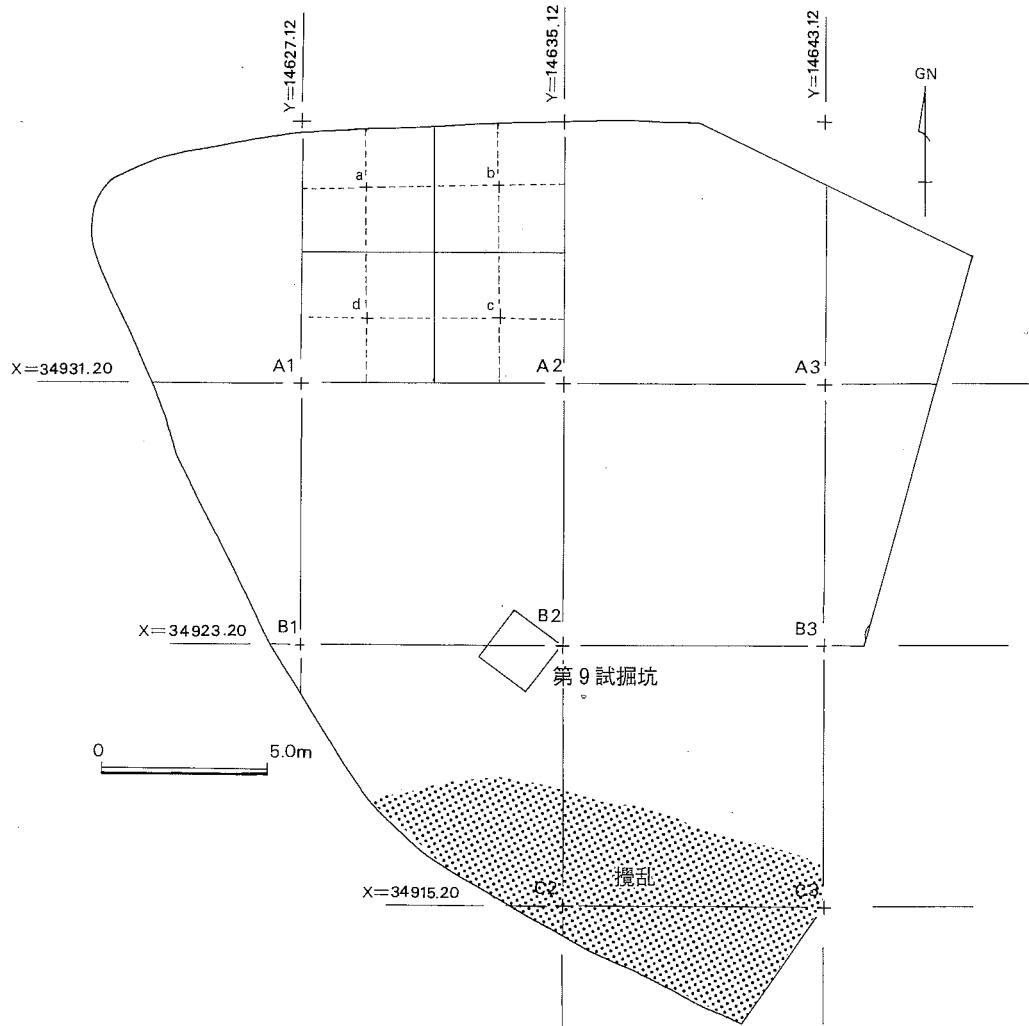
第8・第18・第19試掘坑は山林に設定したものである。畠部や原野部よりも削平・攪乱が及んでおらず、第2層も30cmほど残存しているが遺物の出土はなかった。

また、遺物包含層の広がりを確認するため第9試掘坑をのせた畠に、さらに6ヶ所の試掘坑を設定し、耕作土を除去して包含層の広がりを追った。その結果、包含層ならびに遺物がおよそ430m²の範囲に広がっていることを確認した。

第3節 本調査

(1) 本調査の経緯

江迎町は国営農地再編事業として8ヶ所の地区で圃場整備を事業化した。これを受けた県文化課は平成6年7月に、江迎町内で分布調査を実施し、その結果、栗越（くりこし）・猪調（いのつき）・小川内（こがわち）の各団地については着工前に範囲確認調査が必要との回答を町におこなった。一方、県文化課は平成8年度事業として「ふるさと古代遺産保存継承事業」を予定していたが、その事業対象地として江迎町の上記三地区を選定し、平成6年12月に範囲確認調査を実施した。その結果、栗越免において縄文早期（手向山式段階）の包含層が確認されたため、今回の本調査となった。調査面積は430m²、調査期間は平成9年11月19日～同年12月22日までである。



第6図 広久保遺跡本調査区設定図 ($S = 1/240$)

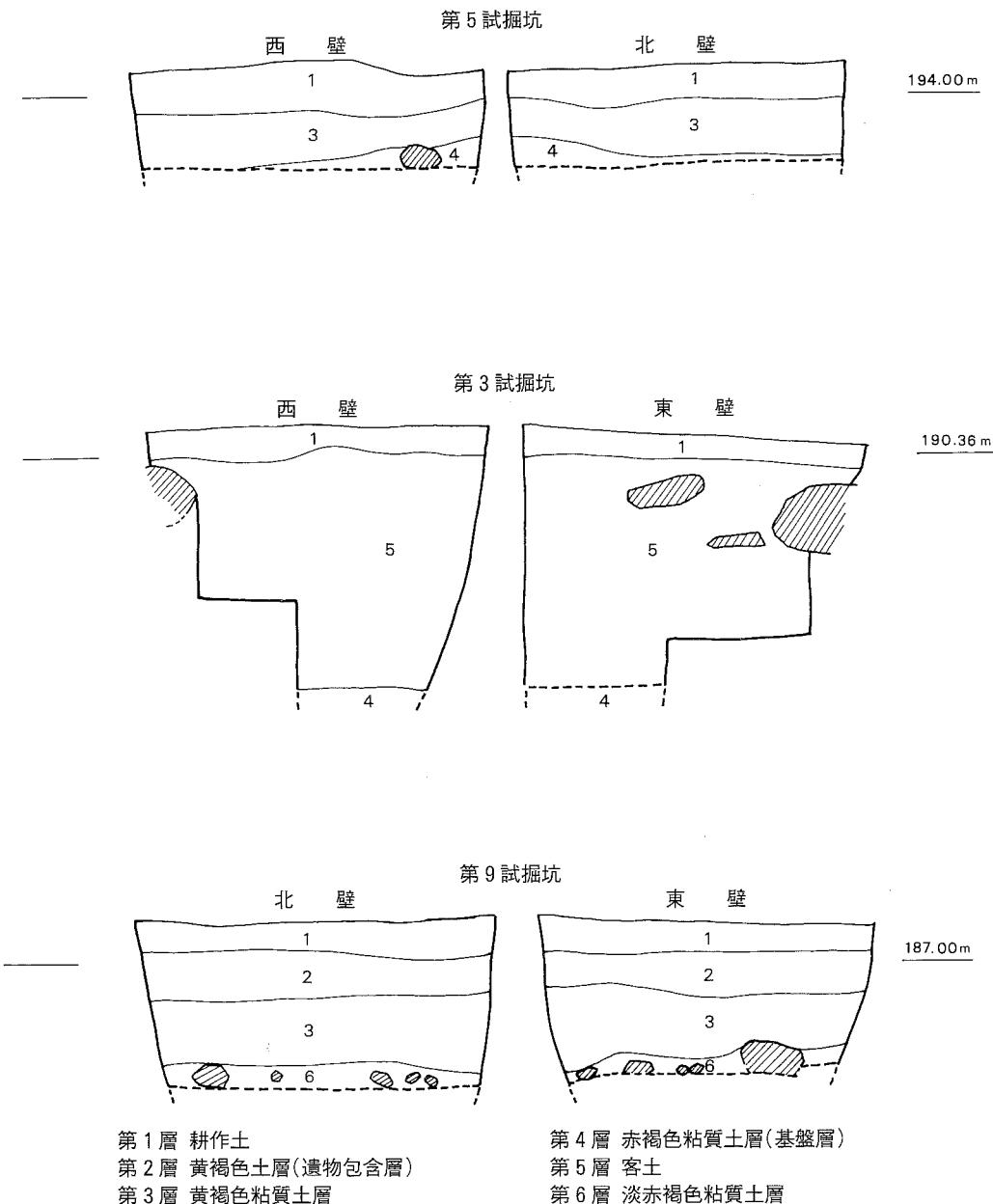
(2) 本調査の概要

① 調査方法

調査はグリッド法でおこなった。グリッドは国家座標 I 系を使用し、 $8\text{m} \times 8\text{m}$ のメッシュを組んだ。南北の杭列にそれぞれ A～D、東西の杭列にそれぞれ 1～4 の番号を与え、個々のグリッド名は南東の杭が示す符合を使用した。それぞれのグリッドはさらに a～d の小グリッド ($2\text{m} \times 2\text{m}$) に分割して遺物をとりあげた。

② 基本層位

遺跡の基本層位は耕作土（第 1 層）の直下に縄文早期末（手向山式段階）の遺物包含層（第 2 層・黄褐色土層）が 30cm ほど残存している。この土層は乾くと粘性がなく、フカフカとしているが、水分を含むと粘性を帯び、赤土となる。礫などは含まず、均質な土層である。分層はできない。第 2 層の下には黄褐色粘質土層（第 3 層）が存在する。厚さは 50～60cm ほどである。漸移層で分層は困難であった。無遺物層である。第 3 層の下には赤褐色粘質土（第 4 層）が存在する。基盤層である玄武岩の風化土層で、無遺物層である。



第 7 図 広久保遺跡土層図 ($S = 1/40$)

第VI章 遺構

1. 集石遺構

B 4 d グリッドの北西で検出した。長軸65cm, 短軸40cm, 深さは10cmと浅い。炭化物と焼土を含んでおり、集石遺構と判断した。使用された石材は玄武岩の亜角礫である。遺物などの出土はなかった。

2. 煙道付き炉穴（連穴土坑）

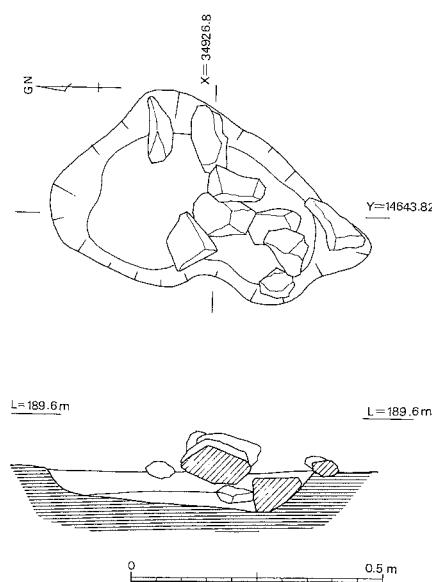
B 3 b グリッドの第2層調査時にグリッド北東部で第3層に切り込んだ煙道付き炉穴を検出した。遺構検出は第2層除去後であった。炉穴は主軸を東西にとり、炉穴を構成する2基の土坑は長軸を南北方向にとり、それぞれの土坑は卵形をなす。二つの土坑はトンネル状の煙道によってつながっていた。東側土坑は長軸132cm, 短軸70cm, 深さ47cmである。一方西側土坑は長軸130cm, 短軸73cm, 深さ66cmである。東側土坑の北壁には段を有し、土坑壁は締まっている。西側土坑はすり鉢状を呈する。いずれの土坑内にも炭や有機物を含む黒色土が充満していた。煙道は長さ55cmで、トンネル状となっている。東西それぞれの煙道入口は、東側が高さ22cm, 幅35cm, 西側が高さ27cm, 幅42cmで、いずれも隅丸方形をしている。いずれの土坑からも焼土は出土しなかった。さらに土坑壁が熱によって焼締まった様子はなかった。前述のように東側の土坑には段があり、西側の土坑はすり鉢状を呈する。このことから東側土坑が足場をもった燃焼部で、焚口であったと推定している。煙道付き炉穴から出土した遺物は細片の土器片と若干の石器である。

3. 煙道付き炉穴と集石遺構の検出状況（第10図）

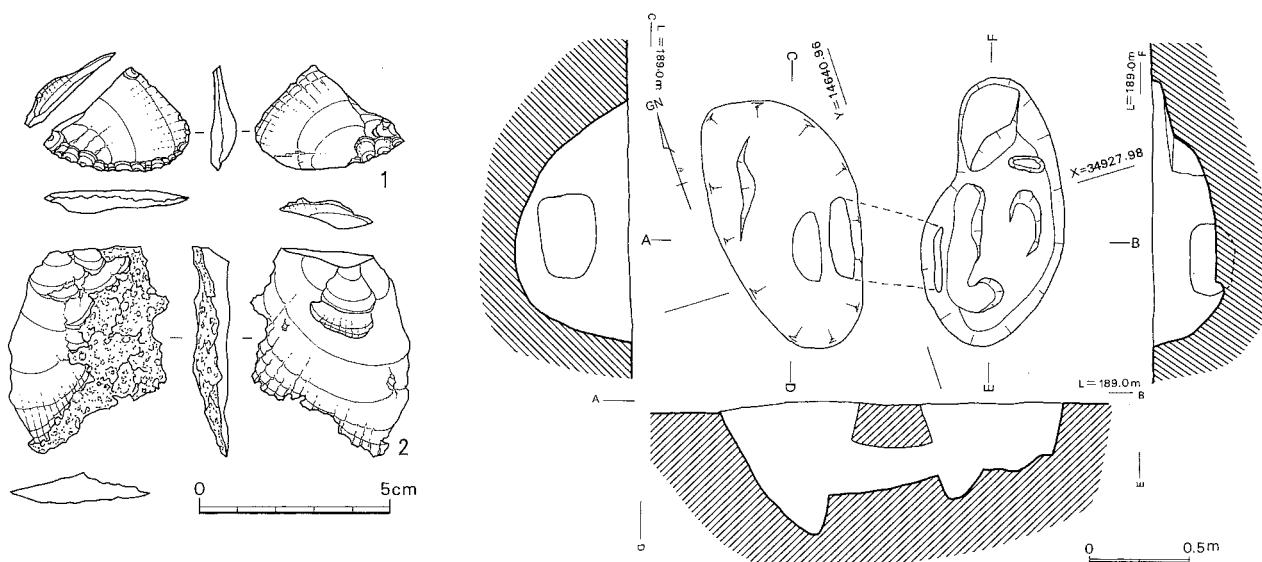
煙道付き炉穴と集石遺構の間は第10図のように3mの距離がある。煙道付き炉穴は包含層（第2層）除去後に、集石遺構は包含層中の下層発掘中にそれぞれ確認した。

4. 出土遺物（第9図、第21図）

土坑覆土中からは削器、剥片各1点と破片4点の計6点が出土した。石質は碎片1点が良質の黒色



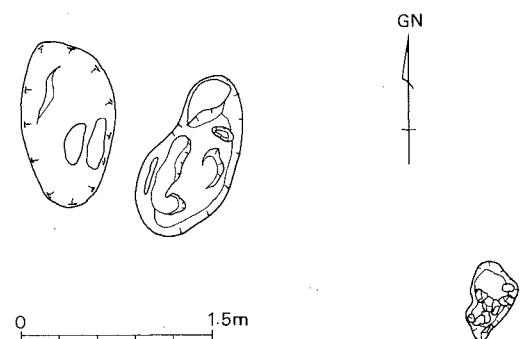
第8図 集石遺構実測図（S = 1 / 15）



第9図 煙道付き炉穴実測図（S = 1 / 30）、出土石器実測図（S = 1 / 2）

黒曜石で、他は無班晶質玄武岩である。1は横長剥片の周縁に規則的な二次加工を施して弧状の刃部を作出した削器である。刃部は片面加工だが、主要剥離面のバルブ付近にも加工が施されており、厚さを感じるためと思われる。長さ27mm、幅39mm、厚さ7mm、重量4.73gを計る。2も無班晶質玄武岩製で、背面の片側に礫面を残す縦長剥片。長さ56mm、幅42mm、厚さ11mm、重量18.38gである。

また土坑覆土中からは第21図9の土器も出土した。

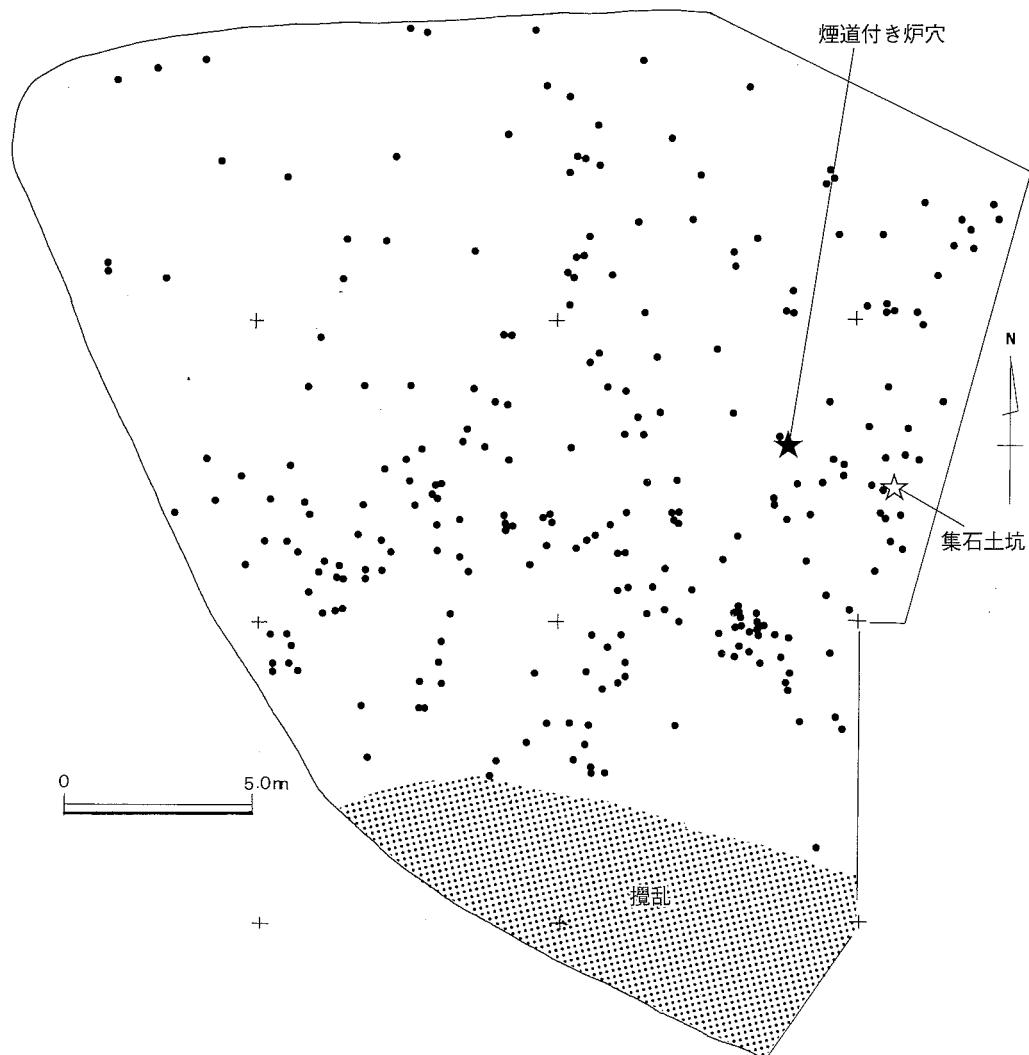


第10図 煙道付き炉穴と集石遺構の位置関係(S=1/60)

第VII章 遺物分布

第11図は調査区における出土土器の分布状況を示したものである。分布図から調査区の北西部から土器の出土が希薄である点と、南東部に若干集中することが指摘できる程度である。その他の地域は偏在性もなく、ほぼ均等に分布している。土器の文様や調整の特徴によって分布に偏りがないか検討したが、有文土器のうち最も出土数が多い山形押型文を施す土器は調査区全体から出土しており、偏在性は認められない。したがって有文土器の大半は同一時期の同一型式である可能性が高い。

なお石器の分布状況も土器の分布状況に類似する。

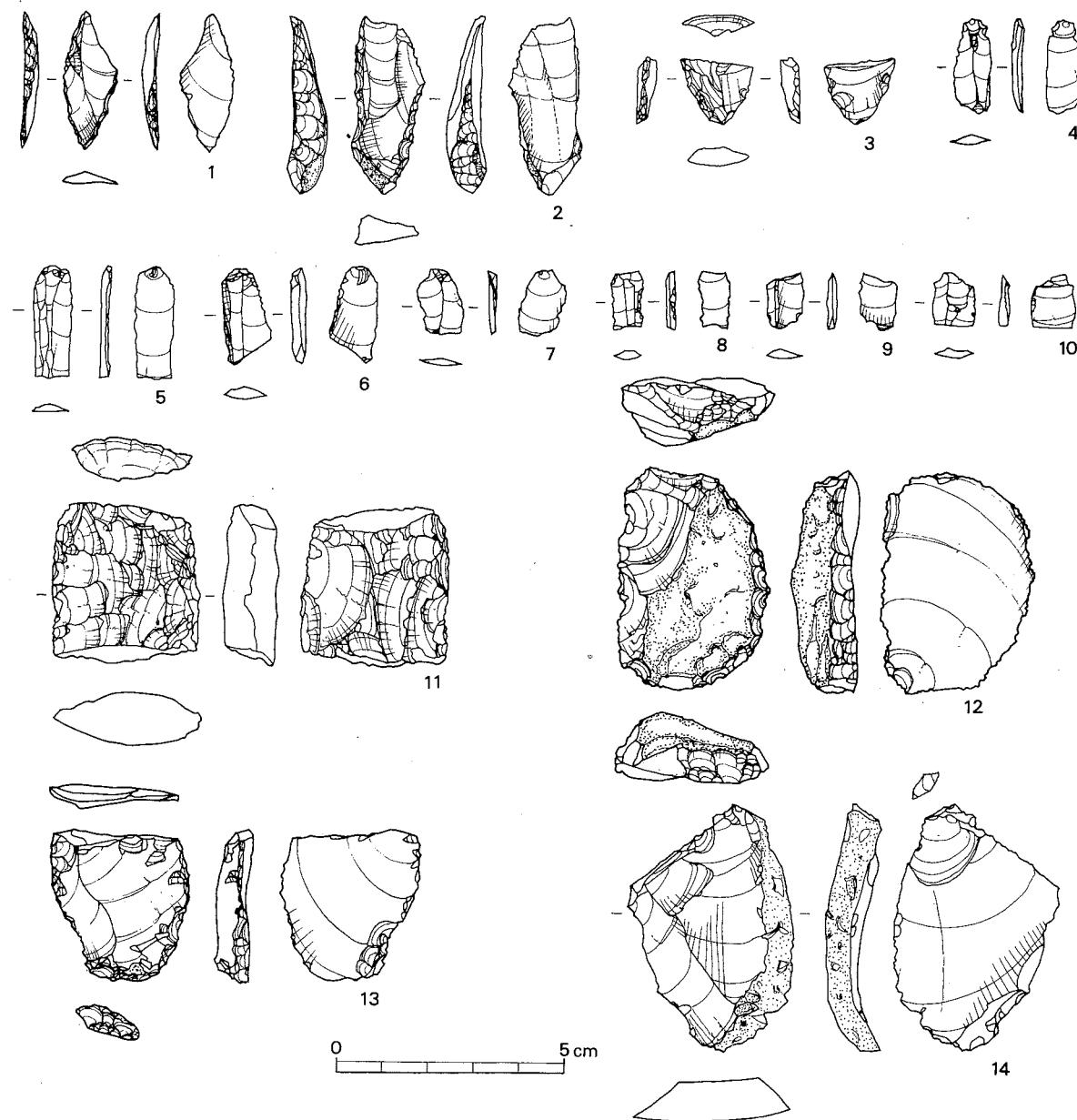


第11図 広久保遺跡出土土器分布状況(S=1/200)

第VIII章 出土遺物

第1節 旧石器時代から縄文時代草創期の遺物

旧石器時代および縄文時代草創期の遺物は、数時期の重複が考えられる。しかし遺物の出土状態は、縄文時代早期の包含層もしくは表採であり、いずれも原位置を遊離しており、遺物集中などを観察することはできない。1～3はナイフ形石器である。1は薄手の縦長剥片を素材とする二側縁加工である。2は表面に自然面を残す縦長剥片を素材とする。刃潰し加工は両側辺に並行するように施される。基部の加工は特殊で、自然面を除去するような剥離である。また先端部には使用時についたと思われる縦長の鱗状剥離がみられる。3はナイフ形石器の基部と思われる。4～10までは細石刃である。頭部および中間部の資料があるが、いずれも石材は漆黒色を呈する黒曜石である。11は縄文時代草創期の石槍の上下端を欠く中間部であろう。玄武岩を素材とし、鹿角などのソフトハンマーによる平坦剥離による調整が施され、断面は凸レンズ状を呈している。12・13は所属時期は不明であるが、エンドスクレイパーであろう。12はサイドにも刃部加工がなされている。佐世保市東浜産と思われる黒曜石を素材とする。13の素材は流理や自然面からして松浦市星鹿半島産と思われる。14は剥片。自然面をもつ、漆黒色の星鹿半島産の黒曜石を素材とする。



第12図 広久保遺跡出土旧石器・縄文草創期の石器 (S = 2 / 3)

第2節 縄文時代早期の石器

【概 要】

調査の結果、第2層から縄文早期の土器に伴って多くの石器・剥片類が出土した。器種を列記すると尖頭状石器、石鏃、石鏃末製品、石匙、搔器・削器類、石錐、彫器、磨製石斧、凹石、二次加工を有する剥片、使用痕と思われる微細剥離痕を有する剥片、黒曜石原石、石核、剥片、碎片等である。剥片石器の石材としては無班晶質玄武岩と黒曜石が利用されているが、量的には前者が圧倒的に多い。これは当遺跡を含めた県北一帯が、北松玄武岩（松浦玄武岩）に覆われており、石器素材となり得る緻密な無班晶質玄武岩が入手しやすいという地質環境によるものであろう。黒曜石は漆黒色を呈する良質のものから暗灰色系のもの、不純物を多く含む粗悪なものなど数種類が認められる。黒色良質で円礫のものは本遺跡の北方約6～8キロに位置する松浦市星鹿半島（牟田）産と考えられる。暗灰色系は、佐世保市淀姫あるいは針尾島産の可能性が高く、漆黒色良質で表皮が角礫状を呈するものは佐賀県伊万里市腰岳産と思われる。このほか西彼杵半島の上土井行産（従来、亀岳産とされることが多い）、佐賀県嬉野市松尾川産と思われるものも散見される。このバリエーションは、黒曜石が複数の原産地から入手されたことを物語っているが、近くに星鹿半島という九州で最も良質とされる原産地があるにも関わらず全体に黒曜石の使用量が少なく、しかも各原産地から少量ずつ搬入していることは奇異に感じられる。海水準変動などの影響により星鹿半島からの入手が困難になったことを示唆しているのであろうか。

剥片石器以外の石材としては磨製石斧と凹石がやや粗粒の玄武岩製、ストーンリタッチャーは砂岩製と思われる。凹石は、包含層中からの出土と表面採集資料各1点の計2点だが、いずれも班晶が大きく表面は風化が著しい。包含層の下位の層に比較的多く含まれており、これを利用しているようだ。ストーンリタッチャーに使われている砂岩は水磨円礫で、北松玄武岩の下位に広く分布する八ノ久保砂礫層の露頭から採集されている可能性が高い。

石器群の石材別・器種別数量比は右表（第1表）に示す通りである。推測される遺跡本来の広がりに対して調査範囲が限定されているため、この数値が必ずしも本遺跡における諸活動の痕跡を忠実に反映しているとは言い難い。しかし巨視的に眺めた場合、表面採集などの層位的属性を失った資料においても打製石鏃や搔器・削器類、および無班晶質玄武岩製の不定形剥片類が主体を占めるなど、全体の傾向は包含層出土の構成比に近く、個々の器種についてみても技術的・形態的特徴の共通点が多い。これは出土土器から判断される本遺跡の存続期間が、縄文早期中葉末～後葉（主に手向山式段階）という限定された時間幅であることと対応しているものと思われる。そうした意味では制約条件付きながら、縄文早期後半における石器組成の一例として該期の活動を知る手がかりになろうか。

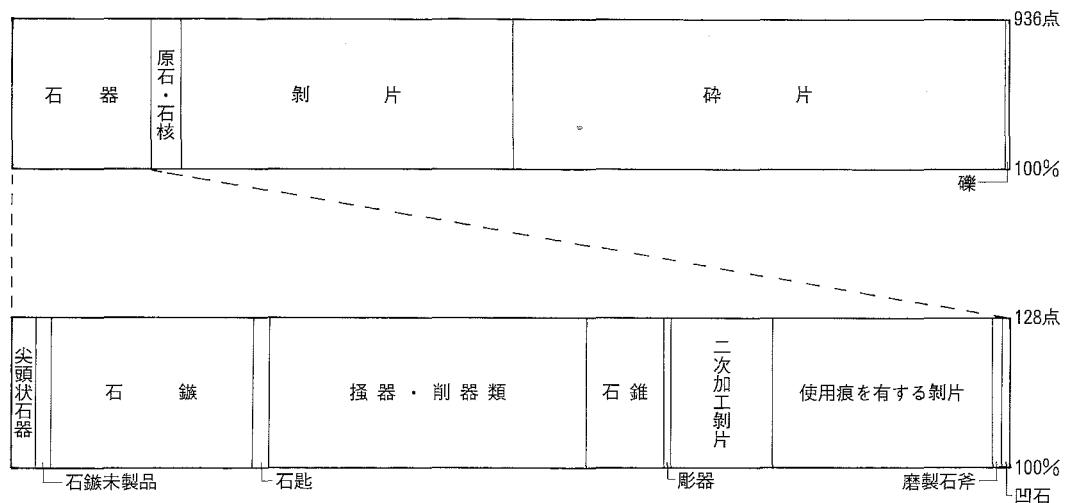
表から明らかなように、主体を占めるのは打製石鏃と搔器・削器類である。両者は縄文時代を代表する狩猟具と解体処理具であり、活発な狩猟活動を示唆していると解されよう。興味を引くのは石錐である。計10点出土しており、器種組成に一定の比率を占める。形態的には極めて小規模な刃部（錐部）を作出する点に特徴があり、石材も無班晶質玄武岩に限定されるなど斎一性が強い。一方、磨製石斧は刃部破片が1点出土したに過ぎず、植物性資源の処理具とされる磨石・石皿類も皆無である。こうした石器組成の在り方は、吾妻町弘法原遺跡を唯一の例外として長崎県下の縄文時代早期遺跡に共通して認められる様相であり、狩猟活動に重きを置いた生業が一般的であったことを示している。

本遺跡の場合、県北地帯の開地遺跡としては珍しく土器の遺存に恵まれており、早期に特有な連穴土坑も検出されるなど、時期が限定される状態での石器組成を示し得たことは大きな成果といえよう。

第1表 第2層出土石器群の数量構成・グラフ

	黒曜石	無班晶質玄武岩	粗粒玄武岩	砂岩	不明	合計
尖頭状石器		3 100.0%				3
石鏃未製品		2 100.0%				2
石 鏃	10 38.5%	16 61.5%				26
石 匙		2 100.0%				2
搔器・削器類	2 4.9%	39 95.1%				41
石 錐		10 100.0%				10
彫 器	1 100.0%					1
二次加工剥片		13 100.0%				13
使用痕剥片	1 3.6%	27 96.4%				28
磨 製 石 斧			1 100.0%			1
凹 石			1 100.0%			1
黒曜石原石	1 100.0%			0.0%		1
石 核	4 14.8%	23 85.2%				27
剥 片	19 6.1%	290 93.2%		1 0.3%	1 0.3%	311
碎 片	51 11.0%	414 89.0%				465
碾			1 50.0%		1 50.0%	2
碾 片					2 100.0%	2
合 計	89 9.5%	839 89.6%	3 0.3%	1 0.1%	4 0.4%	936

	黒曜石	無班晶質玄武岩	粗粒玄武岩	砂岩	不明	合計
石 器 計	14 10.9% 15.7%	112 87.5% 13.3%	2 1.6% 66.7%	0 0.0% 0.2%	0	128 13.7%
原石・石核計	5 17.9% 5.6%	23 82.1% 2.7%	0 2.5%	0	0	28 3.0%
剥片・碎片計	70 9.0% 78.7%	704 90.7% 83.9%	0 75.2%	1 0.1% 100.0%	1 0.1% 0.1%	776 82.9%
碾・碾片計	0	0	1 25.0% 33.3%	0 0.1%	3 75.0% 75.0%	4 0.3% 0.4%
合 計	89 9.5%	839 89.6%	3 0.3%	1 0.1%	4 0.4%	936



【尖頭状石器（第13図3～5）】

両面に比較的難な二次加工を施したものである。石鏃に比べて大形肉厚で格段に重い。当初は石鏃未製品の可能性も考えたが、完成品としての石鏃と比較した場合かなり大形であること、7のように石鏃未製品として妥当と判断される資料が存在することから尖頭状石器とした。加工が全体の整形を意図しているように思われることや、4・5のように尖頭部と基部の作出が認められる点も、尖頭状石器と認定した理由のひとつである。この種の石器は、尖頭石器、小型尖頭器、マイクロポイントなど様々な名称で報告されているが、基本的には押型文土器を出土する早期の遺跡に多くみられ、該期を特徴づける狩猟具として理解できそうである。本県では佐世保市岩下洞穴（麻生1968）、吾妻町弘法原遺跡（高野編1983）などに類例が見られ、いずれも早期土器の伴出が確認されている。

【石鏃未製品（第13図6～7）】

6は素材剥片の両面に比較的丁寧な二次加工を施したものである。小形で形態的には縄文後～晩期に見られるサイドブレイドにも似ているが、1点のみの出土であることや、縄文早期の確実なサイドブレイドの報告例がないこと、法量的に第13図16程度の小形石鏃が製作可能な大きさであること等を考慮し、石鏃未製品としておきたい。7は難な両面加工により略方形に仕上げたものである。尖頭部は作出されていないが、大きさや加工の在り方から石鏃未製品と考えられる。

【石 鏃（第13図8～34）】

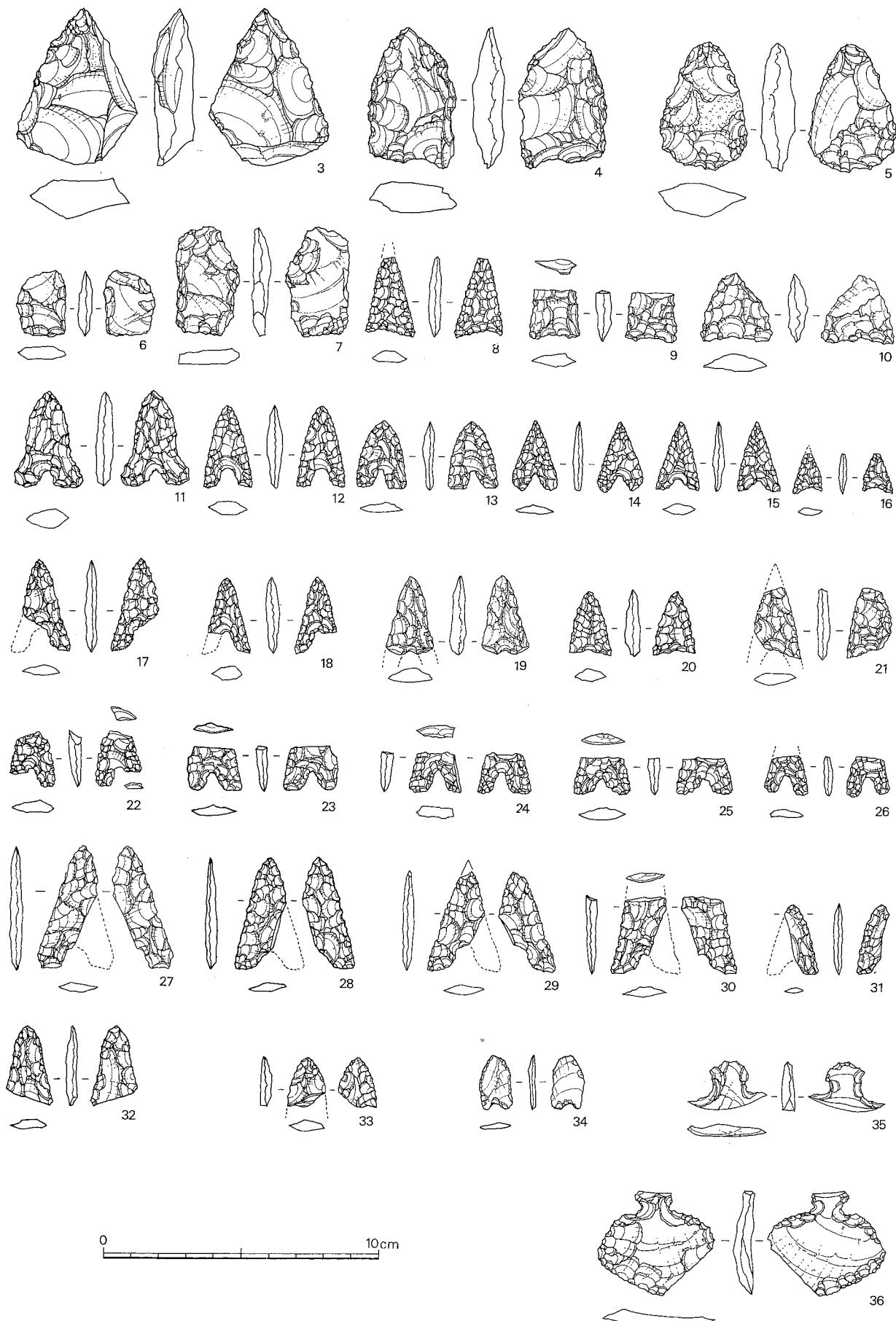
基部がわずかに内弯する一群（8～10）と逆「U」字状に深く抉り込まれる一群（11～31）とに大別できるが、いわゆる鍔形鏃と呼ばれる後者が主体を占める。このほか34のように極めて小形・薄手のものもある。実用性には疑問を感じるが、微細な周縁加工が施されていることや基部が抉り込まれていることから石鏃に含めている。

11は脚部が左右に突出するやや特異な形態だが、吾妻町弘法原遺跡（高野編1983）や諫早市鷹野遺跡（副島・伴編1986）などに類例が見られる。鍔形鏃のバリエーションのひとつとして理解されよう。32・33は先端部片で全体形を窺い知ることはできないが、おそらくは基部が深く抉り込まれた鍔形鏃になるものと思われる。

本遺跡から出土した石鏃は何らかの形で破損している例が多く、その在り方は特徴的である。22～26は主軸と直交する方向からの力によって上半部を欠失するものであり、27～31は抉り込みの最奥部から側縁と平行するように片脚を欠損するものである。前者の中は22のように上半部とともに片脚を欠損している例もあるが、基本的には上半部のみの欠損であり両脚は残っている。こうした欠損例では黒曜石（漆黒色3例、暗灰色1例）の利用が目立つ。後者では30のように先端部を欠く例が見られるものの大半は脚部のみの欠損であり、縄文早期遺跡から出土する鍔形鏃には同様の欠損例がしばしば見受けられる。基本的には基部の深い抉り込みが弱点となつたのであろうが、発射時の回転による衝撃を物語っているようにも思われる。この種の欠損を示す石鏃は全て無斑晶質玄武岩製であり法量的にも大形品が目立つ。こうした欠損状態や利用石材の共通性と差異が具体的に何を意味しているかについては不明だが、少なくとも前者のように上半部のみを欠損し、両脚が残っている例がほぼ同数見られることから、単に抉り込みの深さだけに起因するとは思われない。狩猟法や対象獣の差を示唆している可能性も考慮する必要がありそうである。

【石 匙（第13図35～36）】

包含層中からは2点出土した。いずれも小形品である。35はつまみ部の破片で無斑晶質玄武岩製。36は素材剥片の周辺部に二次加工を施したもので、一部を欠損している。石質はやや多孔質ながら、35よりガラス質に富む無斑晶質玄武岩である。

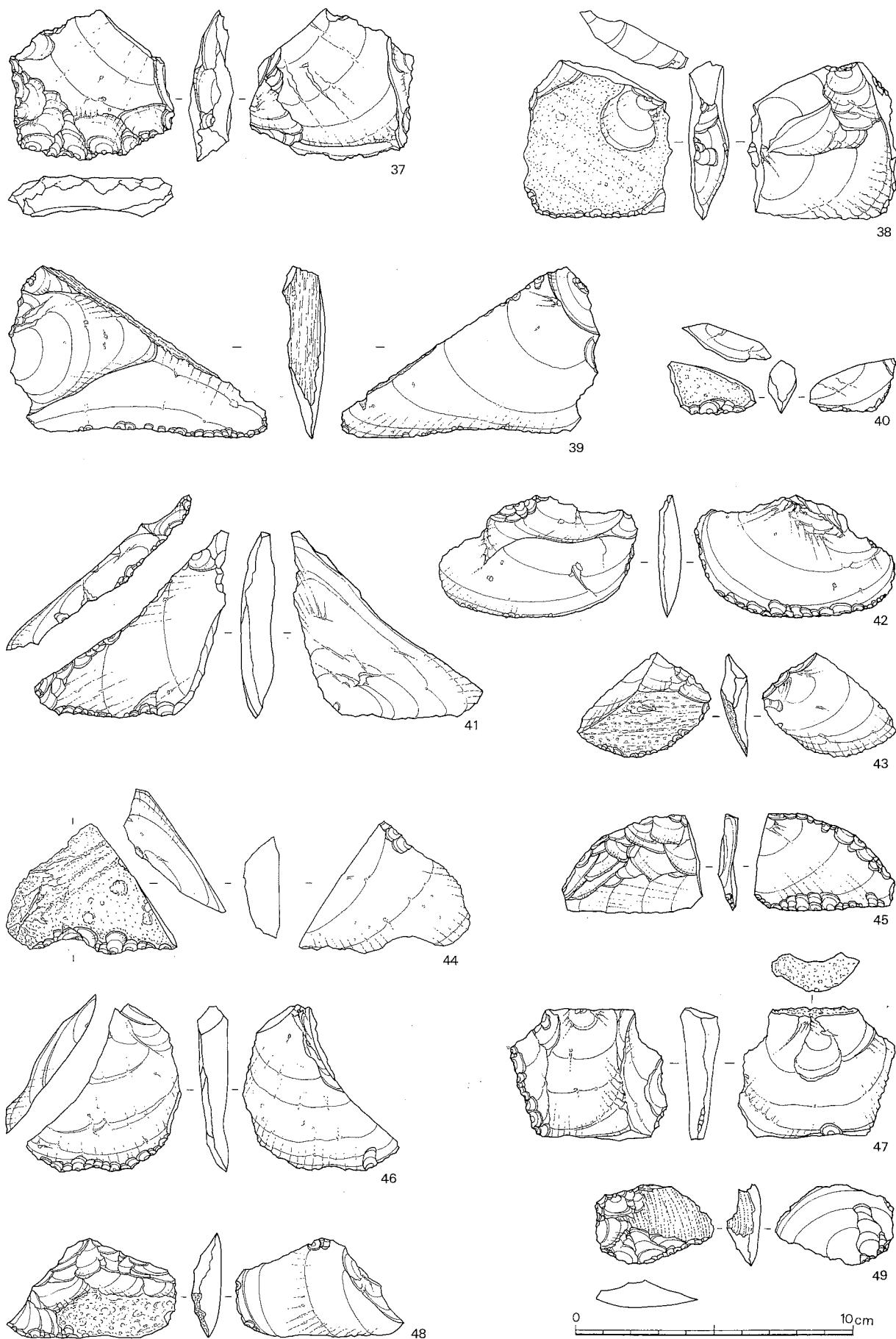


第13図 広久保遺跡出土の縄文時代石器① (S = 1 / 2)

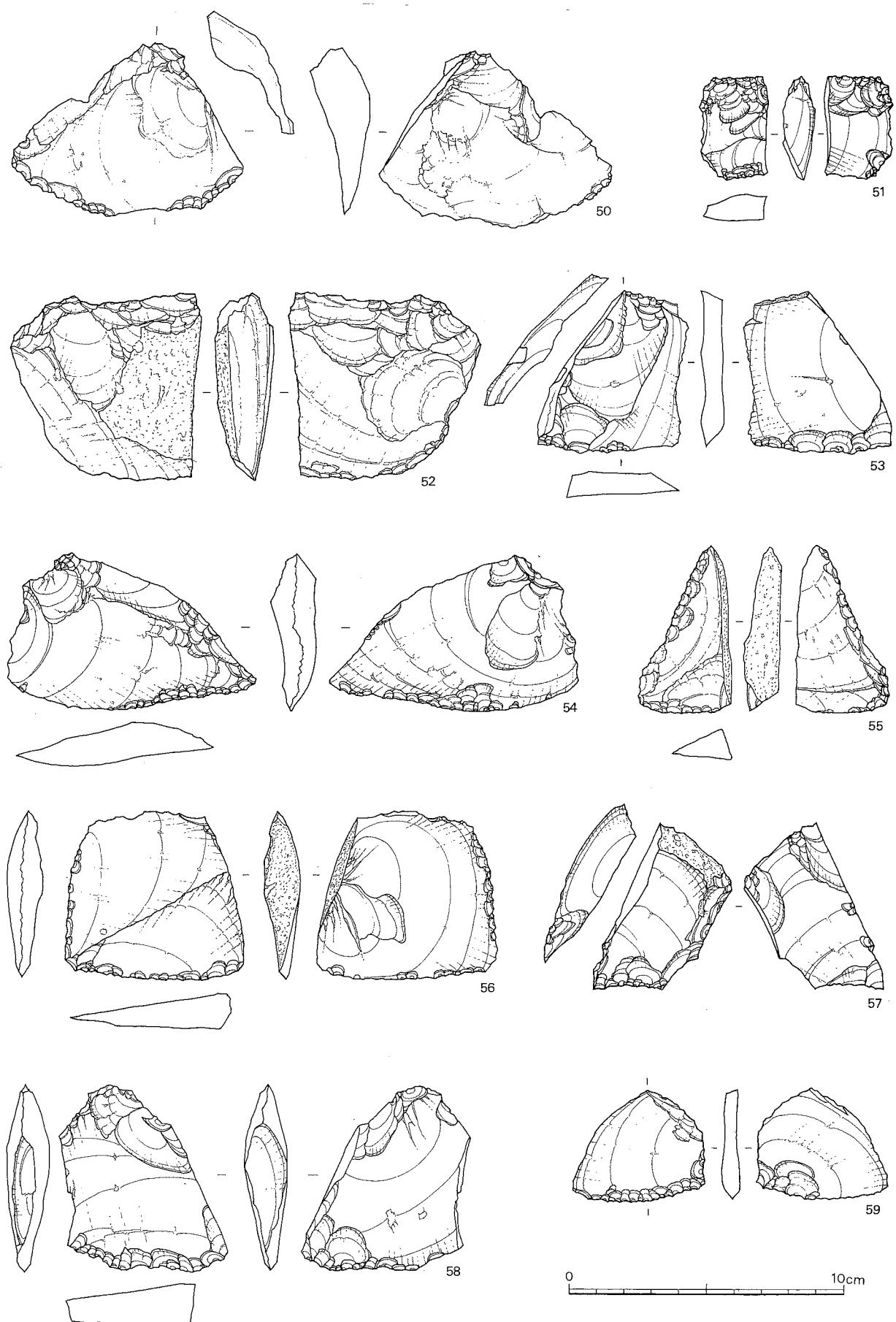
【搔器・削器類（第14図37～70）】

搔器・削器類は本石器群の主体を占める器種である。石材は無班晶質玄武岩が大部分で、黒曜石製は少ない。不定形剥片の一辺あるいは複数の辺に調整剥離を施して刃部を作出しているが、基本的に素材の形状を大きく変更するほどの加工ではなく、剥片の原形を残すものが多い。二次加工自体は、丁寧な押圧剥離で規則的に連続するものから雑な加撃を施しただけのものまで様々であり、刃部形状も直線的なもの、緩い弧状をなすもの、半円に近い弧状をなすもの、粗い鋸歯状をなすもの、部分的に抉入状をなすもの、不規則なものなどに分けられる。このように平面概形、法量、調整加工、刃部の位置や形状などの属性を細別することは可能だが、個々の石器について見ると各要素の組み合わせとして複雑なバリエーションを構成しており、不定形石器であるがゆえに型式的な分類は困難である。一般に搔器・削器類として分類される石器は主に切削用の道具と考えられているが、具体的な作業としては捕獲動物の解体から各種の道具を作るための工具的な利用など多岐にわたることが想定され、作業内容や対象物を推定するためには使用痕の研究も不可欠である。こうした点を考慮すると外見上の属性による分類が必ずしも有意かつ妥当とも思えない。ここでは従来の一般的な分類に従って刃部角の浅いものを削器、急斜なものを搔器とし、削器については加工が主に片面だけに施されるものと両面に及ぶものに大別して図示した。以下、いくつかの特徴的な資料について個別の説明を記す。

37は素材剥片の打面と左側縁に加工を施したものである。バルブが発達するような加撃のため平面觀は粗鋸歯状を、刃部正面觀は波状を呈している。38は台形状剥片の一側縁に片側から細かい二次加工を施して直線的な刃部を形成するものである。39・41・47などは平面形こそ異なるが38と同類に含まれよう。また56も加工が二側縁に施されることや、そのうち一辺が両面加工である点などの差異はあるものの平面形は38に近い。いずれも原礫面や素材の打面、折断面を有し、装着あるいは刃潰しを目的としたと考えられる加工（38の主要剥離面側や41の折断面など）が見られるものもある。42は横長剥片の末端に丁寧な二次加工を施したもので43・46・50・54なども同様に弧状の刃部を有している。これらは原則的に主要剥離面端部のリングに沿うような刃部形成であり、刃部以外の加工は施されていない。48は縦長剥片の上部を折断し、両側縁に主要剥離面側からの加工を施して刃部としたもの。49は暗灰色黒曜石製で、素材の一辺に粗い刃部を有するものである。51・52・58は刃部の対辺に両面からの加工を施すものである。51は素材の両側を折断した後、下辺を刃部とし上辺に粗い両面加工を施している。牟田産と思われる漆黒色の良質な黒曜石製。52は無班晶質玄武岩製の大型品だが、51と同様に下辺に刃部を、上辺に両面加工を施している。58は素材の末端を折断したのち、両面加工の刃部を作出したもので対辺（図上部）にも両面からの粗い剥離が施されている。いずれも上辺の加工は着柄を意図したものであろうか。53は偏平な剥片を折断し、主に背面側からの加工により主要剥離面側の一側縁に刃部を形成するもの。71は概形が直角三角形状を呈し、底辺には片側からの、斜辺には両面からの二次加工を施している。外面は灰白色を呈する多孔質の玄武岩製。57は折断した剥片の末端に短い刃部を作出したもので、折断面の刃部寄りには小規模な刃潰し状の加工が見られる。61も57に類似する形態の削器である。59は背面に規則的な調整剥離による刃部を有するもの。主要剥離面側にもバルブを除去するかのような加工が見られる。石匙の破損品かも知れない。60は不定形剥片の打面（原礫面）以外の周縁に粗雑で不規則な加工を施したものである。62は紙面の都合で縦位に図示したが、不定形剥片の一辺を刃部とし対辺に両面加工を施したものである。この特徴は51や52などと共に通るものである。63は大形厚手の剥片を素材とし、背面側の一部に搔器状の刃部を作出したもの。主要剥離面側には数回の大きな剥離が加えられており、二ヶ所が折断されている。64は縦長に近い剥片の頭部に両面加工を施したものである。65は背面が原礫面で覆われた台形状の剥片を素材として主



第14図 広久保遺跡出土の縄文時代石器② (S = 1 / 2)



第15図 広久保遺跡出土の縄文時代石器③ (S = 1 / 2)



第16図 広久保遺跡出土の縄文時代石器④ (S = 1 / 2)

要剥離面側の一側縁に刃部を作出したものである。刃部の調整加工が比較的大きな点で異なるが、法量や平面形が台形状であること、対辺にも若干の加工が施されている点など38との共通性が強い。**66**は後述する**69・70**にも似ているが、片側だけからの加工により急斜で直線的な刃部を形成していることから搔器と考えられる。**67**も折断された細長い剥片の一部に不規則ながら急角度の刃部を有するものである。**68**は小型の搔器である。比較的大型肉厚だったと思われる素材剥片を台形状に折断し、主要剥離面側から急斜な刃部を作出している。右側の折断面に小規模なプランティング状の加工も施されていることから、破損品とは思えない。刃部の対辺にも加工が施されており、両側が折断されている点は**51**と共通する。**69・70**は正面が全体的に、裏面は部分的に二次加工を施したもので主要剥離面を大きく残している。あたかも大形尖頭器の未製品あるいは失敗品であるかのように見えるが、推定される素材剥片の長さを考えるとあまりにも幅広であり、完成品としての尖頭器もないことから搔器・削器類に含めている。ともに折断面を有し、**70**には折断面を打面とする剥離も施されている。

【石 錐（第17図71～77, 79～80）】

石錐と考えられる資料は計10点出土した。全点とも無班晶質玄武岩の不定形剥片を素材とし、背面の剥離面と剥離面、あるいは剥離面と原礫面が交差する稜線部周辺に若干の二次加工を施して錐部を形成している。このため錐部は極めて小規模であり、素材の形状をほとんど変更しないか、あるいは小突起状をなす程度である。総じて旧石器時代の石錐に近い作りで、なかには更に簡略化されたものもあるため注意深く観察しないと見過ごしてしまうほどである。

71は不定形剥片の末端を錐部としたもので、先端から5mm程度が摩耗している。**72**は折断した横長剥片の末端にスクレイパーエッジ状の加工を施して錐部とする。摩耗痕は観察できない。**73**も上端を折断した縦長に近い剥片の末端を錐部としたものである。尖端部を中心に若干の摩耗が認められる。**74**は不定形剥片の上下2カ所に錐部を作出しておらず、下部は小突起状を呈する。上下ともに尖端を中心とした部分がわずかに摩耗している。**75～77**は素材剥片の一部に極めて微細な加工を施したものである。いずれも摩耗痕は認められない。**79・80**は剥片の末端を折断し、折断面を活かしながら周辺に加工を施したものである。**80**は錐部以外にも二次加工が施されており、雑ながらも全体の整形を意図したものと思われる。いずれも明瞭な摩耗痕は認められない。

【彫 器（第17図78）】

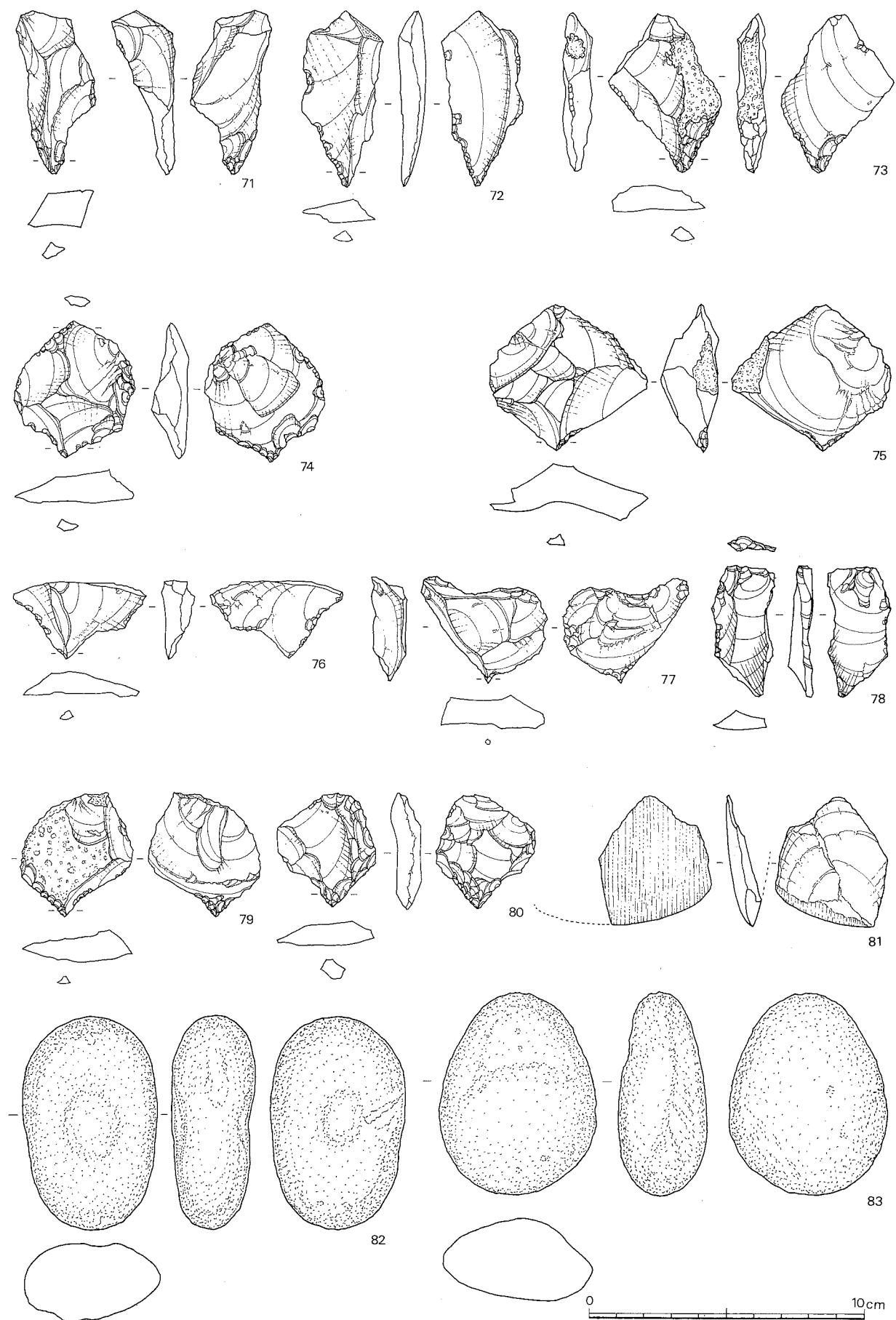
調整打面から剥出された比較的整った形状の縦長剥片を素材とする。図示できないほど小規模な打面を作出した後、主軸に沿って右側に1条の槌状剥離を施して彫刀面としたものである。彫刀面の両側縁には微細な剥離痕が、反対側の側縁にも細かい魚鱗状の剥離痕が認められる。牟田産と思われる漆黒色の良質な黒曜石を用いており、旧石器時代に属する可能性もある。

【磨製石斧（第17図81）】

刃部破片1点が出土した。やや風化しており研磨痕は観察できないが、刃部稜線は鋭い。外面は淡灰褐色、内部は黒色の緻密な石材で、やや粗粒の玄武岩製と思われる。

【凹 石（第17図82）】

82は粗粒玄武岩の円礫を素材とするものである。表面は風化が著しく、輝石やカンラン石などの班晶が浮かび上がったようになっている。この石材は包含層の下位に自然礫として含まれており、深くなるにつれて量も増加する。本来は岩盤だった部分が崩壊して円礫となったものであろう。**83**も同質の礫である。風化していく擦痕や加撃痕を確認できないため厳密な意味での石器とは呼べないが、磨石や敲石として利用された可能性がある。本来は第3～4層中に多く含まれる自然石であるが、包含層中には含まれないことから、礫石器用の石材として選択されたものと思われる。



第17図 広久保遺跡出土の縄文時代石器⑤ (S = 1 / 2)

【原 石（第17図84）】

84は牟田産と考えられる黒曜石の原石である。餅状の円礫で重量251.8gを計る。表皮に若干の不純物が認められるが全体的には漆黒色で美しいガラス光沢があり、内部は良質である。

【石 核（第18図85～93）】

石核は計27点が出土した。いずれも不定形石核で、石材は黒曜石（85・87・91）と無班晶質玄武岩が利用されており、他の剥片石器類に対応するように後者が大半を占める。

85は針尾系と思われる暗灰色黒曜石の角礫を素材とするもので、自然面打面から2枚の剥片を剥出している。87も礫面を打面として2枚の剥片を剥出した石核で、85と同様に小形の三角形状を呈する。極めて薄く、これ以上の剥片剥離は不可能であろう。剥離面が青灰色を呈する黒曜石製で上土井行産と呼ばれるものに酷似する。両例とも柏原型石核に類似するものであろうか。91は自然面および剥離面を打面としてランダムな剥片剥離を行ったもの。図裏面にはパンチ痕が残されている。漆黒色を呈する良質の黒曜石製で、自然面が角礫状を呈することから腰岳産と思われる。

86・88～90・92～93は無班晶質玄武岩製である。86は亜円礫を素材として両面からの不規則な剥離を行ったもので、残存形はチョッピングトゥール状を呈する。88は略長方形の石核で、正面は主軸に沿うような剥離面（凸面）を打面とする剥離が、裏面には下辺の自然面およびこれに直交する側辺からの剥片剥離が行われている。90も剥片剥離の在り方は89に近い。89は比較的縦長に近い剥片を剥出した石核で、正面と裏面とでは剥離方向が180°異なっている。92は多方向からのランダムな剥片剥離を行ったもの。もはや残核と呼ぶべき状態である。93は大形剥片を素材とする石核で、主要剥離面側を中心に不定形剥片が剥出されている。このため打製石斧のような形状を呈しており、側縁の一部に刃部作出と思われるような二次加工が施されていることから、削器への転用も考えられる。

【剥片類（第19図94～108）】

紙面の都合上、代表的な剥片のみを図示した。97が漆黒色の良質黒曜石、108が暗灰色黒曜石であるほかは全て無班晶質玄武岩製である。94～96は側縁に使用痕と思われる小規模で不規則な剥離痕が観察されるものである。出土した剥片の大半はこうした不定形剥片で占められており、一定の規格や形状を意図していると思われる剥片剥離技術は認められない。97は背面と主要剥離面との加撃方向が直交するもので、末端に刃こぼれ状の微細な剥離痕が認められる。98・99は横長剥片で、98は上下を折断した後、折断面に小規模な加工を施している。100～108は縦長に近い形状の剥片である。自然面あるいは先行する剥離面を打面とするものが多く、106や108のように打面調整を施すものは例外的である。そのため形状には齊一性が乏しく、いわゆる石刃技法的な剥片剥離技術の所産とは言い難い。むしろ偶然の産物と考える方が妥当であろう。とはいえ側縁は十分すぎるほどの鋭利さを備えており、逆に搔器・削器類の素材として利用されていないことを考えれば、二次加工を施す必要のない、その今まで刃器としての利用価値があったことを示しているのかも知れない。

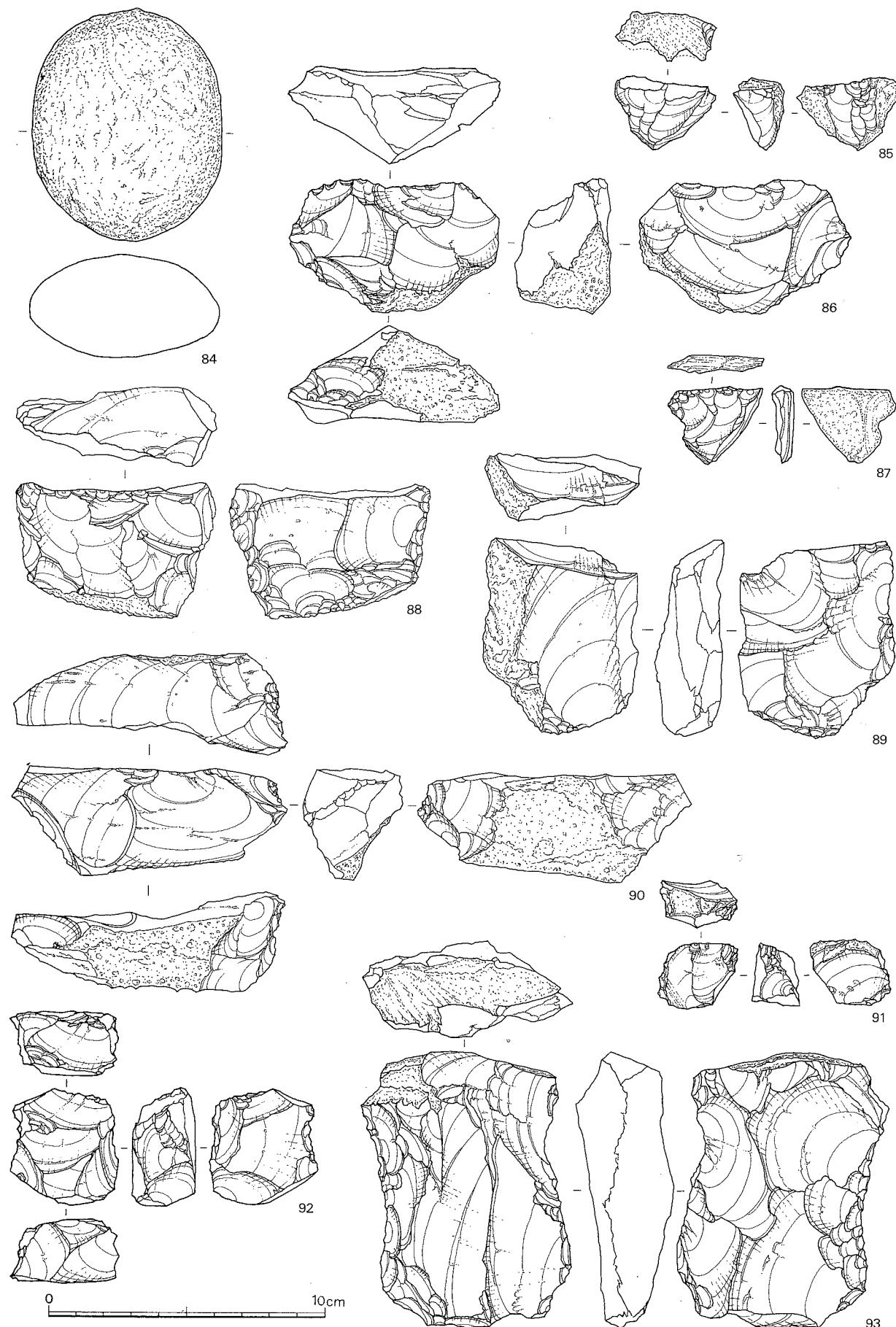
試掘調査時出土および表面採集の石器（第20図109～133）

【尖頭状石器（第20図109・110）】

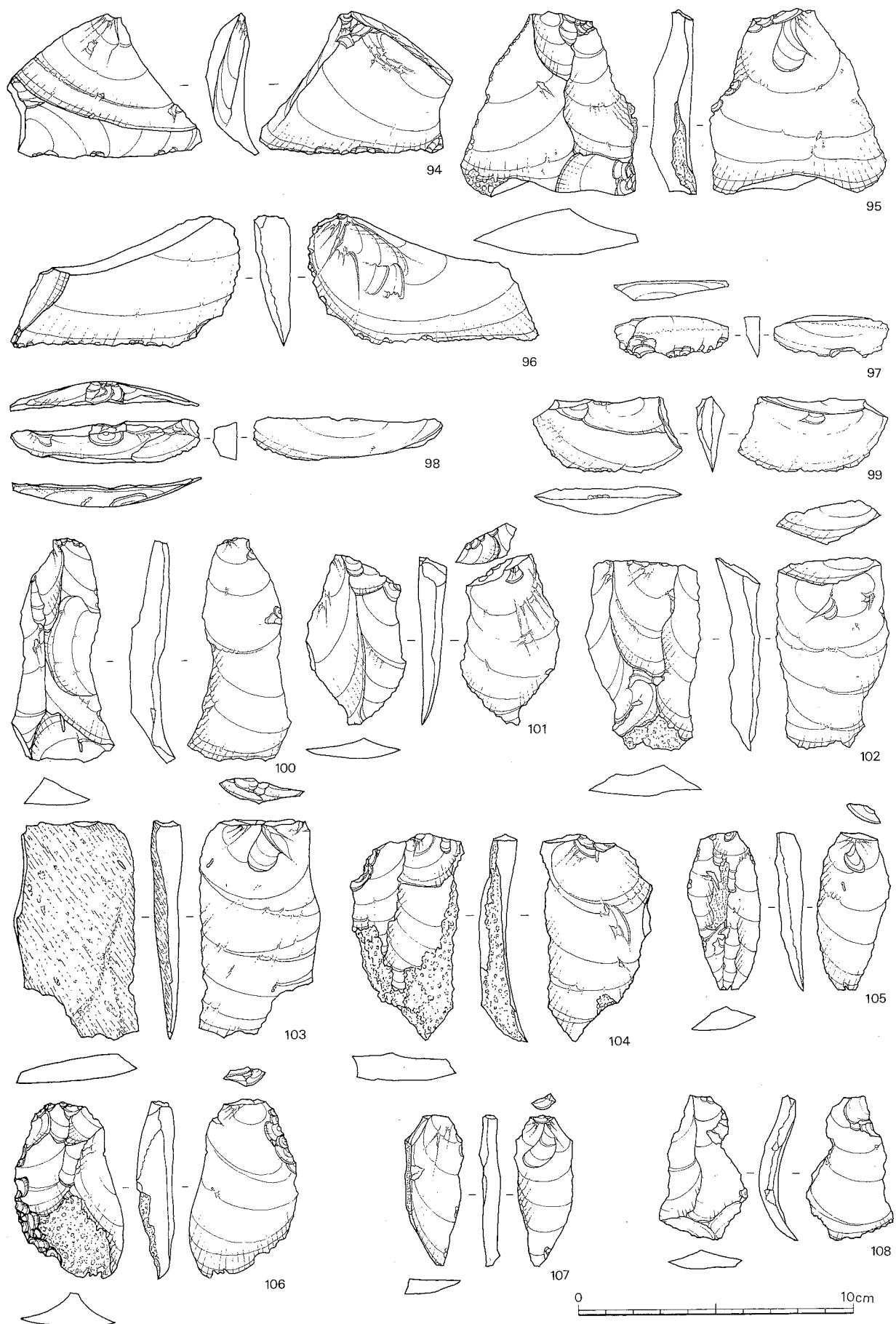
両例とも無班晶質玄武岩製で、比較的雑な調整加工により全体を整形している。側縁、基部とともに外湾氣味で全体に丸みを帯びた作りである。

【石鎌未製品（第20図111・112）】

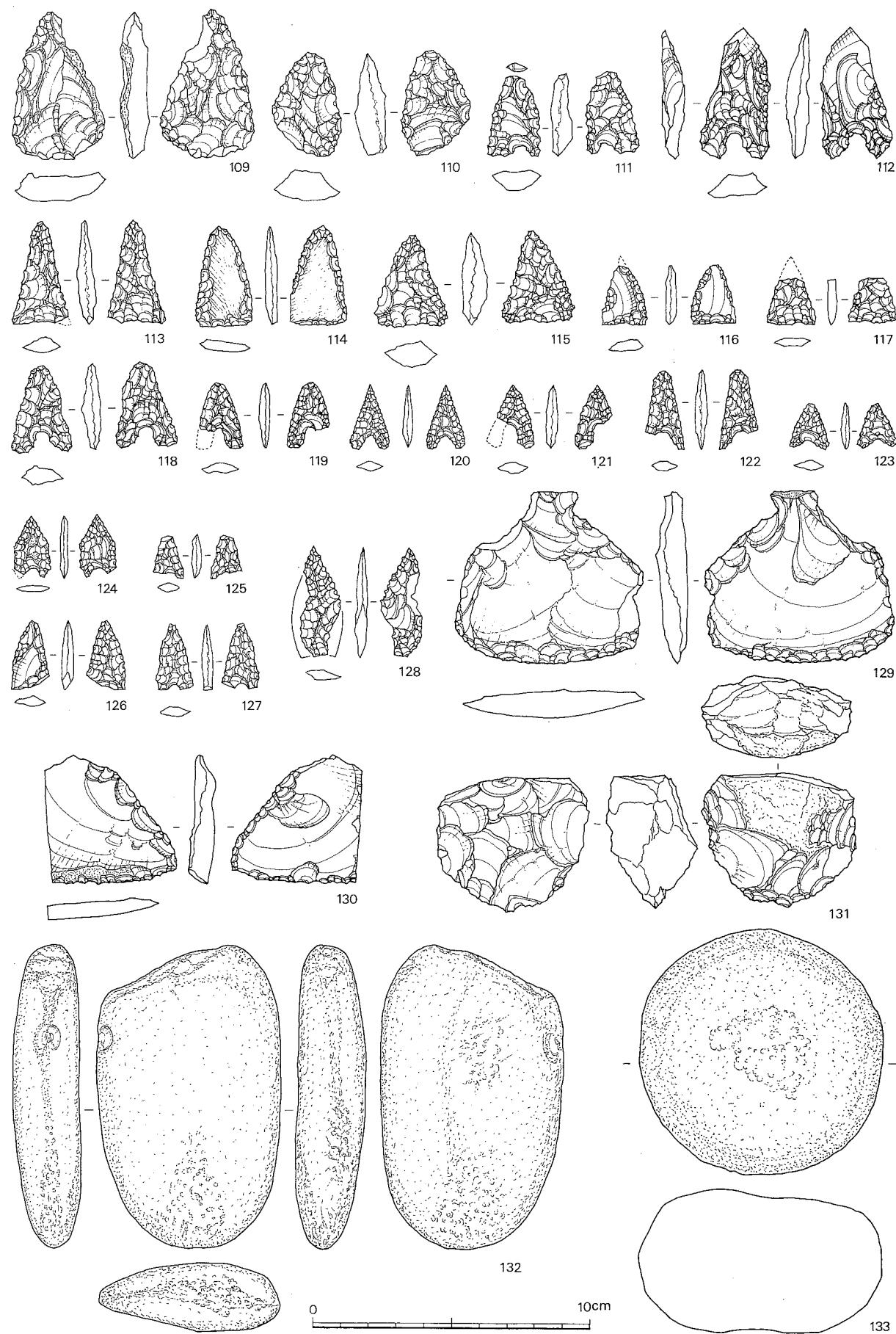
111は周辺に二次加工を施して全体を整形している。ウェイプが強いため表裏両面とも素材の剥離面を残しており脚部の作出もアンバランスである。112は漆黒色黒曜石製で素材を縦に折断した後、基部



第18図 広久保遺跡出土の縄文時代石器⑥ (S = 1 / 2)



第19図 広久保遺跡出土の縄文時代石器⑦ (S = 1 / 2)



第20図 広久保遺跡出土の縄文時代石器⑧ (S = 1 / 2)

および右側縁に調整剥離を施したものである。左側縁にも部分的に折断面からの剥離が行われている。全体としては石鏸としての完成された姿に近いが、尖頭部の作出は認められず脚部以外の加工も不十分である。全面が調整剥離で覆われる一般的な打製石鏸と比べれば未製品とするのが妥当であろう。

【石 鏸（第20図113～128）】

基部が直線的あるいは僅かに内弯するもの（113～117）と深く抉り込まれた鍔形鏸（118・119など）に加えて木葉形を呈するもの（128）もある。114は周縁のみに丁寧な二次加工を施すもので全体に丸みを帯びている。無班晶質玄武岩製のため些か不明瞭だが両面とも研磨されており、広い意味での局部磨製石鏸に分類される。120は極めて丁寧な二次加工を施したもので尖端は鋭く、両側縁は細かい鋸歯状を呈する。124は概形が五角形で、基部は抉り込まれているが脚端が突出する点に特徴がある。128は木葉形の基部を断ち切ったような形状で、120と同様に尖端は鋭く、側縁の一部は細かい鋸歯状に仕上げられている。全体の加工は入念で器体の中央に達するような押圧剥離で覆われており、側面観も直線的である。この種の石鏸は東彼杵町大久保遺跡（藤田1991）でまとまった資料が発掘されており、「大久保型石鏸」と仮称したもの（古門・渡邊編1997）に相当する。

【石 匙（第20図129）】

自然面打面から剥出された不定形剥片を素材とし、バルブの左右に抉り込んでつまみ部を作出している。素材の剥離面を大きく残しているが、二次加工は全周に及んでおり特に下辺が丁寧であることから主要な刃部と考えられる。

【削 器（第20図130）】

周縁に両面加工による刃部を作出したものである。半分を欠失しており石匙であった可能性もある。

【石 核（第20図131）】

無班晶質玄武岩の角礫を素材として両面に求心的な剥離痕を残すものである。図の上辺と背面の一部に原礫面を残し、両面から剥片剥離を行っているためチョッピングツール状の形状を呈する。同様の資料が他にも1点採集されている。

【ストーンリタッチャー（第20図132）】

扁平・橢円形状の円礫で、周囲には敲打痕が、図正面の中央～下半部と裏面中央部には鼠歯状痕が顕著である。石質は砂岩でよく水磨されており、北松玄武岩の下位に広がる「八ノ久保砂礫層」から採取されたものと思われる。

【凹 石（第20図133）】

正円に近い粗粒玄武岩の円礫で、両面の中央部が窪んでいる。外見の色調は異なるが、第17図82・83と同質の石材である。

〔引用・参考文献〕

- 麻生 優 1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
片岡 肇 1982『岩谷口岩陰』財団法人 古代学協会
高野晋司編 1983『弘法原遺跡』吾妻町の文化財 7 長崎県吾妻町教育委員会
村川逸朗編 1992『弘法原遺跡』吾妻町の文化財13 長崎県吾妻町教育委員会
副島和明・伴耕一朗編 1986『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 III』
長崎県文化財調査報告書 第85集 長崎県教育委員会
藤田和裕 1991「大久保遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VIII』
長崎県文化財調査報告書 第99集 長崎県教育委員会
古門・渡邊編 1996『広平遺跡』長崎県文化財調査報告書 第137集 長崎県教育委員会

図番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重量	番号	層	大G	小G	南北	東西	標高
3	尖頭状石器	無班晶質玄武岩	57	44	14	29	1005	2	B3	d	-203	125	189.611
4	尖頭状石器	無班晶質玄武岩	51	32	12	18.6	878	2	C3	b	100	-55	189.739
5	尖頭状石器	無班晶質玄武岩	46	32	12	14.7	621	2	B2	c	52	-128	189.574
6	石鎚未製品	無班晶質玄武岩	24	18	5	2	1	2	C2	a	144	-175	190.623
7	石鎚未製品	無班晶質玄武岩	40	23	6	6.8	788	2	B3	a	-93	-150	189.758
8	石鎚	黒色黒曜石	29	18	4	1.4	235	2	A3	d	-63	90	189.853
9	石鎚	無班晶質玄武岩	18	19	6	1.9	625	2	B2	c	-54	125	189.587
10	石鎚	無班晶質玄武岩	25	27	7	3.1	966	2	B3	b	-28	3	189.783
11	石鎚	無班晶質玄武岩	35	24	7	3.8	217	2	A3	c	-150	-20	189.857
12	石鎚	暗灰色黒曜石	30	18	6	1.9	327	2	B2	a	70	51	189.54
13	石鎚	無班晶質玄武岩	25	19	4	1.3	869	2	C3	b	105	-135	189.757
14	石鎚	黒色黒曜石	25	17	4	0.9	273	2	A1	b	132	170	189.806
15	石鎚	暗灰色黒曜石	25	17	4	0.9	915	2	B3	d	-95	-55	189.754
16	石鎚	暗灰色黒曜石	15	11	3	0.3	910	2	B3	a	-190	-108	189.778
17	石鎚	無班晶質玄武岩	33	14	4	1.4	18	2	C2	a	-250	70	190.653
18	石鎚	無班晶質玄武岩	27	15	5	1.2	935	2	B3	c	65	143	189.862
19	石鎚	無班晶質玄武岩	29	17	6	2	297	2	A4	d	-6	168	189.844
20	石鎚	暗灰色黒曜石	23	15	5	1.1	579	2	B2	d	170	177	189.595
21	石鎚	無班晶質玄武岩	26	18	4	1.7	940	2	B3	d	-6	-53	189.747
22	石鎚	黒色黒曜石	20	16	4	1.1	677	2	B3	d	128	63	189.801
23	石鎚	無班晶質玄武岩	16	19	4	1		2	B3				
24	石鎚	黒色黒曜石	14	20	4	0.9	487	2	B2	d	-25	115	189.645
25	石鎚	黒色黒曜石	13	20	4	0.9	916	2	B3	d	-77	70	189.821
26	石鎚	暗灰色黒曜石	14	16	3	0.5	985	2	B3	d	186	-27	189.793
27	石鎚	無班晶質玄武岩	45	15	4	2.9	491	2	B2	d	-45	37	189.613
28	石鎚	無班晶質玄武岩	40	14	4	2	766	2	C3	a	70	202	189.791
29	石鎚	無班晶質玄武岩	36	15	4	1.9	590	2	B2	c	-180	176	189.645
30	石鎚	無班晶質玄武岩	28	15	4	1.7	329	2	B2	a	106	155	189.533
31	石鎚	無班晶質玄武岩	25	8	3	0.6	1008	2	B3	c	-160	-140	189.605
32	石鎚	無班晶質玄武岩	29	17	4	1.4	124	2	A2	a	44	-72	189.725
33	石鎚	無班晶質玄武岩	18	14	4	0.7	938	2	B3	d	-53	-133	189.708
34	石鎚	無班晶質玄武岩	19	13	3	0.5	197	2	B4	a	100	-110	189.906
35	石匙	無班晶質玄武岩	18	28	4	1.6	646	2	B3	c	-90	-172	189.902
36	石匙	無班晶質玄武岩	38	43	6	6.4	51	2	A2	b	-103	72	190.866
37	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	55	59	15	46	489	2	B2	d	-85	30	189.63
38	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	56	54	14	42.5	245	2	A3	a	32	-162	189.981
39	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	62	93	14	54	44	2	A2	d	198	139	190.771
40	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	19	31	10	4.8	781	2	C3	a	60	-145	189.753
41	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	67	69	12	31.2	481	2	B2	c	-86	-55	189.708
42	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	44	72	8	24.3	662	2	B3	b	16	-132	189.872
43	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	38	48	10	11.6	664	2	B3	a	-58	176	189.824
44	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	47	61	13	34.3	185	2	B4	d	182	-140	189.826
45	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	35	51	6	11.8	736	2	C3	b	184	186	189.985
46	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	59	55	11	21.3	581	2	B2	c	29	-80	189.671
47	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	47	56	13	29	844	2	C2	a	190	-69	189.526
48	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	36	61	10	19.4	497	2	B2	d	190	95	189.632
49	搔器・削器類	暗灰色黒曜石	29	43	12	10.8	565	2	B2	b	-47	130	189.666
50	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	63	84	19	51.8	461	2	B2	b	-80	135	189.736
51	搔器・削器類	黒色黒曜石	37	26	11	11.2	342	2	B2	c	110	112	189.521
52	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	68	69	21	111.8	881	2	C3	b	157	-29	189.641
53	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	59	54	8	27.8	812	2	B2	b	-137	199	189.58
54	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	57	90	15	55.3	474	2	B2	c	167	-23	189.663
55	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	61	34	13	22.2	71	2	B4	d	145	0	189.927
56	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	61	65	13	51.8	934	2	B3	c	-36	101	189.876
57	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	60	50	15	37.1	127	2	A2	b	16	-70	189.742
58	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	67	59	15	54	434	2	C3	a	-100	85	189.761
59	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	40	47	7	12.2	547	2	C3	a	-177	-103	189.641
60	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	67	76	14	57.5	1016	2	B3	c	190	204	189.93
61	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	48	41	14	18.1	651	2	B3	c	111	47	189.918
62	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	44	35	13	17.1	1027	2	B3	a	136	113	189.635
63	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	71	79	27	130	640	2	B3	c	-38	50	189.928
64	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	60	49	12	41.7	277	2	A1	a	-70	-39	189.582
65	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	57	60	19	63.9	903	2	B3	a	65	-130	189.732
66	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	51	58	20	41.8	693	2	B3	d	12	-42	189.801
67	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	33	69	14	27.7	441	2	C3	a	-30	-153	189.745

第2表 石器観察表(1)

図番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重量	番号	層	大G	小G	南北	東西	標高
68	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	39	23	16	13.6	397	2	B1	c	195	51	189.434
69	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	60	62	20	56.5	288	2	B4	a	-198	-32	189.758
70	搔器・削器類	無班晶質玄武岩	50	62	23	54.6	660	2	B3	b	142	153	189.878
71	石錐	無班晶質玄武岩	60	25	23	21.4	265	2	A1	c	45	-18	189.517
72	石錐	無班晶質玄武岩	64	27	9	14.3	113	2	A2	c	56	-57	189.751
73	石錐	無班晶質玄武岩	58	39	10	17.8	574	2	B2	b	-92	-98	189.664
74	石錐	無班晶質玄武岩	50	44	13	22.3	1019	2	B3	b	52	-82	189.722
75	石錐	無班晶質玄武岩	53	58	21	32.9	578	2	B2	a	-162	150	189.592
76	石錐	無班晶質玄武岩	28	49	12	9	57	2	A4	d	-186	80	189.915
77	石錐	無班晶質玄武岩	38	46	13	16.1	258	2	A1	c	-45	50	189.514
78	彫器	黒色黒曜石	47	23	9	6.6	129	2	A2	b	70	59	189.8
79	石錐	無班晶質玄武岩	45	42	12	17.1	43	2	A2	d	82	86	190.72
80	石錐	無班晶質玄武岩	42	37	11	12.7	986	2	B3	a	-94	52	189.751
81	磨製石斧	粗粒玄武岩	47	41	9	14.1	719	2	B3	a	-145	-90	189.834
82	凹石	粗粒玄武岩	78	49	30	165.9	1031	2	B3	c	205	-116	189.65
83	礫	粗粒玄武岩	73	57	32	175.2	3	2	C2	a	195	-70	190.63
84	原石	黒色黒曜石	85	69	37	251.8	630	2	B2	b	74	10	189.621
85	石核	暗灰色黒曜石	26	37	18	12.9	825	2	B2	d	70	-204	189.489
86	石核	無班晶質玄武岩	49	77	35	104.2	49	2	A2	b	175	176	190.89
87	石核	青灰色黒曜石	27	33	7	4.8	280	2	A1	d	96	64	189.601
88	石核	無班晶質玄武岩	49	73	29	106	759	2	C3	b	152	-175	189.793
89	石核	無班晶質玄武岩	71	57	25	99.1	1001	2	B3	d	-25	120	189.597
90	石核	無班晶質玄武岩	37	99	36	111.9	988	2	B3	a	-202	160	189.763
91	石核	黒色黒曜石	23	28	17	10.7	438	2	C3	d	127	114	189.882
92	石核	無班晶質玄武岩	42	39	23	49.8	837	2	A1	c	-117	194	189.562
93	石核	無班晶質玄武岩	100	77	31	245.1	292	2	B4	a	68	-123	189.751
94	使用痕剥片	無班晶質玄武岩	52	71	14	40.5	632	2	B2	b	-33	-130	189.622
95	使用痕剥片	無班晶質玄武岩	66	64	14	53.1	186	2	B4	d	177	-138	189.847
96	使用痕剥片	無班晶質玄武岩	48	84	13	33.9	385	2	B1	c	28	20	189.341
97	使用痕剥片	黒色黒曜石	42	15	7	3.4	636	2	B3	c	-160	150	189.883
98	使用痕剥片	無班晶質玄武岩	15	68	9	9.3	318	2	A3	d	64	91	189.767
99	使用痕剥片	無班晶質玄武岩	28	54	10	10.7	353	2	B2	d	-58	-175	189.494
100	剥片	無班晶質玄武岩	81	37	12	25.1	920	2	B3	c	-138	-150	189.849
101	剥片	無班晶質玄武岩	62	36	10	15.5	192	2	B4	a	-56	-96	189.872
102	剥片	無班晶質玄武岩	69	41	13	33.6	596	2	B2	d	-109	0	189.548
103	剥片	無班晶質玄武岩	80	45	11	31.8	115	2	A2	c	-130	105	189.689
104	剥片	無班晶質玄武岩	41	75	12	32.1	527	2	B1	b	12	10	189.471
105	剥片	無班晶質玄武岩	57	27	10	10.6	541	2	B1	c	67	144	189.43
106	二次加工剥片	無班晶質玄武岩	65	40	13	31.7	358	2	B2	d	-6	48	189.498
107	剥片	無班晶質玄武岩	55	21	6	7.1	5	2	C2	a	15	28	190.687
108	剥片	暗灰色黒曜石	53	32	6	9.1	272	2	A1	b	112	126	189.658
109	尖頭状石器	無班晶質玄武岩	53	32	10	15.6							
110	尖頭状石器	無班晶質玄武岩	37	23	11	8.9							
111	石鏃未製品	灰色黒曜石	29	19	7	3.5							
112	石鏃未製品	黒色黒曜石	47	24	8	7.2							
113	石鏃	無班晶質玄武岩	37	20	6	2.9							
114	局部磨製石鏃	無班晶質玄武岩	36	20	4	3.3							
115	石鏃	黒色黒曜石	33	26	9	5.7							
116	石鏃	黒色黒曜石	21	16	4	1.3							
117	石鏃	黒色黒曜石	16	17	3	0.8							
118	石鏃	灰色黒曜石	31	22	7	2.8							
119	石鏃	暗灰色黒曜石	24	16	4	0.9							
120	石鏃	黒色黒曜石	23	14	3	0.5							
121	石鏃	黒色黒曜石	23	12	4	0.6							
122	石鏃	無班晶質玄武岩	28	14	4	1.2							
123	石鏃	黒色黒曜石	18	15	3	0.6							
124	石鏃	黒色黒曜石	23	12	2	0.7							
125	石鏃	黒色黒曜石	15	11	3	0.5							
126	石鏃	黒色黒曜石	25	13	4	1							
127	石鏃	無班晶質玄武岩	24	14	4	1							
128	石鏃	黒色黒曜石	40	13	4	1.8							
129	石匙	無班晶質玄武岩	62	68	10	39.5							
130	削器	無班晶質玄武岩	46	47	8	16.3							
131	石核	無班晶質玄武岩	47	51	30	91.2							
132	ストーンリッタチャー	砂岩	107	66	24	272.7							
133	凹石	無班晶質玄武岩	88	87	52	620.5							

第3表 石器観察表(2)

第3節 広久保遺跡出土土器 (第21~23図、図版7~9)

広久保遺跡では全体で264点の土器が出土した。有文土器が約90点である。ここでは有文土器のうち文様が判別できた75点すべての資料を掲載した。

(1) 土器の分類

有文土器は押型文土器を中心とするが、突帯や沈線文、隆帯文など文様のヴァリエーションが豊富である。しかしそれでは細片で、全体の器形が判明するものはない。したがって文様をもとに分類し、報告することにする。具体的には押型文をもつものをI類、もたないものをII類として大分類し、その他の文様や文様の組み合わせによってさらに細分した。

①押型文を施文するもの	I類 (第21~22図1~44)
押型文+沈線文	I a類 (1)
押型文+突帯文	I b類 (2・3)
押型文+隆帯文	I c類 (4)
押型文+沈線文+隆帯文	I d類 (5)
押型文のみ	I e類 (6~44)
②押型文を施文しないもの	II類 (第22~23図45~75)
沈線文	II a類 (45~63)
突帯文	II b類 (64・65)
隆帯文	II c類 (66~68)
突帯文+沈線文	II d類 (69~71)
隆線文	II e類 (72)
③その他	III類 (73・74・75)

(2) 繩文土器

① I a類 (押型文+沈線文) (1)

1は口縁部の資料である。外面は縦走する山形押型文を施文したのちに、曲線を描く沈線を4本横走させる。内面は口縁部近くに山形押型文を横走させ、口唇部にも山形押型文を施文している。

② I b類 (押型文+突帯文) (2・3)

2は外面に縦走する山形文を施したのちに2本の突帯を貼りつけるものである。内面はナデ調整である。磨滅によって判然としないが、上位の突帯頂には押型文を施文するようである。3は外面に縦走する山形押型文を施し、断面三角形の突帯を貼りつけている。内面はナデられている。

③ I c類 (押型文+隆帯文) (4)

4は外面に山形押型文を施し、隆帯を貼りつけるものである。

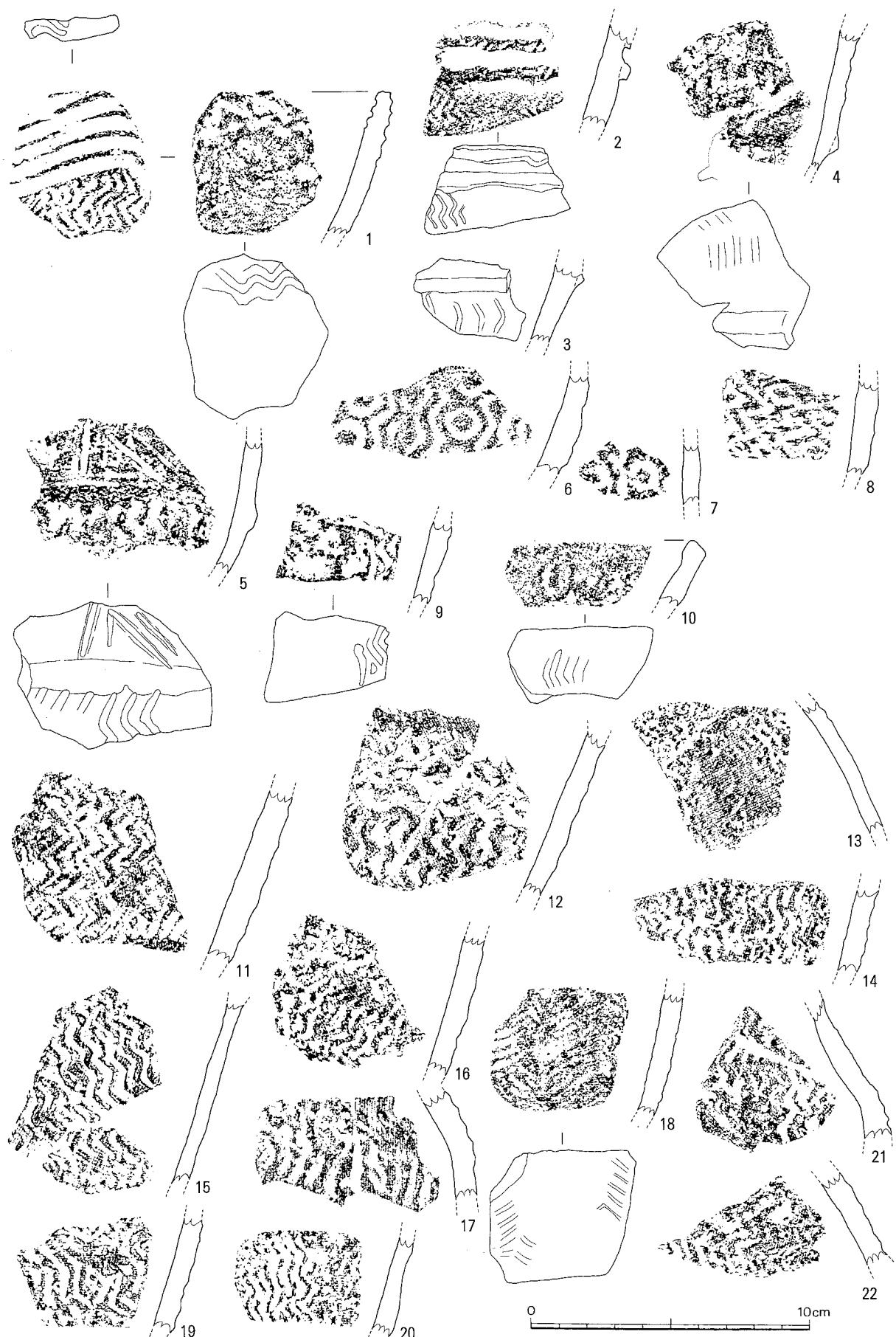
④ I d類 (押型文+沈線文+隆帯文) (5)

5は外面に隆帯を貼りつけたあと、上半には沈線、下半には縦走する山形押型文を施文するものである。内面は横にナデている。

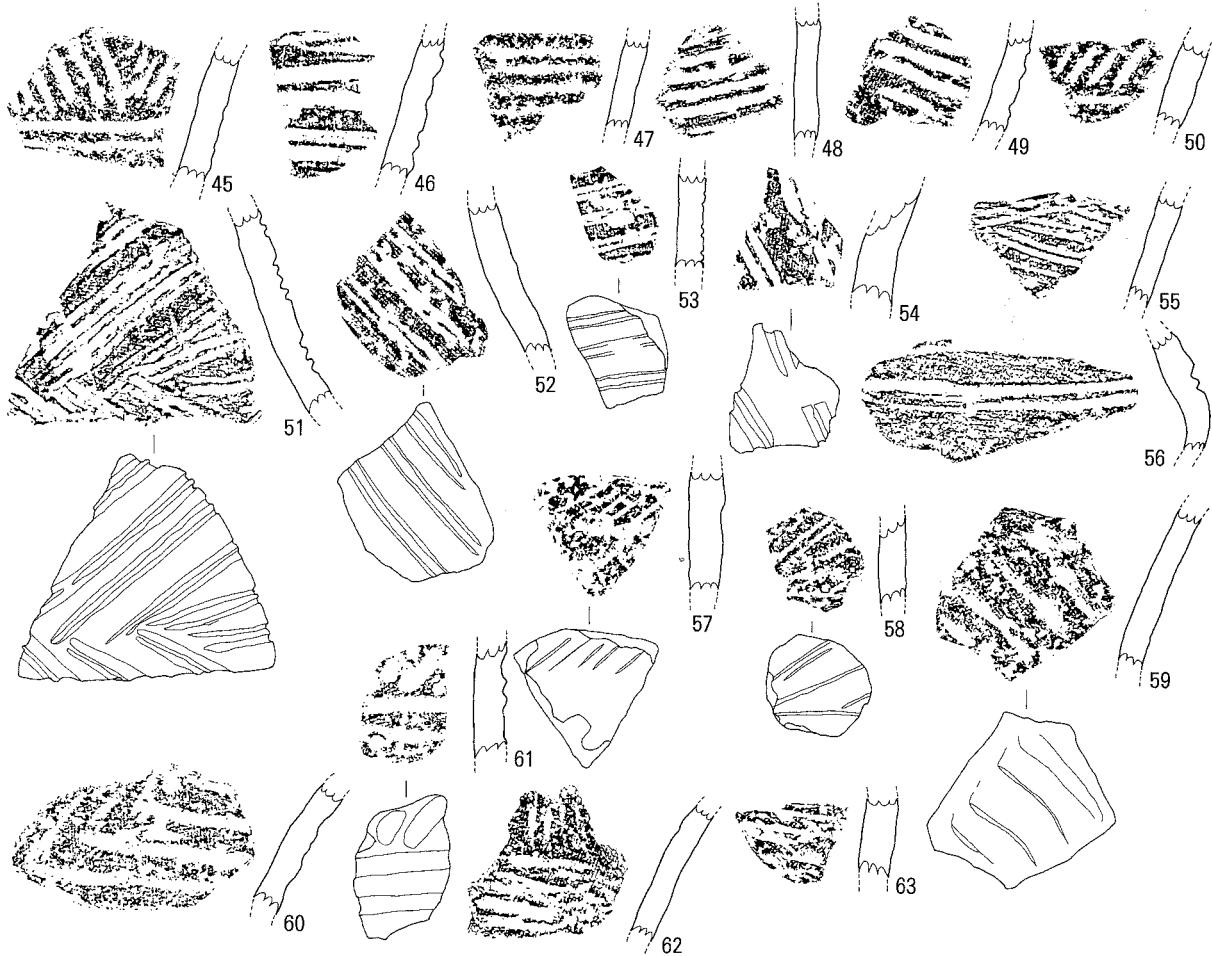
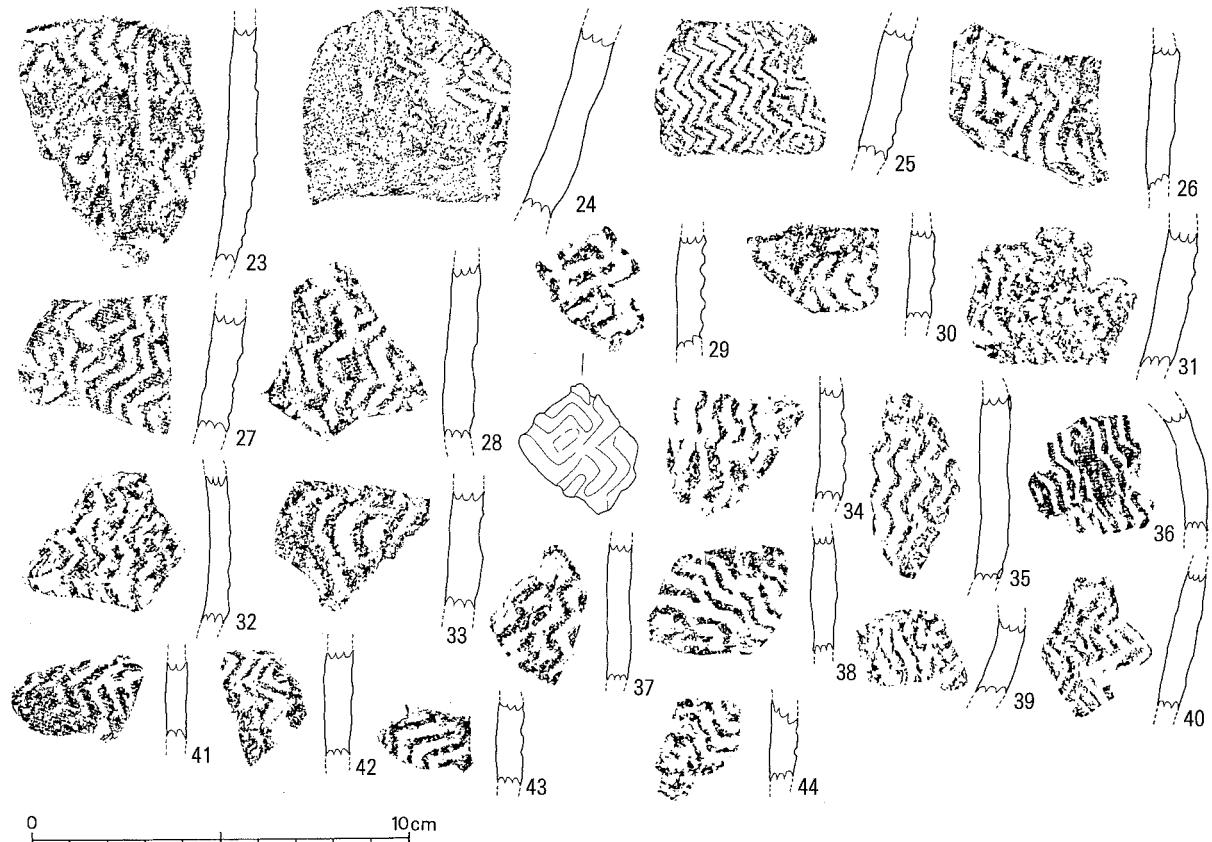
⑤ I e類 (押型文のみ施文) (6~44)

6~8は同心円文をもつ異形の押型文土器である。8は菱形文といえるかもしれない。その他の資料(9~44)はすべて山形の押型文である。総じて押型文は浅く施文され、山形の波頂部の距離が長く、山の高さも低い。施文方向も縦走するものがほとんどである。色調は表面が黒褐色を呈するものと赤褐色を呈するものの2種がある。9は煙道付き炉穴内より出土した。

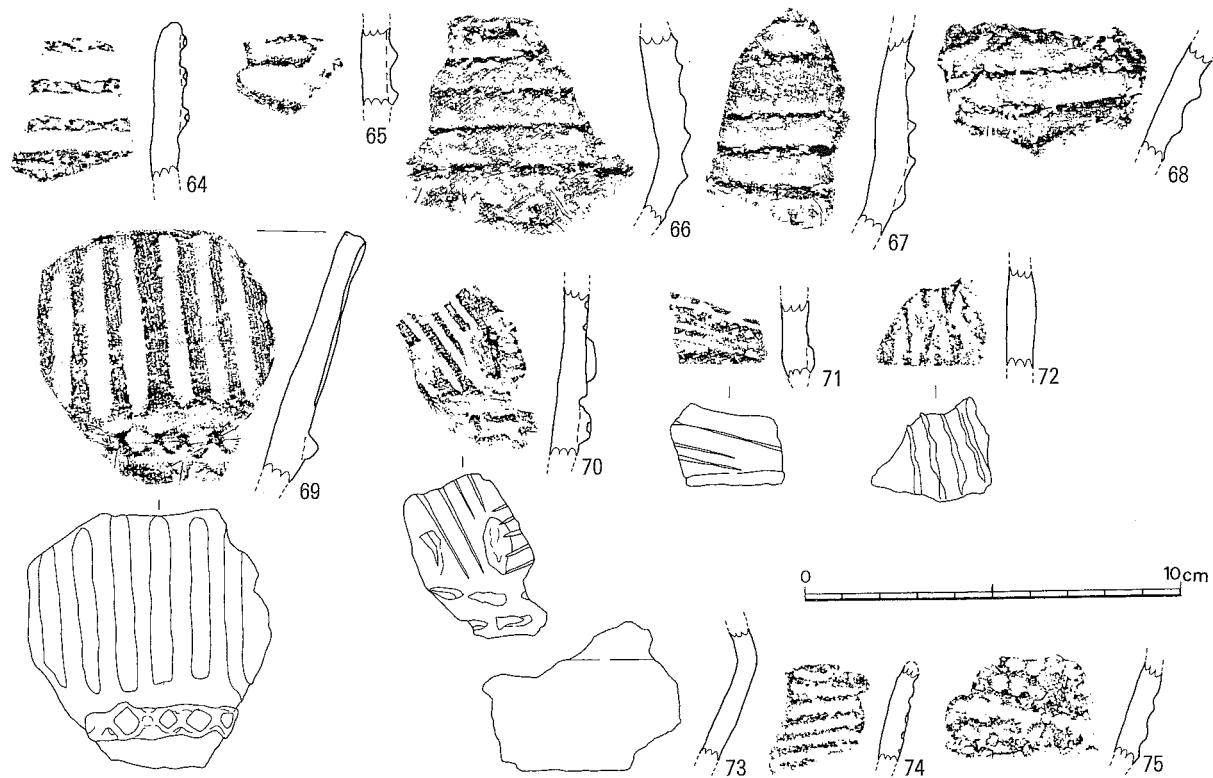
⑥ II a類 (沈線文) (45~63)



第21図 広久保遺跡出土の縄文土器① ($S = 1 / 2$)



第22図 広久保遺跡出土の縄文土器② (S = 1 / 2)



第23図 広久保遺跡出土の縄文土器③ ($S = 1 / 2$)

沈線文は平行沈線文ないし、折帶文のように異なった方向の平行沈線文と組み合わせて施文するもの(45~50)と、半截竹管文によるもの(51~56)、浅い沈線文(60・61)、細沈線のもの(57~59)、条痕状のもの(62・63)に分けられる。

⑦ II b 類 (突帶文) (64)

64は3本の貼りつけ突帶が確認できる。突帶頂部には横走する山形押型文が施文されている。内面はナデである。

⑧ II c 類 (隆帶文) (65~68)

横走する複数の隆帶を貼りつけ、ナデ調整によって隆帶の断面を三角形に成形するものである。似通った文様としては轟B式土器の古い段階の隆帶があげられる。

⑨ II d 類 (突帶文+沈線文) (69~71)

69は口縁部資料である。外面には突帶を貼りつけ、刺突によって刻目をつけている。突帶より上位には縦に複数の平行沈線文を施す。内面はナデ調整である。70・71は突帶と細い沈線文を施したものである。

⑩ II e 類 (微隆線文) (72)

いわゆるミミズばれ状の微隆線をもつものである。内面は擦過状の調整である。

⑪その他 (73~75)

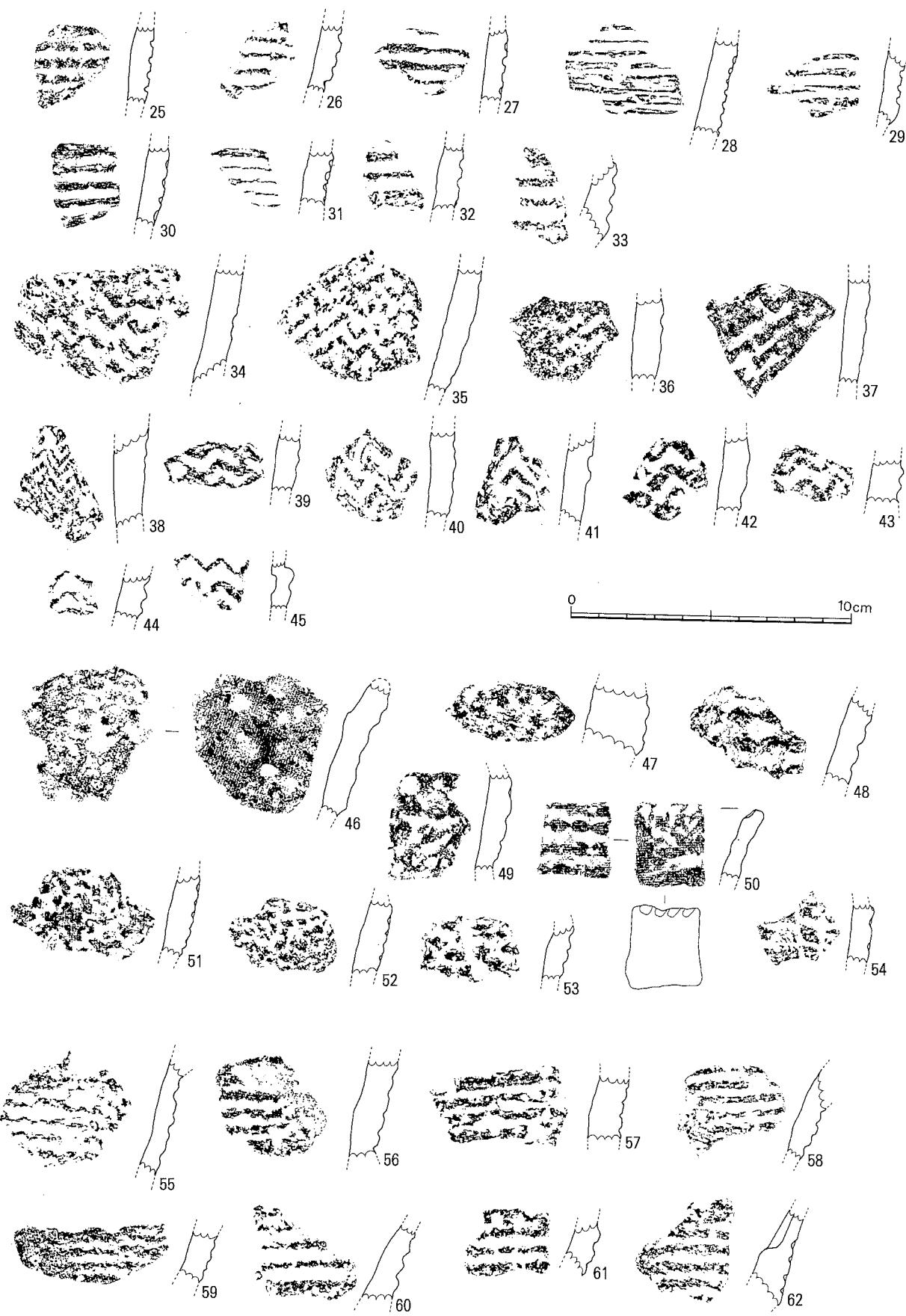
73は胴部の屈曲部の資料である。屈曲部下半はかなり磨滅して判然としないが、山形押型文が施文されているようである。74は口縁部に近い資料であるが、口径が小さく赤色顔料の痕跡を残している。壺の可能性もあるが断定はできない。75は風化が激しく文様などが判然としない資料である。

(3) 小 結

広久保遺跡出土の縄文土器は山形押型文に突帶文・隆帶文・沈線文を施すものであった(I類)。山形文は山形の頂部に間隔があって、山の高さも低く押捺も浅い。これらの特徴は早期中葉末に編年さ



第24図 茶園遺跡出土の縄文土器① (S = 1 / 2)



第25図 茶園遺跡出土の縄文土器② (S = 1 / 2)



第26図 茶園遺跡出土の縄文土器③ (S = 1 / 2)

れる手向山式土器の特徴に合致するものである。押型文をもたない土器（II群）も施文や出土状況から手向山式土器の範疇に入るものと理解している。

第4節 茶園遺跡出土の縄文早期土器（第24～26図）

(1) 茶園遺跡出土の縄文早期土器

南松浦郡岐宿町茶園遺跡から出土した縄文早期の土器を参考までに掲載報告しておく。茶園遺跡の当該土器の一部は既に公表されている（川道編1998）。ここでは、その際に諸般の事情により掲載されなかった資料を報告する。出土土器の分類は茶園遺跡の報告書に準じた。茶園遺跡の報告書ではI類が沈線文で、II類は押型文土器である。

① I類（沈線文をもつ土器）

- I a類 内外面に沈線文を横走させるもの（1～5）
- I b類 内外面に沈線文を横走させ、さらに内面に原体条痕文を施すもの（6）
- I c類 外面は沈線文を横走させ、内面には横走する山形押型文を施すもの（7・8）
- I d類 胴部片で、外面のみに沈線文を横走させるもの（10・12・14～33）
- I e類 口縁部で、外面のみに沈線文を横走させるもの（9・11・13）

② II類（押型文土器）

- II a類 山形押型文（34～45）
- II b類 楕円押型文（46～54）
- II c類 連珠押型文（55～62）
- II d類 格子目押型文（今回の報告では該当するものがない）

〔引用・参考文献〕

川道 寛編 1998『茶園遺跡』岐宿町文化財調査報告書 第3集 岐宿町教育委員会

第IX章 総括

第1節 煙道付き炉穴について

(1) はじめに

広久保遺跡では長崎県北部で初めて煙道付き炉穴（連穴土坑）を検出した（註1）。この種の遺構はこれまで諫早市を中心とした県中央部と島原半島でしか見つかっていなかったものである。ここでは炉穴の研究史を概観し、本県での状況をまとめておきたい。

(2) 研究史抄

最近の九州における、学史を踏まえての炉穴研究としては、緒方勉や新東晃一による研究がある。緒方は熊本県瀬田裏遺跡の報告書のなかで、炉穴と集石遺構について考察している。緒方は関東および九州の研究者による炉穴研究を検討し、「炉穴については東の関東地区と西の九州地区では類似の形態であることがわかり、地域の懸隔をこえ共通項で括ることも可能であろう」として、東西の炉穴遺構が同じものであることを示唆した。さらに炉穴の機能については集石遺構に用いられる礫を焼くための焼礫遺構とする説や薰製施設説ならびに火種保存説に対しては疑問を投げかけている。そして炉穴の「主たる目的・機能はやはり何らかの食物調理施設とみるほかはない」と結んでいる（緒方1993）。

新東は南九州において早期前半に多く検出される「連穴土坑」とか「煙道付き炉穴」と名付けられた遺構を集成し、考察を加えている。同時に氏が主催する南九州縄文研究会ではこの種の遺構を実際に復元し、使用実験をも行っている。それら一連の考察の結果として氏は、炉穴が「薰製施設」であることをあらためて主張した（註2）。

重山郁子は関東の早期後半の炉穴と南九州の炉穴を比較検討するなかで、両者は同じものであると認識し、煙道付き炉穴も含めて「炉穴」とした（重山1995）。新東は重山の考察をさらに進めて、本来炉穴には煙道が伴い、煙道部そのものに薰製施設としての機能を見いだす立場をとる（新東1997）。したがって新東によると炉穴とは、足場と炉部（燃焼部）を有し、炉部の上部がトンネル状にブリッジをなし、煙道をつくるものということになる（新東1997）。このように南九州における炉穴研究は従来、炉穴のひとつのヴァリエーションとみられていた煙道付き炉穴こそ炉穴本来の姿で、その機能は薰製施設であるという結論に到達しつつある。

南九州におけるこのような炉穴の研究については、今後しだいに評価が定まっていくと思われ、今後の研究の進展に期待したい。

(3) 長崎県の炉穴研究

長崎県で、これまでに「炉穴」として報告された遺構は、諫早市西輪久道（にしわくどう）遺跡1基、同市平（じゃーら）遺跡1基、同市鷹野（たかの）遺跡A地点で10基、同B地点で20基、南高来郡国見町百花台遺跡で11基の総計43基である（註3）。以下、具体的に遺跡名をあげて検討していく。
①西輪久道遺跡（諫早市貝津町西輪久道）

諫早市西部の標高20m～24mの丘陵部に位置する。諫早中核工業団地造成にともなう緊急調査が、1978年（昭和53）から1979年（昭和54）にかけて長崎県教育委員会によっておこなわれた。炉穴とみられる遺構は2号炉址と名付けられたもので、N-15区の第III層中に検出された。「楕円状の炉穴と考えられる土坑」であると報告されている（副島・伴編1986）。

②平（じゃーら）遺跡（諫早市貝津町字平）

諫早市西部の標高26m～29mの丘陵に位置する。諫早中核工業団地造成にともない長崎県教育委員

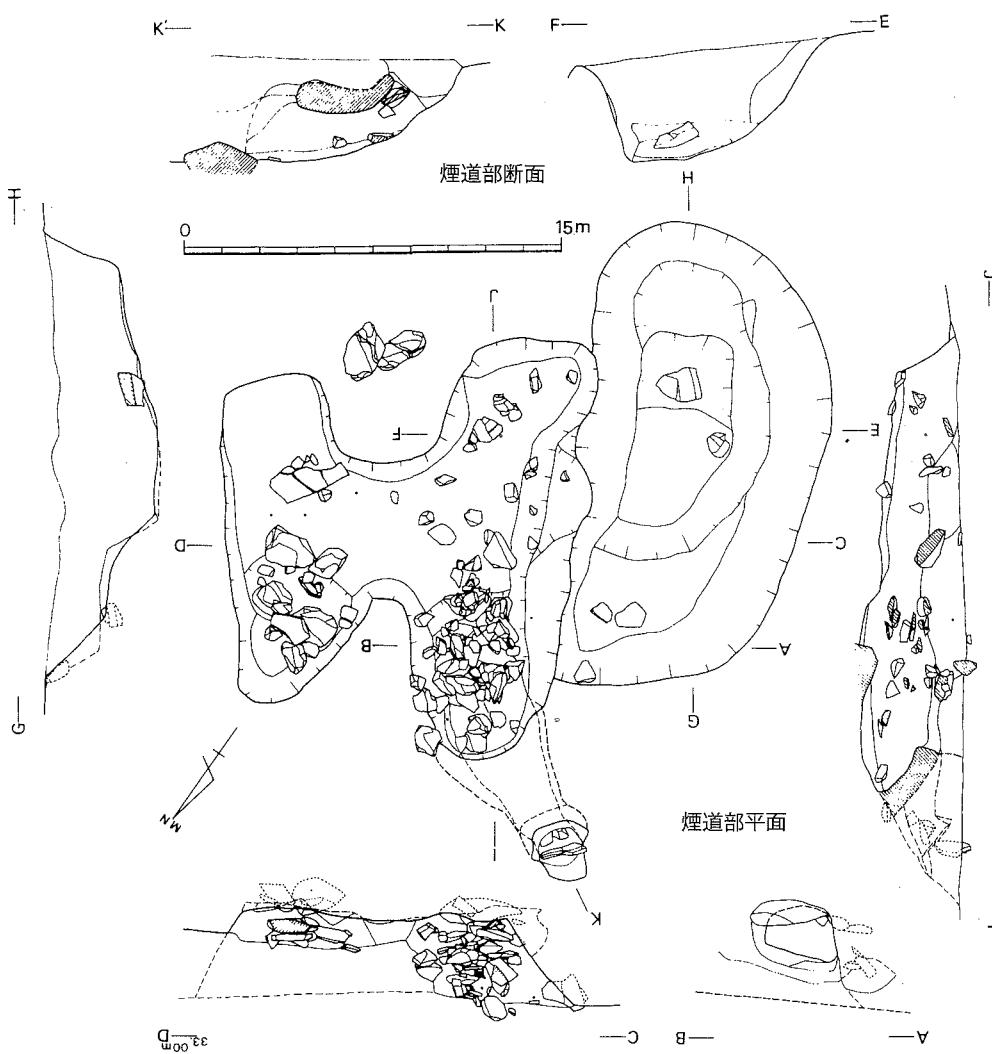
会の緊急調査によって調査された。西輪久道遺跡から南西500mの距離にある。検出された炉穴1基はN-12区の第II層・褐色粘質土層中より出土している（副島・片山編1983）。

③鷹野（たかの）遺跡（諫早市津久葉町）（第27図）

諫早市西部の標高24m～37mの低丘陵上に立地する。西輪久道遺跡の南西400mに位置する。諫早中核工業団地造成にともなう緊急調査によって発見された。炉穴はA地点の第II層で10基検出している。B地点では3群に分かれて20基が検出されている。とくにA地区J-7区で検出された15号炉穴は煙道部分が残存していた。煙道部分は高さ20cm、幅28cm、出口部分は径18cm程の円形で、礫石6個で閉塞していたという。炉穴内からはユリ科の球根が出土している。また15号炉穴の放射性炭素年代測定では 8970 ± 90 yBPの年代値がでている（副島・伴1986）。鷹野遺跡では15号炉穴のほかに1号炉穴、17号炉穴、29号炉穴の ^{14}C 年代測定もおこなわれている（註4・5）。

④百花台（ひゃっかだい）遺跡（南高来郡国見町）

島原半島中央部にそびえる雲仙の北麓の標高200mに位置する。1982年（昭和57）から1988年（昭和63）にかけて百花台広域公園建設および、県道国見～雲仙線改良工事に伴う調査がおこなわれた。百花台広域公園建設に伴う百花台D遺跡では、炉穴と報告されたものが4基検出されている（田川・副



第27図 鷹野遺跡の15号炉穴 ($S = 1/30$)

島・伴編1988)。さらに県道国見雲仙線改良工事に伴う調査では7基の炉穴が検出されている(田川編1994)。

(4) 若干の考察

本県の炉穴について、まとめた記述を行ったのは副島和明である。副島は鷹野遺跡の報告書のまとめの中で、検出した集石遺構と炉穴遺構に「石蒸しの調理用炉址としての用途が窺われ、相互に補完する状況」を想定し、具体的には「炉址に用いる礫石を焼く場所と調理用の炉址」であると推定した(副島・伴編1986)。広久保遺跡でも炉穴から約3mほど離れて集石遺構が検出されている(第10図)。このように、集石遺構と炉穴をセットとする考え方は現在も一部の研究者にはあるようである。これに対して、栗田勝弘は「炉穴と集石炉の配置を同じ条件で別の角度から眺めれば、両者が遠距離に遺存する例が多い」として、両者をセットとする説を批判している(栗田編1983)。先述した緒方勉も「焼礫する手法にはわざわざ土坑を掘開する必要があるのだろうかの疑問がある」として否定的である。最近の研究状況を踏まえると、集石遺構と炉穴がセットで機能することを積極的に支持することはできない。

さらに副島は平遺跡の報告書のなかでも、県内の炉穴遺構を検討している。そこでは炉穴の形態による分類を試みている。それによるとI類(楕円形状の掘り込みをもつもの)、II類(煙道をもつもの)、III類(円形を呈するもの)の3形態に分類し、I類は大きさによってさらに2つに細分している。そして各遺跡から検出された炉穴を先の分類にあてはめているが、そこにはそれぞれの類型に属する炉穴の基数のみしか示されておらず、具体的な分類基準や、どの遺跡のどの炉穴がどの類型に入るのか明記されていないのが惜しまれる。

また各類型の所属時期についても触れてはいるが、報告書の記述のため、簡潔な表現となっている。報告書を読む限り、I-a類の一部とII類は新しく、早期中葉から後葉にかけてのものと考えているようである(副島・片山編1983)。

広久保遺跡の炉穴の発見によって今後、県北部での開地遺跡の調査でも炉穴が発見される可能性がでてきた。広久保遺跡で検出した煙道付き炉穴は子細にみると炉穴の主軸に対して、2つの土坑の長軸が直交するという形態である。南九州の集成資料を見る限り、主軸に対してそれぞれの土坑の長軸が平行するものがほとんどで、広久保のように直交する例はみられないようである。今後資料の増加を待って検討すべきことであろう。

(5) 煙道付き炉穴の年代について

煙道付き炉穴の埋土からは若干の細片の土器が出土したが、型式がわかるものは手向山式土器と思われる山形押型文土器が1点のみであった(第21図9)。手向山式土器の編年的位置は早期中葉末といわれる。また炉穴の埋土の放射性炭素測定年代は9480±80yBP(補正¹⁴C年代)で、従来いわれている早期中葉の実年代観よりも約2000年ほど古い結果がでている(附編)。広久保遺跡の煙道付き炉穴は出土土器や検出状況からみて、手向山式土器の段階である可能性が最も高い。しかし¹⁴C年代のみとりあげれば広久保遺跡の煙道付き炉穴も早期前葉のものでよいことになる。南九州の煙道付き炉穴の所属時期が早期前半ということとも矛盾しない。したがって現時点では広久保遺跡の煙道付き炉穴は、早期の段階であることには違いないが、¹⁴C年代が示す早期前葉なのか、手向山式土器の段階である早期中葉末であるのかについては結論を留保せざるをえない。

第2節 手向山式土器について

(1) はじめに

広久保遺跡の調査では手向山式土器の資料を比較的まとまった形で得ることができた。器形など、

全体が復元できるものはないが、長崎県北部の調査では初めて出土した土器型式である。かつては文様が轟式土器や曾畠式土器に類似するため、縄文前期に編年されることが多かった土器であるが、1980年代以降に広域火山灰の研究が進むなかで、早期中葉に編年されるようになって現在にいたっている。ここでは手向山式土器の研究史を概観し、長崎県の状況も踏まえながらまとめてみたい。

(2) 手向山式土器の研究状況

手向山式土器についての研究史は横手浩二郎の論考に詳しいので(横手1998)，詳細はそれに譲るとして、ここでは手向山式土器の最近の研究状況をまとめておきたい。

手向山式土器が押型文土器終末の型式であることは、まず異論のないところであろう。しかし、その系譜や消滅過程ならびに、その細分については今後の研究に待つところが大きいのも事実である。

まず系譜の問題であるが、最近の研究は手向山式土器の成立を西日本の押型文土器段階末期の動向との関連でとらえようという傾向にある。

坂本嘉弘は「高山寺式土器に見られる広域分布土器」と南九州の貝殻文系円筒土器が接触した結果、手向山式土器が発生したとした(坂本1995)。さらに坂本は「刻目のある突帯と幾何学的な沈線文や微隆起線文」のような文様は「東九州の押型文土器の伝統の中には見られない」として「沈線文や刻目のある突帯文」が施文される南九州の貝殻文円筒形土器からの影響を説いている(坂本1998)。

水ノ江和同は手向山式土器の微隆起線文や幾何学的な沈線文の系譜は「少なくとも九州在来の要素から求めることはできそうにない」として「田村式の次の段階の究明と九州以外の地域との関係に注意を払って行かなければならない」としている(水ノ江1998)。

次に手向山式土器の細分の問題であるが、中間研志は治部ノ上(じぶのうえ)遺跡の報告のなかで手向山式土器の細分を行っている。氏は鹿児島県姶良郡横川町星塚遺跡のⅢ類土器は「口縁外面に突帯(隆帯)を持つものや、頸部外面に凹線幾何学文を施す類が出土しておらず、この種を一つの型式として認定」できるとして、これをI式とした。II式は「隆帯文、凹線幾何学文、刺突文等の他の文様要素が後から入ってきて混合した」土器で、先のI式からII式への変化を想定している(中間1994)。

水ノ江和同は中間が設定したI式は「刻目突帯文や特殊な押型文をはじめ微隆起線文や幾何学的な沈線文」がみられないことから、「田村式と手向山式をつなぐ」新たな型式の土器である可能性を指摘した。そして「型式学的な観点からみると、手向山式の始まりは山形文を全面に施し口縁部や胴部の屈曲部に刻目突帯文を貼り付けるタイプのものからで、口縁部内面や胴下半部にのみ山形文を施して微隆起線文や沈線文と組み合わさるタイプのものがより後出的な要素」であるとした(水ノ江1998)。

横手浩二郎は文様要素、施文部位、分布域という要素の分析をもとに、手向山式土器を3型式に細分した。すなわち1式は押型文を主文様とするもの、2式はミミズばれ文と押型文を主体的にもつもの、3式は沈線文と凸帯を文様として主体的にもつもので、これらの型式は1式→2式→3式へと変化とした(横手1998)。

また手向山式土器の消滅の問題について、横手は手向山式土器は早期中葉段階で終了し、平桟式土器につながるという考え方を支持した(註6)。

(3) 長崎県の手向山式土器

長崎県でこれまで手向山式土器が報告されたのは国見町百花台遺跡で「おそらく手向山式土器の系統か」という土器(報文のFig92-16)(安楽1994)のみである。したがって広久保遺跡は本県ではじめて手向山式をまとめて出土した遺跡といえる。細片で器形を復元できる資料がないため、細かな検討はできないが、中間や横田の研究に従えば突帯をもち沈線文をもつところから手向山式土器のなかでも新しい傾向をもつ土器群といえるかもしれない。

第3節 岐宿町茶園遺跡の縄文早期の土器について

参考資料として、諸般の事情で本来の報告書に載せられなかった岐宿町茶園遺跡の縄文早期の土器を掲載した。茶園遺跡の早期土器は押型文土器の一群と口縁部に沈線文をもつ土器群に大別される。この沈線文系の土器はいまのところ県内外に類例はなく、きわめて特異な土器群である。しかも内面に押型文を施文した土器が存在し、明らかに押型文土器の影響が窺える資料である。強いて県内の早期土器のなかに類例をもとめるならば、口縁部付近に沈線文と条痕文の違いはあるものの、南高来郡有明町一野遺跡出土の円筒形条痕文土器があげられる。しかし、器壁の厚さや施文方法など相違点のほうが際だっているといわねばならない。茶園遺跡出土土器が器形すら判然としない現段階ではこれ以上の考察は困難であるが、五島列島で縄文早期の段階で押型文土器とは様相が異なる土器が使用されていたことは明らかである。今後、茶園遺跡出土の縄文早期土器の系譜や押型文土器との関連が検討されなければならない。

〔註〕

- 註1 この種の遺構については本文中に示した名称のほかにも「連結炉穴」と呼称する研究者もいる。鹿児島県では草創期のものは「煙道付き炉穴」、早期のものについては「連穴土坑」と呼称されてきたよう（雨宮1997）、最近では早期の連穴土坑にも「煙道付き炉穴」という名称がもちいられるようになってきたということである（新東1997）。したがって、ここでは煙道部が残存していたという広久保遺跡の遺構の特徴を強調するためにも「煙道付き炉穴」の用語を使用する。
- 註2 最初に、煙道付き炉穴や連穴土坑を薰製施設としたのは瀬戸口望である。
- 註3 副島和明は西輪久道遺跡の炉穴の報告のなかで、諫早市牛込遺跡の炉穴様遺構2基と、岩下洞穴の21基の炉址も炉穴として集成している。牛込遺跡では炉址様遺構として3基の遺構が検出されているが、副島がどの遺構を炉穴としたかは明記していないので判然としない。岩下洞穴のものはその形態から地床炉と考えられる。したがって今回は、牛込・岩下両遺跡の遺構は検討対象から除いた。
- 註4 1号炉穴は 9680 ± 170 yBP、17号炉穴は 9520 ± 105 yBP、29号炉穴は 9700 ± 115 yBPの年代値である。
- 註5 鷹野遺跡の報告書の巻末に ^{14}C 年代測定値が掲載されている。そのなかに西輪久道2号炉穴の年代値として 7740 ± 105 yBPの年代がしめされている。西輪久道遺跡の報告書では2号炉穴ではなく、1号炉址の年代として報告されているもので、明らかな誤植である。
- 註6 近年、手向山式土器と平柄式土器をつなぐ土器として天道ヶ尾（てんどうがお）式土器（西住1990）が提唱されている。

〔引用・参考文献〕

- 雨宮瑞生 1997 「煙道付き炉穴の設計図」『南九州縄文通信』NO11 南九州縄文研究会
- 安楽 勉 1996 「土器」「県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」（長崎県文化財調査報告書 第116集）長崎県教育委員会
- 緒方 勉編 1993 『瀬戸裏遺跡調査報告II』大津町教育委員会瀬戸裏遺跡調査団・株阿蘇大津ゴルフ場
- 栗田勝弘 1983 『平草遺跡』大分県天瀬町教育委員会
- 坂本嘉弘 1995 「西日本の押型文土器の展開—九州の視点ー」『古文化談叢』第35集 九州古文化研究会
- 重山郁子 1995 「炉穴（宮崎県）」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会
- 新東晃一 1995 「炉穴（鹿児島県）」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会
- 新東晃一 1997 「縄文時代早期の炉穴の復元」『南九州縄文通信』NO11 南九州縄文研究会
- 新東晃一・中村和美編 1993 『星塚遺跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書7）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 副島和明・片山巳貴子編 1983 「平遺跡」『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書I』（長崎県文化財調査報告書 第65集）長崎県教育委員会
- 副島和明・伴耕一朗編 1986 「鷹野遺跡」『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書III』長崎県教育委員会
- 田川 肇・副島和明・伴耕一朗編 1988 『百花台D遺跡－百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集 長崎県教育委員会
- 田川肇編 1994 「百花台遺跡B・C・D遺跡」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』（長崎県文化財調査報告書 第116集）長崎県教育委員会
- 中間研志 1994 「まとめ」『治部ノ上遺跡・座禅寺遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書32
- 西住欣一郎 1990 『天道ヶ尾遺跡（II）』熊本県教育委員会
- 横手浩二郎 1998 「手向山式土器の細分と編年試案」『九州の押型文土器－論攷編－』九州縄文研究会
- 横手浩二郎 1998 「押型文土器様式最末期の様相－九州手向山式土器の再検討－」『古文化談叢』第41集

附編 江迎町広久保遺跡検出の煙道付き炉穴の年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

No.	試 料	前処理・調整	測定法
1	炉内土壤	酸洗浄・石墨調整	AMS法

2. 測定結果

No.	^{14}C 年代 (年 BP)	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦 年 代	測定No. beta-
1	9410 ± 80	-20.8	9480 ± 80	交点: BC 8530 2 σ : BC 8955 TO 8370 1 σ : BC 8620 TO 8425	116026

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年 AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\sigma^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\sigma^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

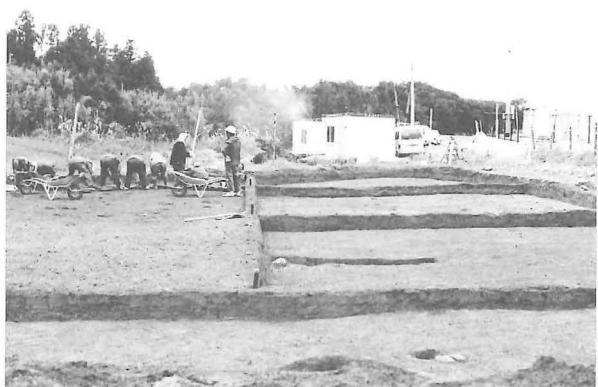
過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代 (西暦) を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年 BP より古い試料には適用できない。

5) 測定No.

bata は、アメリカの β (ベータ) 社の測定番号を示す。

図 版

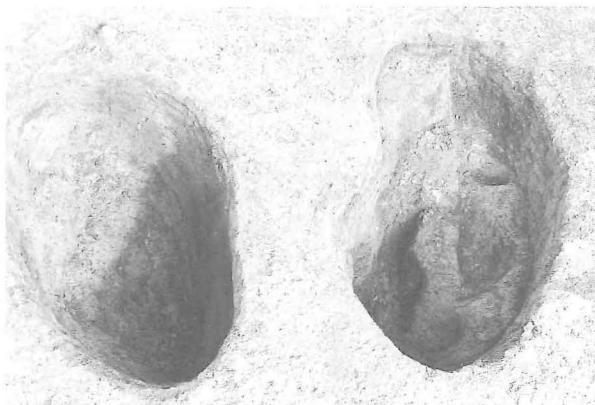
図版 1



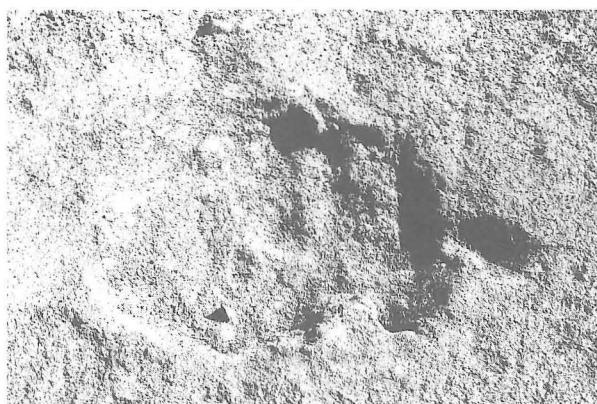
図版 2



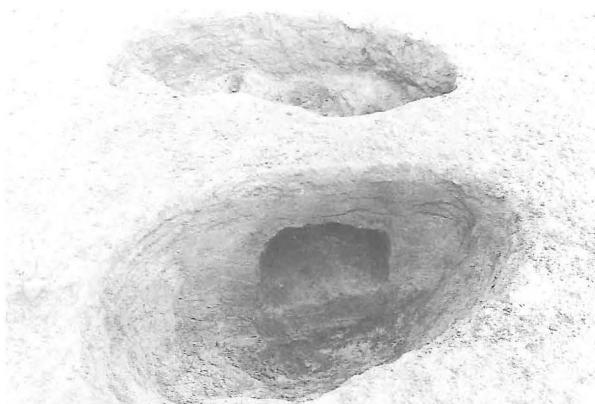
集石遺構検出状況



煙道付き炉穴③



集石遺構完掘状況



煙道付き炉穴④



煙道付き炉穴①



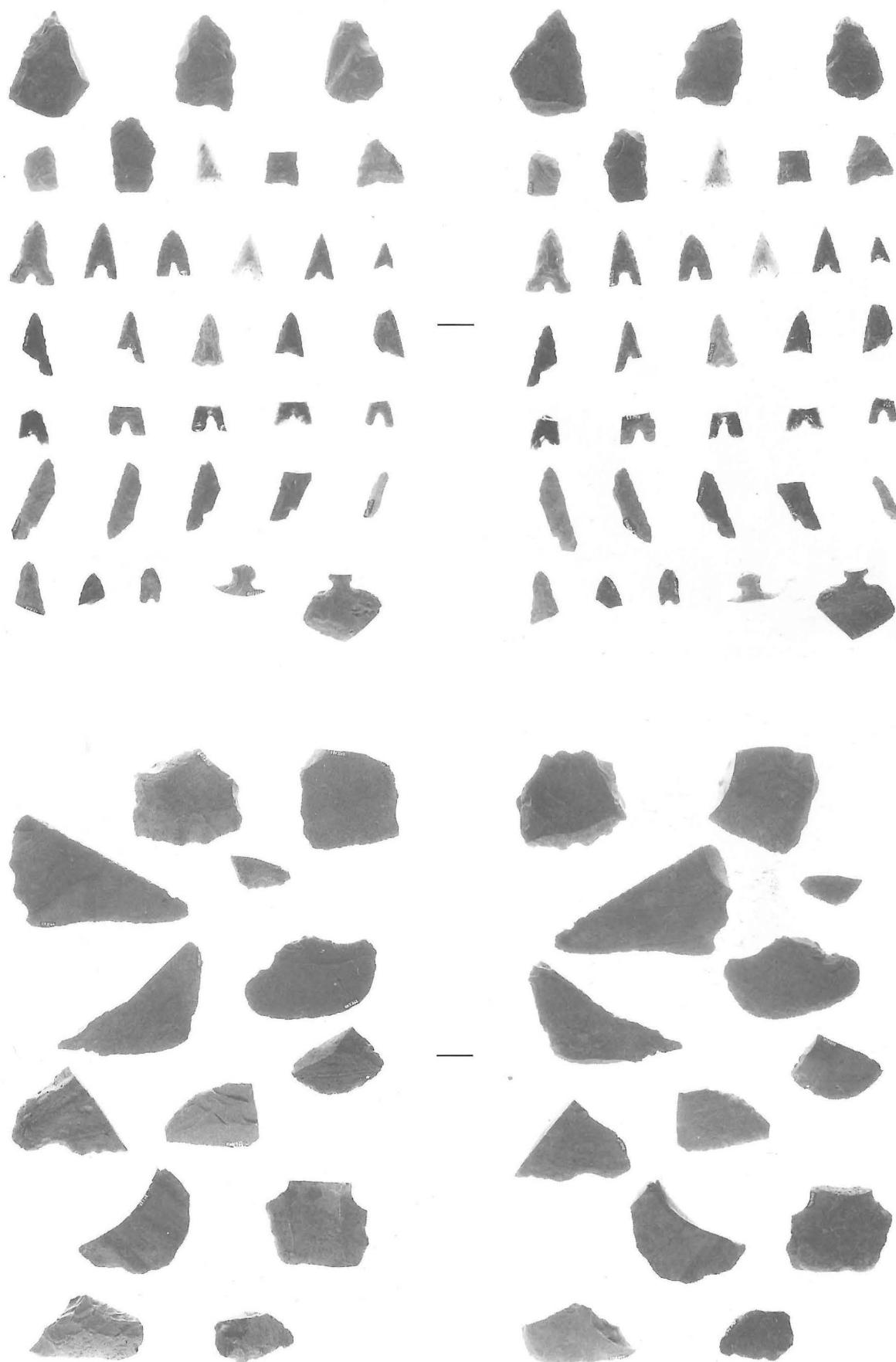
煙道付き炉穴⑤



煙道付き炉穴②

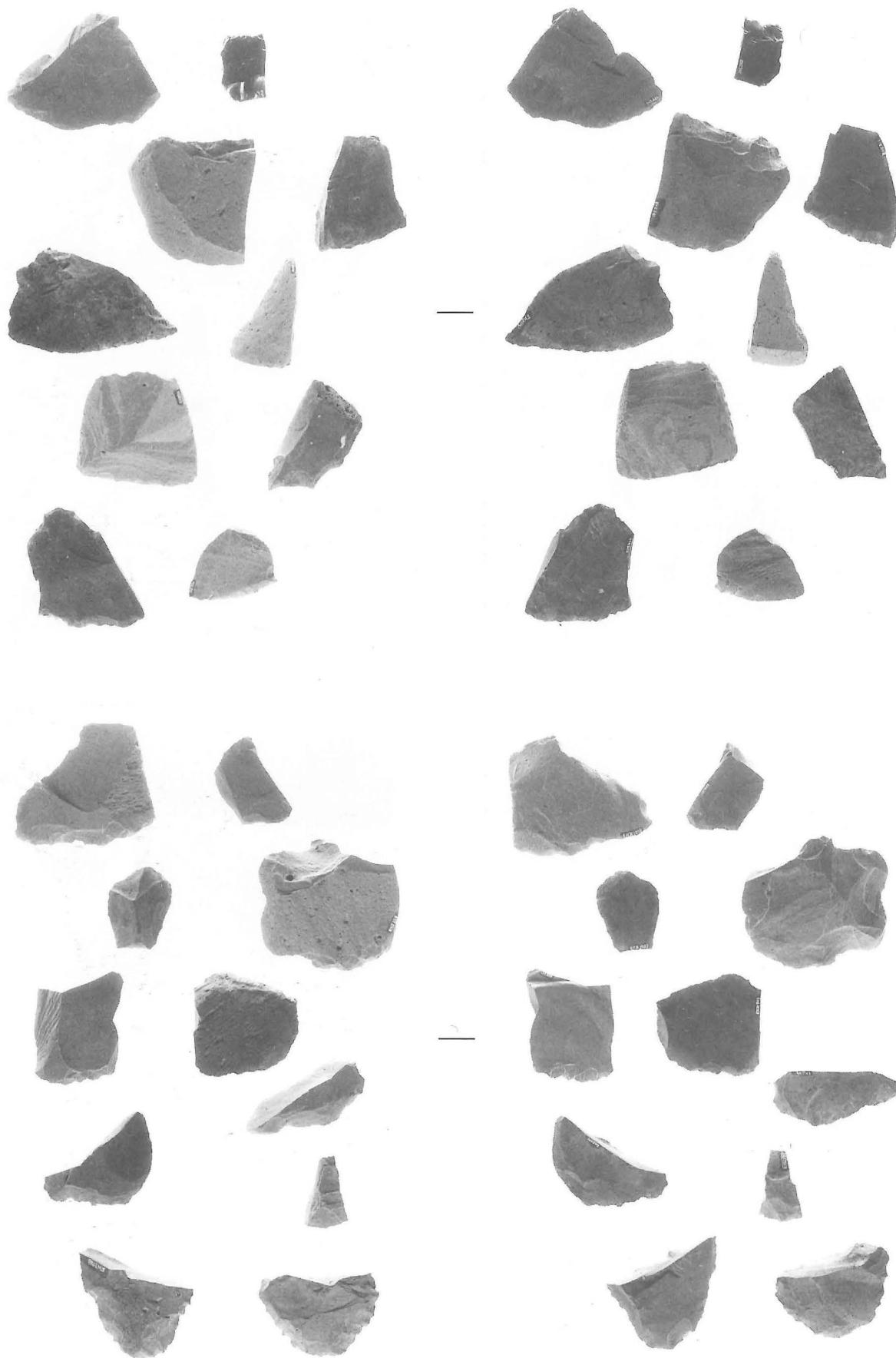


煙道内覆土



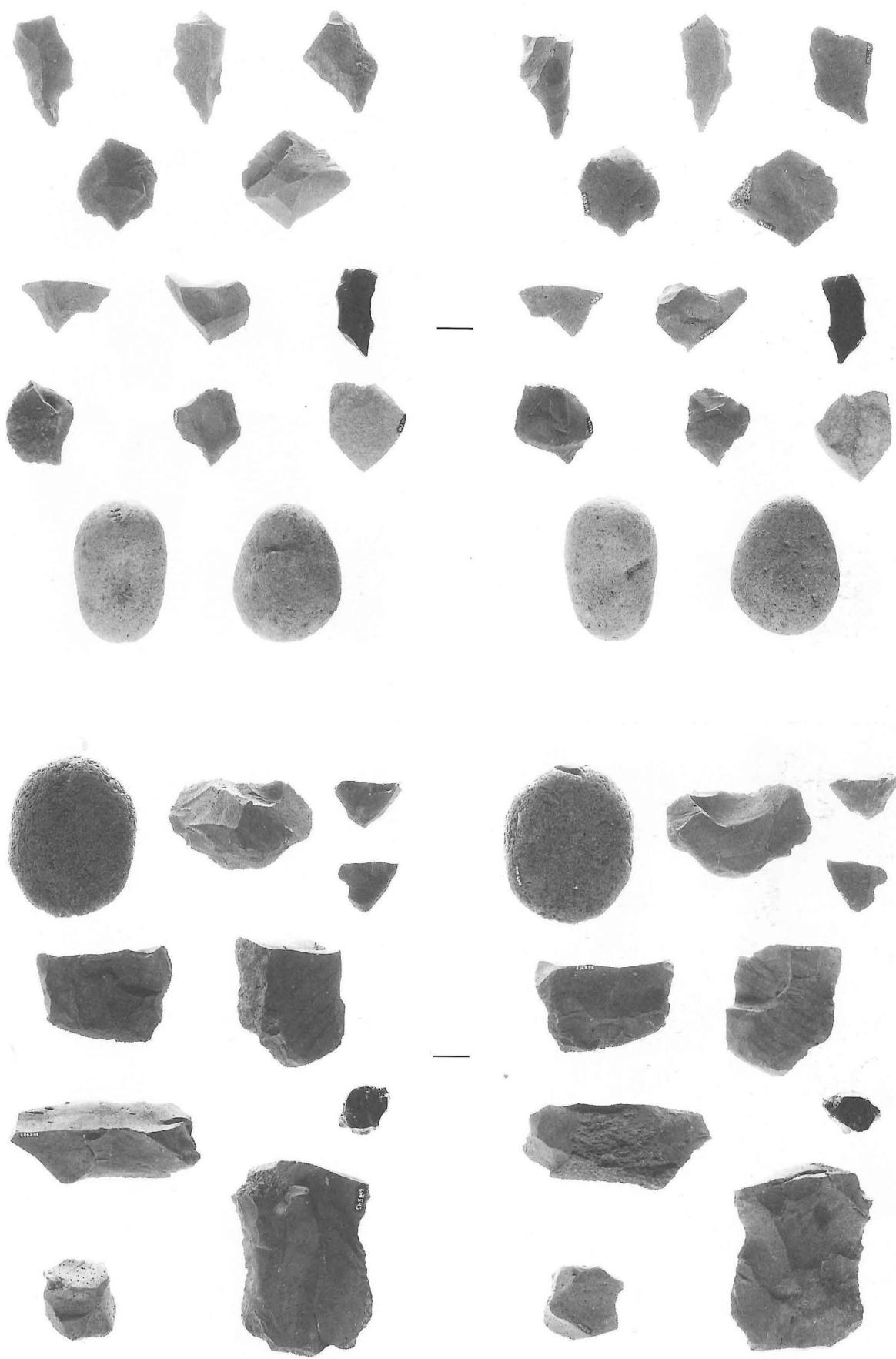
第13・14図に対応、左：表面、右：裏面

図版 4



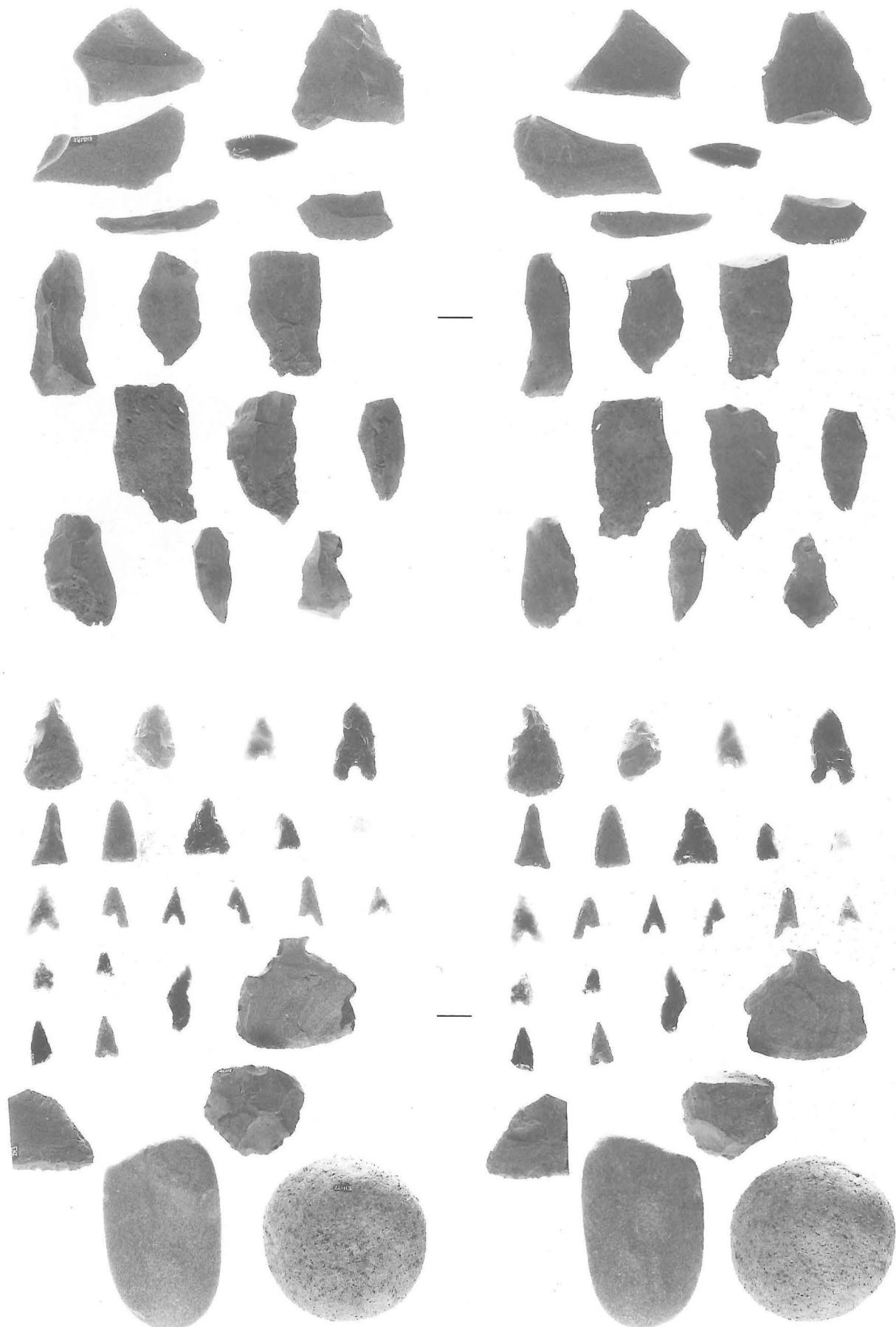
第15・16図に対応、左：表面、右：裏面

図版 5



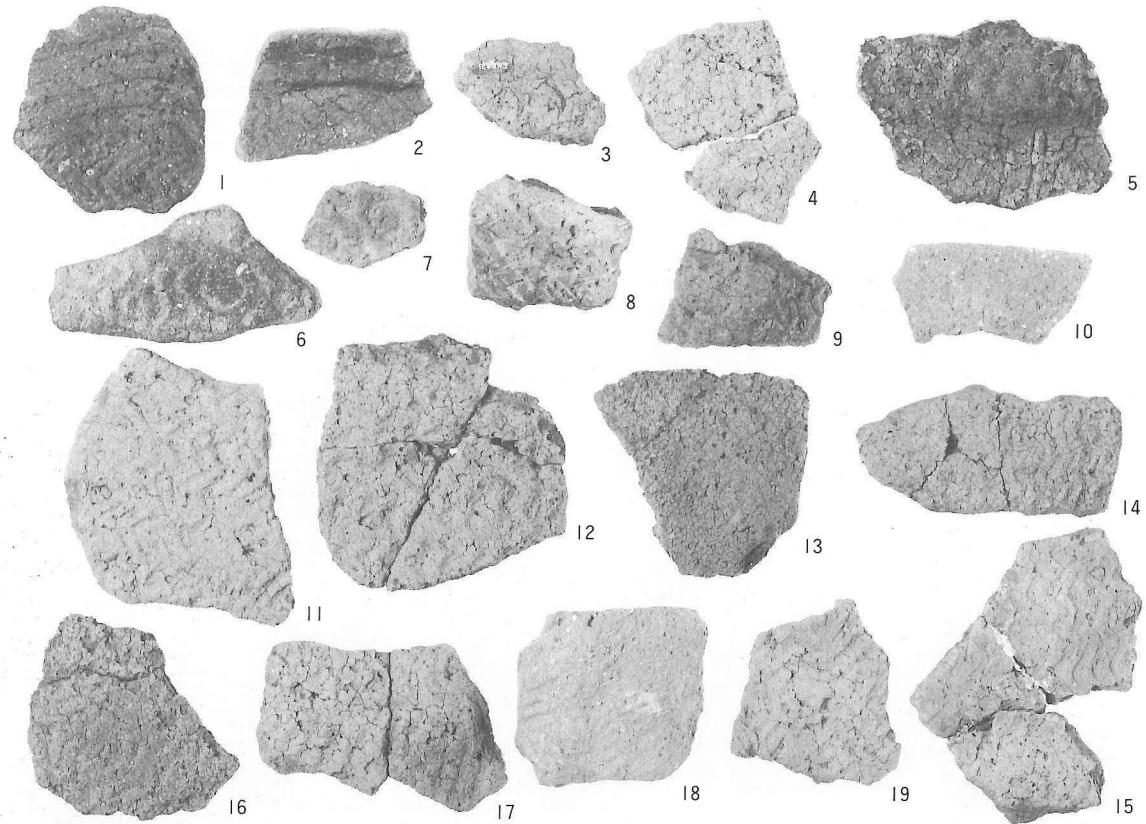
第17・18図に対応、左：表面、右：裏面

図版 6

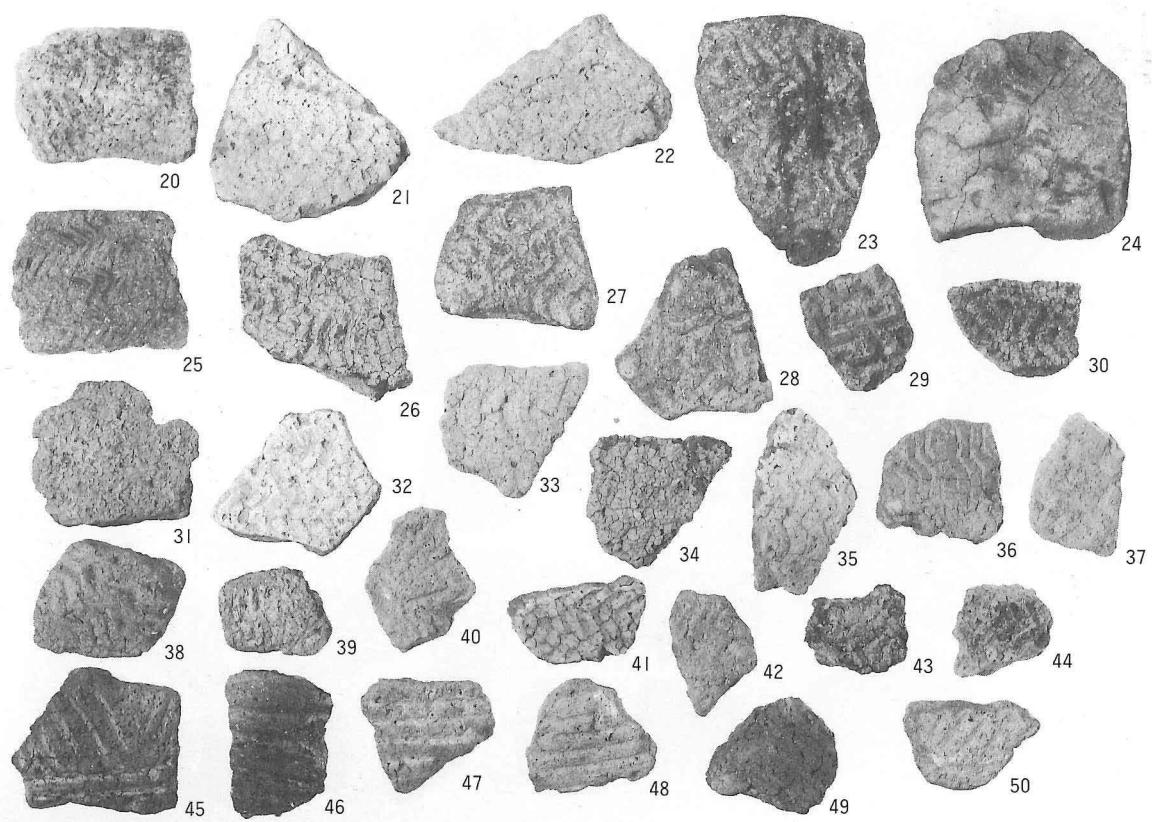


第19・20図に対応、左：表面、右：裏面

図版 7

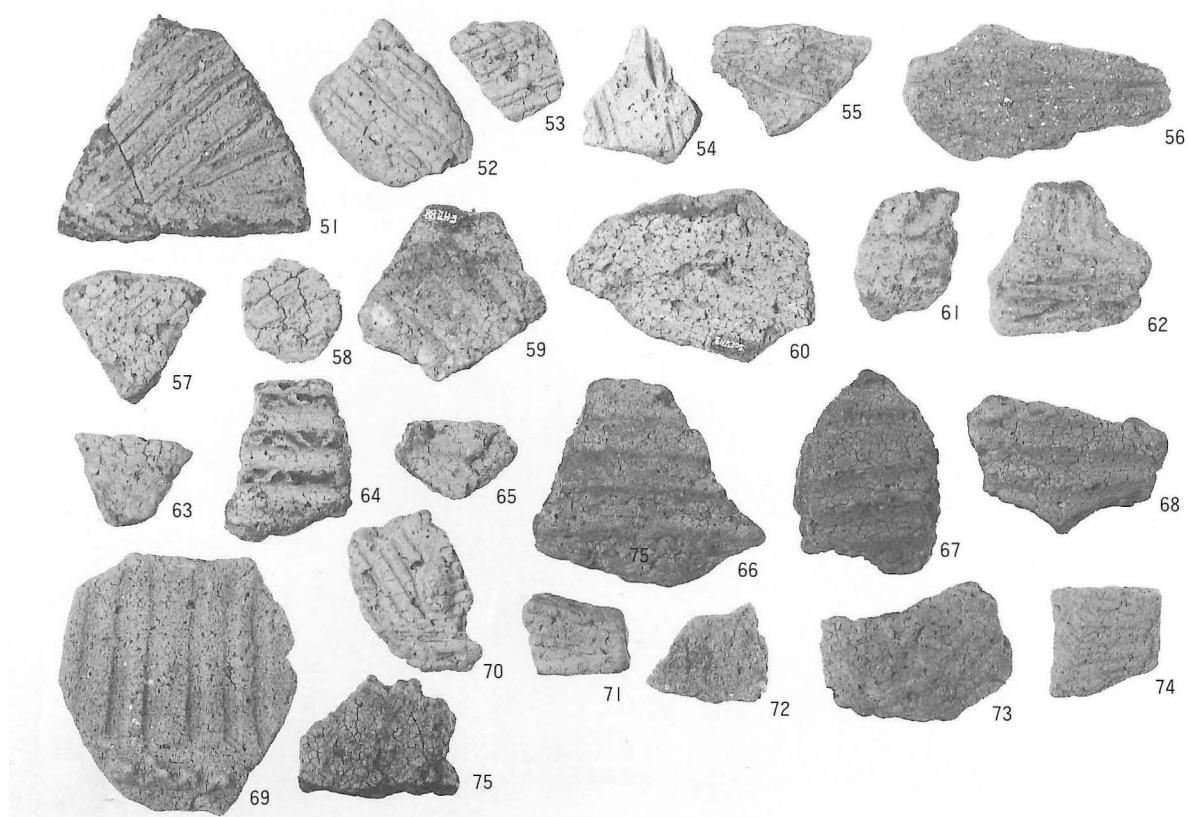


広久保遺跡出土縄文土器①

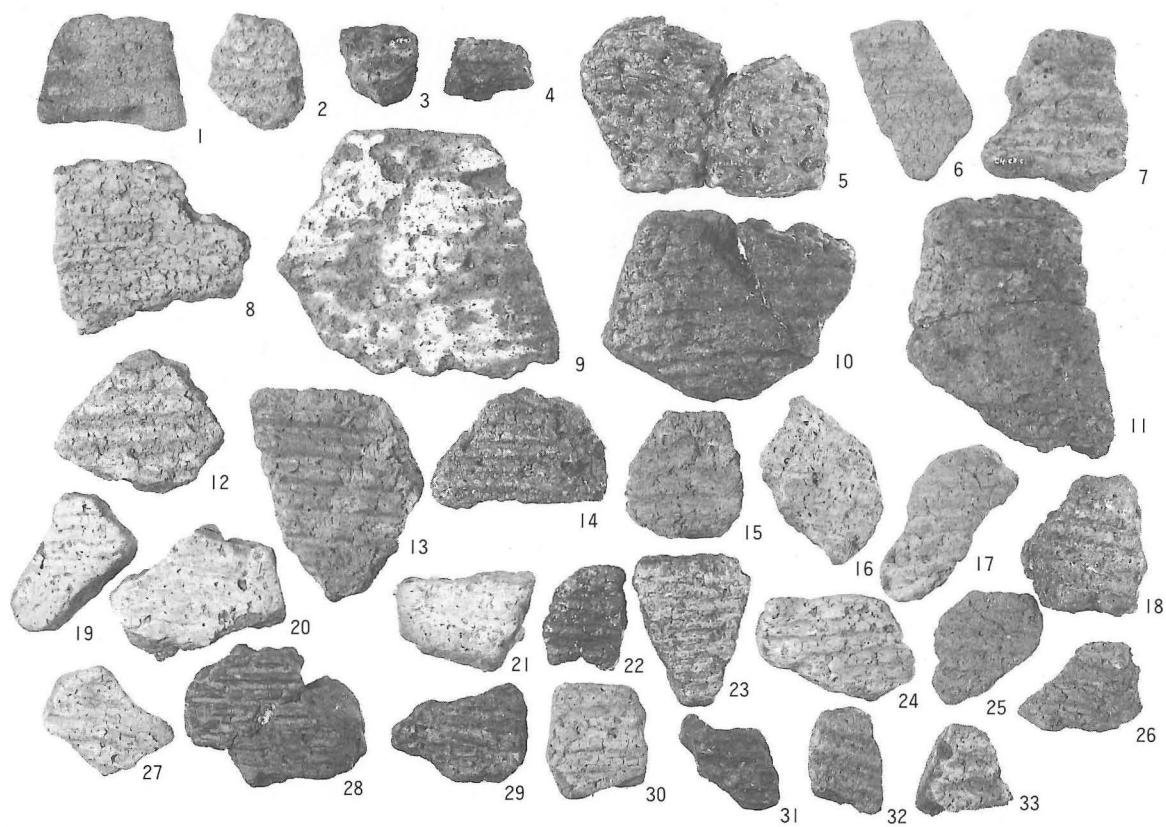


広久保遺跡出土縄文土器②

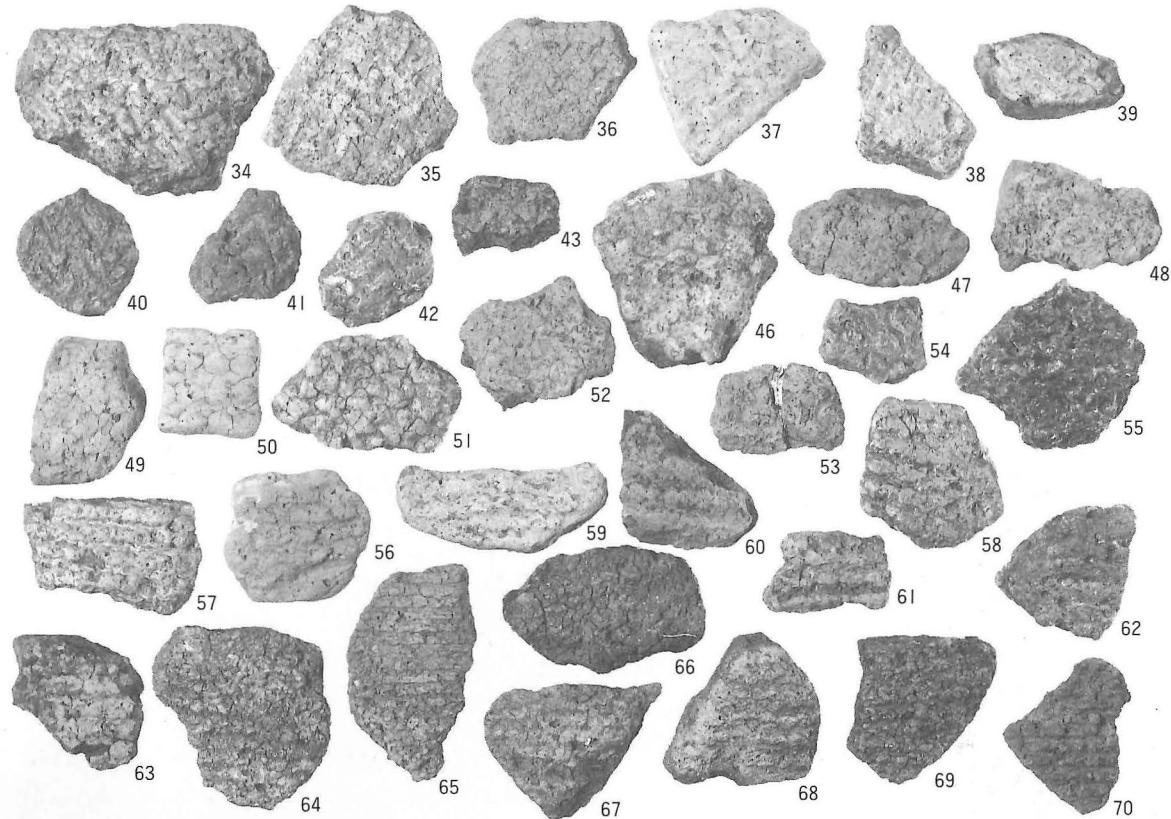
図版 8



広久保遺跡出土縄文土器③



茶園遺跡出土縄文土器①



茶園遺跡出土縄文土器②

報告書抄録

ふりがな	ひろくぼいせき							
書名	広久保遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	江迎町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	川道 寛・小松 旭・古門雅高・渡邊康行							
編集機関	江迎町教育委員会							
所在地	〒859-6101 長崎県北松浦郡江迎町長坂免104番地 TEL (0956) 66-2175							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ひろくぼ 広久保遺跡	長崎県 北松浦郡 えむかえ 江迎町	市町村 42388	遺跡番号 9	33° 18' 58"	129° 39' 24"	1998.11.19 ～ 1998.12.22	430m ²	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
広久保遺跡	包含地	縄文時代	集石土坑 煙道付き炉穴	縄文土器 石器				

江迎町文化財調査報告書 第1集

広久保遺跡

1998年3月

発行 江迎町教育委員会

長崎県北松浦郡江迎町長坂免104番地

TEL 0956-66-2175

印刷 (株)昭和堂印刷

長崎県諫早市長野町1007-2

TEL 0957-22-6000